

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

研究進捗状況報告書の概要

1 研究プロジェクト

学校法人名	東京理科大学	大学名	東京理科大学
研究プロジェクト名	医薬資源の実用化を目指した橋渡し研究拠点の形成		
研究観点	研究拠点を形成する研究		

2 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

本学には多くの貴重な創薬シーズが集積している。しかし、医療機関を持たないために、基礎研究の成果を臨床現場に十分に還元できていない。本学の基礎研究の成果を社会に還元し、また橋渡し研究（TR）に関わる人材の育成のために、医療機関と連携した TR を強力に推進する研究拠点の形成は、極めて重要である。本プロジェクトでは、学内の他の研究グループや医療機関と連携・協力して、本学が保有するシーズ、医療機関が望むニーズ、ドラッグリポジショニング候補薬物（併せて以下、医薬資源）に対する TR、具体的には、1）新規治療ターゲット分子の探索と核酸やペプチドを用いた新規創薬を加速する。2）ドラッグリポジショニングによる既存薬の適応拡大を図る。3）これら医薬資源に関する臨床試験を実施する TR プラットホームを構築する。4）1）～3）の国際化を図る。加えて、将来 TR を担う若手研究者、学生を育成する。以上により、医療機関を持たない薬系・理工系大学における基礎研究に立脚した新しい TR 拠点形成のモデルケースとなることを目指す。

3 研究プロジェクトの進捗及び成果の概要

上記目的を達成するため、1、2年目は、研究体制（センター長：樋上賀一）を構築し、研究基盤の整備を行った。同時に、年2回のペースでシンポジウム/研究交流会を開催して、他の医療機関との連携をすすめ、共同研究の芽を育てた。また1年目の後半からハワイ大学がんセンターと交流、両大学で共同シンポジウムを1回ずつ開催し、国際共同 TR がスタートした。3年目には TR センター内での雑駁な研究課題を、国際性、実用化、シナジー効果という観点から、1）ハワイ大学との国際共同 TR、2）創傷治癒促進薬の開発、3）漢方薬の有効利用に繋がる TR、4）難治性乳がん制御研究、5）自己免疫疾患、アレルギー疾患の発症機序解析と治療法開発、6）オートファジー/細胞老化を標的とした新規治療薬の開発、の6テーマを選定した。加えて、センター長を中心に医薬品医療機器総合機構との連携に関する協議を開始した。最初の2年間で広げた共同 TR の芽は海外にも及び、学内での TR プラットホーム、国内学外医療機関と連携した TR プラットホーム、国外医療機関と連携した TR プラットホームを構築できた。残りの2年間は集約した6課題および3年間で申請した19件の特許を中心に、構築した3種の TR プラットホームを利用した研究成果の収穫時期に当たる。これまでの3年間は概ね順調に進捗している。

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

**平成 26 年度選定「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」
研究進捗状況報告書**

1 学校法人名 東京理科大学 2 大学名 東京理科大学

3 研究組織名 トランスレーショナルリサーチセンター

4 プロジェクト所在地 千葉県野田市山崎 2641

5 研究プロジェクト名 医薬資源の実用化を目指した橋渡し研究拠点の形成

6 研究観点 研究拠点を形成する研究

7 研究代表者

研究代表者名	所属部局名	職名
樋上 賀一	薬学部生命創薬科学科	教授

8 プロジェクト参加研究者数 20 名

9 該当審査区分 理工・情報 生物・医歯 人文・社会

10 研究プロジェクトに参加する主な研究者

研究者名	所属・職名	プロジェクトでの研究課題	プロジェクトでの役割
小茂田 昌代	薬学部・教授	疥癬治療薬イベルメクチン新規投与法の臨床研究	臨床試験プロトコール作成の支援と臨床試験の実施
鳥越 秀峰	理学部・教授	新規化学修飾核酸を用いたアンチセンス核酸医薬の開発	アンチセンス核酸の設計とアンチセンス核酸投与による標的遺伝子の発現抑制効果解析
西山 千春	基礎工学部・教授	化合物ライブラリーを用いた抗アレルギー剤探索及び転写因子機能解析	アレルギーや自己免疫疾患に関わる細胞機能を調節する物質の評価
花輪 剛久	薬学部・教授	電子線架橋による新規ハイドロゲル調製と評価	新規素材の製剤化とその物性解析、動物実験による薬効評価
浜田 知久馬	工学部・教授	医薬研究におけるデザインと統計解析に関する研究	臨床試験における統計学的解析
東 達也	薬学部・教授	ドラッグリポジショニングによる抗うつ・抗不安薬の開発	LC-MS を用いた内因性低分子のレベル変動解析に基づく薬効評価
樋上 賀一	薬学部・教授	ドラッグリポジショニングによる肥満症治療薬・代謝改善薬の開発	病理学的手法による薬効評価

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

廣田 孝司	薬学部・教授	癬治療薬イベルメクチン新規投与法の臨床研究	被験者組織やモデル動物を用いた薬効評価と被験物質の動態解析
和田 猛	薬学部・教授	ドラッグリポジショニングにおけるリード化合物の構造改変・最適化	構造活性相関に基づくドラッグデザインと合成
秋本 和憲	薬学部・准教授	ドラッグリポジショニングによる抗がん剤の開発	分子生物学的手法による創薬標的の探索
大塚 英典	理学部・准教授	3次元培養法の開発と細胞の高機能化、創薬・診断への適用	3次元培養による薬効機能評価
佐藤 圭子	理工学部・准教授	TP53 遺伝子の符号構造によるがん患者の予後評価系の構築	公共データベースを用いたバイオインフォマティクス解析と研究基礎データの臨床的意義付け
(共同研究機関等) 島野 仁	筑波大学大学院人間総合科学研究科・教授	糖尿病・メタボリックシンドロームの分子機構の解明	本研究プロジェクトの研究成果の代謝性疾患医療への応用とニーズの提案
松村 明	筑波大学大学院人間総合科学研究科・教授	脳腫瘍に対する治療法の開発	本研究プロジェクトの研究成果の脳神経外科領域疾患医療への応用とニーズの提案
上園 保仁	国立がんセンター中央研究所・分野長	漢方薬のがん医療への応用、がん悪液質、癌性疼痛に対する治療法の開発	本研究プロジェクトの研究成果のがん医療への応用とニーズの提案
武藤 倫弘	国立がんセンター中央研究所・ユニット長	腫瘍性疾患の分子機構の解明と診断法、治療法の開発	本研究プロジェクトの研究成果のがん医療への応用とニーズの提案
重本 和宏	東京都健康長寿医療センター研究所・研究部長	重症筋無力症・サルコペニアの分子機構の解明	本研究プロジェクトの研究成果の運動器疾患医療への応用とニーズの提案
松永 卓也	香川大学大学院医学系研究科・教授	血液系疾患の分子機構の解明と治療法、診断法の開発	本研究プロジェクトの研究成果の血液系医療への応用とニーズの提案
江口 晋	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科・教授	移植医療および人工肝臓の開発	本研究プロジェクトの研究成果の移植医療への応用とニーズの提案
下川 功	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科・教授	カロリー制限による抗老化・寿命延伸作用の解明	本研究プロジェクトの研究成果の老化関連疾患医療への応用とニーズの提案

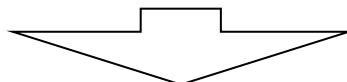
法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

<研究者の変更状況(研究代表者を含む)>

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
血液系疾患の分子機構の解明と治療法、診断法の開発	香川大学大学院医学系研究科・教授	松永 卓也	本研究プロジェクトの研究成果の血液系医療への応用とニーズの提案

(変更の時期:平成 26 年 4 月 1 日)



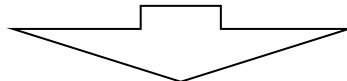
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
香川大学医学部内科学講座 教授	北海道保健福祉部 医療指導参事	松永 卓也	本研究プロジェクトの研究成果の血液系医療への応用とニーズの提案

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
疥癬治療薬イベルメクチン新規投与法の臨床研究	薬学部・教授	廣田 孝司	被験者組織やモデル動物を用いた薬効評価と被験物質の動態解析

(変更の時期:平成 27 年 3 月 31 日)



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
退職			

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

11 研究進捗状況(※ 5枚以内で作成)

(1) 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

本学は 8 学部 33 学科で構成される本邦でも有数の理工系総合大学であり、長年の多岐にわたる優れた基礎研究により未来の医療に貢献しうる多くの貴重な創薬シーズが集積している。しかし、医学部や附属病院がないために、基礎研究の成果を臨床現場に十分に還元できていない。本学の持つ膨大な基礎研究の成果を社会に還元し、また橋渡し研究 (TR) に関わる人材の育成のためにも、医療機関と連携した TR を強力に推進する研究拠点の形成は、極めて重要である。本プロジェクトでは、筑波大学や長崎大学、国立がん研究センター研究所さらにハワイ大学がんセンターなど国内外の医療機関と連携・協力して、本学が保有するシーズ、医療機関が望むニーズ、ドラッグリポジショニング候補薬物 (併せて以下、医薬資源) に対する TR、さらに、これら医薬資源に関する臨床試験の実施を支援し、加えて、将来 TR やレギュラトリーサイエンスを担う若手研究者、学生の育成および国際化を目的とする。以上により、医療機関を持たない薬系・理工系大学における基礎研究に立脚した新しい TR 拠点形成のモデルケースとなることを目指す。

具体的な研究および活動内容は以下の 1) ~ 4) となる。

- 1) 新規治療ターゲット分子の探索と核酸やペプチドを用いた新規創薬を加速する。
- 2) ドラッグリポジショニングによる既存薬の適応拡大を図る。
- 3) これら医薬資源に関する臨床試験の実施を支援する TR プラットホームを構築する。
- 4) 上記 1) ~ 3) の国際化を図る。

(2) 研究組織

研究プロジェクトでは、センター長 (樋上賀一) を中心に、新規治療・予防薬や診断薬などの標的分子を探索する『探索グループ (西山、深井、佐藤 (圭)、秋本ら』、医薬品の創製などを研究する『創薬グループ (和田、花輪、大塚、鳥越ら』、細胞および実験動物レベルで治療薬や診断薬の評価、薬物動態を解析する『薬効・機能評価グループ (岡、東、吉澤、樋上、磯濱ら』、知的財産権の調査、確保の支援、臨床試験業務の支援を行なう『臨床試験グループ (小茂田、佐藤 (嗣)、浜田ら』からなる『コア部門』を組織した。さらに、学外の医療系機関に所属する客員研究員のニーズに対応するニーズ対応研究者を流動共同研究者として学内公募し、2名を採用した。また、将来の TR を担う若手研究者育成のため3年間で3名の RA を採用した。

(3) 研究施設・設備等

研究施設:

- ① 野田校舎 10 号館 3F TR センター実験室(使用総面積・110 m²)
- ② 野田校舎薬学部 15 号館の一部(使用総面積・2,037 m²)
- ③ 野田校舎理工学部 6 号館 3F、4F 佐藤研究室(使用総面積・72 m²)
- ④ 葛飾校舎研究棟基礎工学部 11F 西山研究室(使用総面積・133 m²)
- ⑤ 葛飾校舎管理棟工学部 4F 浜田研究室(使用総面積・157.73 m²)
- ⑥ 神楽坂校舎理学部 5 号館 3F、大塚および鳥越研究室(使用総面積・221 m²)

研究設備:

- ① 蛍光・発光 in vivo イメージングシステム (整備年度・平成 26 年度): 年間約 100 時間使用
- ② 生体-マテリアル相互作用解析システム (整備年度・平成 27 年度): 年間約 500 時間使用

(4) 進捗状況・研究成果等 ※下記、13及び14に対応する成果には下線及び*を付すこと。

<現在までの進捗状況及び達成度>

1、2 年目は、前述の 4 つの研究グループ (探索、創薬、薬効・機能評価、臨床試験) からなる研究体制を構築し、研究基盤の整備を行った。また、臨床試験グループにおいて、本学を中心とした臨床試験を開始した。同時に、年 2 回のペースでシンポジウム/研究交流会を開催して、筑波大学など他の医療機関との連携をすすめ、共同研究の芽を育てた。1 年目の後半からハワイ大学がんセンターとの交流がスタートして、両大学で共同シンポジウムを 1 回ずつ開催し、MTA や共同研究契約を締結後、国際共同 TR をスタートした。3 年間の活動で、学内での TR プラットホーム、国内医療機関、特に筑波大学と連携した TR プラットホーム (筑波大学は平成 29 年度「橋渡し研究戦略的推進プログラム (1 次公募)」に採択された)、国外医療機関 (ハワイ大学がんセンター) と連携した TR プラットホームが構築できた。また、下記のごとく優れた研究により、計 19 件の特許を申請した。3 年目には TR センター内での雑駁な研究課題を、国際性の高い

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

研究テーマ、実用化に近づいている研究テーマ、シナジー効果の高い研究テーマという観点から、1) ハワイ大学との国際共同 TR、2) 創傷治癒促進薬の開発、3) 漢方薬の有効利用に繋がる TR、4) 難治性乳がん制圧研究、5) 自己免疫疾患、アレルギー疾患の発症機序解析と治療法開発、6) オートファジー/細胞老化を標的とした新規治療薬の開発、の6テーマを選定した。これまでの3年間は概ね順調に進捗している。

<特に優れた研究成果>

【探索グループ】

西山らは、樹状細胞やマクロファージ、破骨細胞など単球系細胞と、顆粒球系細胞であるマスト細胞の遺伝子発現を解析し、これらの細胞機能に重要な分子群の発現に転写調節因子 PU.1 が寄与しており、標的遺伝子を直接転写活性化するケース、パートナー分子の発現を誘導するケース、マスターレギュレーター発現を介して下流の遺伝子発現を誘導するケースなど、様々なシステムが働いていること、さらにその抑制により T 細胞応答を調節し得ることを示した (*西山論文 1, 2, 4, 5, 6, 9, 10, 14)。また、食品成分や天然物、微生物由来の低分子化合物から樹状細胞やマスト細胞の機能を修飾する物質を探索し、複数の有効物質を見出した。それらの一部については、作用点を分子レベルで明らかにすると共に、マウスにおいて炎症性疾患やアレルギー疾患の病態改善に有効であることを示した。

深井らは、小児がんの1つである神経芽腫の緩和かつ高効率な治療法開発を目指し、ビタミン A 酸とテネイシン C 由来インテグリン活性化ペプチド TNIIIA2 との併用が、N-MYC タンパク質の分解に基づく神経細胞分化によって神経芽腫細胞の悪性形質を著しく低下し得ることを、細胞およびマウスモデルを用いて見出した。MYC タンパク質は酵素活性をもたない転写因子であるため、標的化は困難と考えられていた。しかし本研究により、MYC タンパク質の生理的分解系を活性化することで、その細胞内レベルを著しく低下させることに成功した (*深井論文 2)。また、TNIIIA2 がインテグリン活性化作用を介して、神経膠芽腫細胞の悪性形質獲得に関与している可能性を示した。更に、先に見出していたインテグリン不活性化ペプチド FNIIII14 により、上記の TNIIIA2 による悪性形質獲得を完全に阻害し、第一選択薬であるテモゾロミドの抗腫瘍効果を増強し、神経膠芽腫を皮下に移植した xenograft モデルに対して FNIIII14 の治療効果も確認した (*深井特許 2, 3, 論文 1, 4, 7, 11)。

佐藤 (圭) と 秋本らは、ゲノムデータベースに情報論的アプローチを適用して、2つの遺伝子 KMT2C および SLC20A1 の発現レベルが、エストロゲン受容体陽性患者の生存期間に関連することを明らかにした (*秋本、佐藤 (圭) 論文 1)。また、乳癌患者 1904 名のゲノムデータベース解析を行い、乳癌サブタイプのうち Basal-like 型において、様癌の進展に重要な c-Met 発現と癌幹細胞マーカーである ALDH1A3 発現とが相関すること、c-Met と ALDH1A3 を共高発現している乳癌患者は予後不良であること、ALDH1 陽性乳癌幹細胞の生存に c-Met が重要な役割を果たすこと (*秋本学会発表 24)、癌特異的に発現が亢進している解糖系代謝分子 GLO1 分子が ALDH1 陽性乳癌の生存に関わること (*秋本学会発表 18, 21, 25)、GLO1 が aPKC と複合体を形成し、協同的に働き ALDH1 陽性癌幹細胞の生存に深く関わること (*秋本学会発表 2, 7, 13, 27)、さらに aPKC が解糖系分子 X の遺伝子発現制御を介して、ALDH1 陽性癌幹細胞の生存に関わることを明らかとした (*秋本学会発表 3, 4, 9, 15, 17, 29)。加えて、Basal-like 型乳癌で aPKC と X の遺伝子発現が相関すること、aPKC、X、ALDH1A3 遺伝子発現が共に高い患者が予後不良であることを明らかにした (*秋本学会発表 1, 4)。

【創薬グループ】

和田らは、siRNA に結合し、肝臓へのデリバリー機能を有するビタミン E 修飾ネオマイシン誘導体を合成し、マウス肝がん細胞への取り込みと標的遺伝子発現抑制効果を確認した (*和田論文 6)。また、新規核酸医薬として有望なリン原子の立体化学が厳密に制御されたボラノホスフェート型核酸の合成を行い、従来のホスホロチオエート型核酸よりも優れた標的親和性を有することを明らかにした (*和田論文 9, 特許 2)。また、核酸医薬として有用な、5 位修飾ピリミジン塩基およびホスフェート結合と立体が制御されたホスホロチオエート結合を適切な場所に配置した PO/PS キメラ型核酸の立体選択的合成法を確立し、その性質を明らかにした (*和田論文 4, 特許 1)。さらに、siRNA の主溝に選択的に結合し、siRNA を安定化するオリゴ糖、オリゴジアミノマンノース 4 量体 (ODAMan4) の合成に成功した (*和田論文 6)。加えて、ODAMan4 よりもさらに効果的に siRNA の安定化を向上できるオリゴジアミノガラクトース 4 量体 (ODAGa14) を合成した (*

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

和田論文1)。

花輪らは、セルロース誘導体などを電子線架橋することによりハイドロゲルを調製し、その物性と機能評価を行い、新規経皮吸収型製剤素材としての有効性を示した。また電子線架橋する際、照射量の調整により、薬物放出量の制御が可能であることを明らかにした。さらに、生体-マテリアル相互作用解析システムにより高分子-生体成分間の相互作用について検討した(*花輪論文1,3)。加えて、大腸癌切除術後の吻合部補強のため新規粘着性製剤を種々調製し、その物性と機能評価を行い、新規吻合部補強剤への応用の可能性を示した。

大塚らは、肝細胞機能安定化を目的として、ハイドロゲル内部にガラクトース構造を導入した糖鎖含有ゲルを調製し、スフェロイド形成に基づく細胞機能化促進効果(*大塚論文7)を確認した。また、効率的な組織再生を実現するために、インシュリン様成長因子(IGF)を担持させたインジェクタブル型相互侵入高分子網目ゲル(CH/PEG/RADA16)を調製し、軟骨細胞応答について検討し、長期にわたってIGF活性を損なうことなく、軟骨細胞の固定化が維持されることを明らかにした。また、金属錯体を連鎖状に配した高分子型遷移金属錯体が低分子遷移金属錯体に比べ、より効率的にDNAの開裂反応を誘導することを見出し、金ナノ粒子を用いたDDS手法(*大塚論文5,6)により効率的な高分子錯体の細胞内導入を達成し、また抗癌活性相関を明らかとした。

鳥越らは、皮膚創傷治癒改善を指向したアンチセンス核酸の開発を行い、従来のホスホジエステル型のみならずホスホロチオエート型アンチセンス核酸が標的タンパク質の発現抑制効果を有することを明らかにした(*鳥越論文1)。次に、2型糖尿病における皮膚創傷治癒改善を指向したアンチセンス核酸の開発を行い、ホスホジエステル骨格からホスホロチオエート骨格に変換したアンチセンス核酸が、標的タンパク質(Foxo1)の有意な発現抑制効果を有すること、さらに、同アンチセンス核酸を2型糖尿病モデルマウスの損傷部位に塗布したところ、損傷面積を2週間後に約40%にまで減少させることを明らかにした。また、膀胱癌のバイオマーカー遺伝子の発現を抑制するアンチセンス核酸を膀胱癌細胞株に投与したところ、非常に低用量(2 nM)で標的遺伝子の発現を約30%にまで減少させることに成功した。

【薬効・機能評価グループ】

岡らは、生理活性ペプチドGLP-2が治療抵抗性モデルマウスでも抗うつ作用を示すことを報告した(*岡論文11)。次に臨床適用を目指すために経鼻投与により中枢作用を発現できるようにGLP-2を製剤化あるいは誘導体化し、その中枢移行性と中枢作用について検討した。GLP-2溶液に可溶化剤と包接剤を添加した3剤混合溶液の経鼻投与により、抗うつ様作用が認められた(*岡論文4)。しかし、本製剤は細胞障害性や異物の脳移行も疑われたため、新たに膜透過促進配列とエンドソーム脱出促進配列を付加したGLP-2誘導体を作製して経鼻投与したところ、治療抵抗性モデルマウスでも抗うつ様作用が認められた(*岡論文3)。現在、本誘導体化法の国内及び外国特許を出願中である(*岡特許1,2)。

代表的なGABA作動性神経活性ステロイドであるallopregnanolone(ALLO)の脳内レベルを上昇させる化合物(SBSS)が、不安・睡眠障害、月経前症候群、過敏性腸症候群など様々な疾患の治療や予防に有用と期待されている。東らはドラッグリポジショニング手法による抗不安薬の開発を究極の目標に、新規に開発したLC/ESI-MS/MSアッセイ法を用いて既存薬からSBSSを探索した(*東論文4,11)。その結果、fluoxetine、clozapine、olanzapineが強力なSBSSであることを確認し、新たにmianserin、mirtazapineもSBSSである可能性を見出した。また、吉澤らはALLOと類似構造を持つalfaxaloneが抗不安作用を示すこと、さらにALLO生合成亢進薬ジルチアゼムも抗不安薬として有用である可能性を示した。

樋上らは、抗老化・寿命延伸効果を示すカロリー制限(CR)の分子メカニズムを解析し、脂肪酸合成系の主要な転写因子であるSrebp-1cがCRの寿命延伸に重要であることを見出した。また、CRマウスの脂肪組織では、Srebp-1c依存的に、脂質利用やミトコンドリア生合成の亢進、酸化ストレスの抑制が見られること、このようなSrebp-1c依存性の作用は他臓器では観察されない事を示した(*樋上論文1,5、学会発表31)。さらに、Srebp-1cはミトコンドリアシグナルペプチダーゼの1つであるMIPEPを介して、ミトコンドリア機能の活性化や質の維持に重要であることを発見した(*樋上学会発表30)。一方、肥満症マウスの脂肪組織では、カテプシンL活性低下を起点としたカテプシンB活性の亢進を伴うリソソーム機能障害によりオートファゴソームが蓄積していること、このリソソーム異常により細胞老化様表現型の増悪、インフラマソームの活性化、脂質分解の異常が生ずることを明らかにした(*樋上論文2、図書1)。加えて、脂肪細

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

胞株や肝細胞株において、トレハロース処理が、転写因子 TFEB や NRF2 の活性化を介してオートファジーの亢進や酸化ストレス抑制を誘導し、細胞機能維持に関わることを見出した (*樋上学会発表 6, 7)。

磯濱らは、ドライアイやドライマウスなど乾燥症状を呈するシェーグレン症候群患者約 6 割の血清中に水チャネル AQP5 に対する自己抗体を見出した。また、その一部には AQP5 に対する中和活性が認められ細胞膜水透過性を低下させること、本抗体が AQP5 の機能を阻害することで、外分泌機能異常を惹起する可能性を示した。

【臨床試験グループ】

小茂田らは、疥癬患者を対象としたイベルメクチン全身浴法の安全性と有効性を検討する臨床試験を実施した。その結果、実施した全 6 症例において安全性、有効性とも確認され、体内曝露に起因する副作用報告のためイベルメクチン内服治療が禁止されている妊婦や 15kg 未満の小児においても有用であることを示した (*小茂田論文 1, 2, 3, 4, 5)。また、臨床試験支援システム OpenClinica を活用し、既存のアタマジラミ症に対する薬剤に対して 100% 近く薬剤耐性率を示す沖縄地区において、イベルメクチンローションに対する臨床研究を実施した。その結果、薬剤耐性アタマジラミ症に対して既存薬に比べてイベルメクチンローションの顕著な優位性を証明した (*小茂田学会発表 1, 2, 7, 9, 16)。

佐藤らは、日本でのスタチン使用を曝露とする薬剤疫学研究において healthy adherer bias が生じ得るかを検討するため、スタチン治療のアドヒアランスと予防的検査との関連を検討するコホート研究を行った。日本医療データセンターのレセプトデータベースを利用し、2005 年～2015 年にスタチンが開始された 20 歳以上の患者を対象とし、適格患者 (アドヒアランス良好群 41925 人 + 不良群 5603 人 = 47528 人) について解析した。その結果、アドヒアランス良好群は不良群より予防的検査をより受けていたが、調整後のハザード比は 1 に近づき、年齢のみで調整した値とほぼ同じであった。日本では、調整困難な healthy adherer bias は存在しないことが示唆された。

浜田らは、がん臨床研究における遺伝子データ解析において、罰則付き回帰による生存時間予測モデルを構築した。また罰則付き回帰を用いた用量の個別化について研究を行った結果、罰則付き回帰分析を行うことで、最適な用量を選択できる確率が高くなることを示した。

<問題点とその克服方法>

TR の本質は様々な研究成果を実用化に繋げることでありということ、2 年間はテーマを限定せず研究個人もしくは研究グループにおいて実用化を目指し、自由に研究を行ってきた。しかし、自己評価においても、外部評価においても、その自由な研究から得た成果が雑駁であるとの指摘を受けた。そこで、3 年目の後半から、実用化を加速化するために、国際性、実用化、シナジー効果という観点から、前述した 6 テーマに集約することとした。

購入した in vivo イメージングシステムを薬学部動物舎内の SPF 域に設置した。その結果、利用者が限定されたために十分に利用されていない。今後は研究の進展に伴い利用者は増加すると期待できるが、利用者講習会の開催回数を増やし、また、動物施設管理者との協議の上、より利便性の良い使用法・管理法を検討する。

<研究成果の副次的効果(実用化や特許の申請など研究成果の活用の見直しを含む。)>

【特許について】

深井文雄

1. 深井文雄、伊豫田拓也、細胞の転移または浸潤抑制剤、出願番号 JP2014-057592
2. *深井文雄、兒玉浩明 (佐賀大学)、抗がん剤の活性増強剤、特許第 5924593
3. *深井文雄、山本哲哉 (筑波大学)、兒玉浩明 (佐賀大学)、PDGF 依存性細胞増殖抑制剤、PDGF 依存性細胞増殖の抑制法、細胞分散抑制剤、細胞分散の抑制法、テモゾロミド活性増強及び抗腫瘍剤、出願番号 PCT/JP2015/067651

大塚英典(他 5 件、計 10 件)

1. 大塚英典、松隈大輔、松田範昭、生分解性インジェクタブルゲル、特願 2015-165204 (2015. 8. 24).
2. 大塚英典、松隈大輔、自己組織化ペプチド修飾キトサンナノ会合体の合成とプロテインデリ

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

バリーへの応用、PCT/JP2015/73745(2015. 8. 24).

3. 大塚英典、松隈大輔、村松佑紀、細胞内送達用高分子担体、PCT/JP2015/056364(2015. 3. 4).
4. 大塚英典、松隈大輔、金属ナノ粒子の調製方法及び金属ナノ粒子、W02015/079788(2015. 6. 4).
5. 大塚英典、松隈大輔、自己組織化ペプチド修飾キトサン会合体の合成とプロテインデリバリーへの応用、特願 2014-231447 (出願:2014. 11. 14).

鳥越秀峰

1. 鳥越秀峰、立澤桜子、標的タンパク質の量の低減のためのポリペプチド、単離された核酸、組み換えベクター、及び形質転換体、特願 2014-045698 (2014. 3. 7).PCT 出願(2015. 3. 7).

岡淳一郎

1. *Chikamasa Yamashita, Jun-Ichiro Oka, Michiko Horiguchi, Sachie Hamada. Centrally-acting peptide derivative, and pharmaceutical composition. 15/507, 403 (2017. 2. 28)
2. *山下親正, 岡淳一郎, 堀口道子, 濱田幸恵. 中枢作用性ペプチド誘導体及び医薬組成物. 特願 2014-184436 (2014. 9. 10), PCT/JP2015/074962(2015. 9. 2), WO 2016/035820 (2016. 3. 10).

和田 猛

1. 和田 猛、吉野怜次郎、原倫太郎、RNA ハイブリッド形成用核酸オリゴマー、特願 2016-046181 (2016. 3. 9 出願)
2. 和田 猛、齋藤竜也、石井友香、額賀陽平、重合性化合物、化合物、及び、ボラノホスフェートオリゴマーの製造方法、特願 2016-221656 (2016. 11. 14 出願)
3. 和田 猛、新井浩一郎、2'-O-修飾 RNA、特許第 6093924 号 (2017. 2. 24 登録)

<今後の研究方針>

前述のごとく、研究テーマが雑駁であるという自己評価および外部評価をうけて、3年目には、国際性、実用化、シナジー効果という観点から、6テーマに集約した。残りの2年間は、研究成果の収穫時期に当たる。今後は、上記 22 件の特許や集約した 6 課題を中心に、4つの研究グループが TR の過程の上流から下流まで様々な形で絡むことで、研究を加速化する。そして、構築した 3 種の TR プラットホームを利用して研究成果をあげて、構築した 3 種の TR プラットホームの有用性を証明する。

加えて、シンポジウム・研究発交流会、国際シンポジウムなどを開催する。同時に、海外出張や海外での短期・中期研修を可能とする学内外の予算に申請・獲得する。そして、若手研究者の国際学会発表や海外での研修を通じて、若手研究者の育成、国際化に役立てたい。

<今後期待される研究成果>

前述したように、TR センターの臨床試験グループを中心とした学内での TR プラットホームが構築された。このプラットホームにより介入研究で侵襲性の低い探索的臨床研究は、医療機関との連携により可能となった。さらに様々な探索的介入研究や検証的な臨床研究の実施に向けて、各々筑波大学つくば臨床医学研究開発機構やハワイ大学がんセンターと連携した TR プラットホームで実施が可能となった。今後は、この 3 種類のプラットホームを、その TR の特徴により使い分けることで、本学における TR の加速化が期待できる。

<自己評価の実施結果及び対応状況>

プロジェクトの 3 年終了時に当たり、各グループで自己評価を実施した。5年で 5 件特許申請を目標としていたが、特許出願が 19 件にもおよび、すべてのグループ長から、『ほぼ中間目標を達成しており、大きな問題は認められていない』との回答を得た。ただ、実用化のために企業との共同研究にすすんだケースは『14 その他の研究成果等』で示したように、まだ 3 件と少なく、グループ横断的な 3 種の TR プラットホームを利用した実用化を加速化していきたい。

<外部（第三者）評価の実施結果及び対応状況>

3年目の夏（平成 28 年 8 月 27 日）に実施されたアドバイザー委員会（樋上賀一（委員長）、重藤和弘（学外委員、医薬品医療機器総合機構・理事）、関谷剛男（学外委員、（公財）佐々木研究所・所長）、若林敬二（学外委員、元国立がん研究センター・所長、現静岡県立大学・教授）、北村大介（学内委員、生命医科学研究所・教授）、菊池明彦（学内委員、基礎工学部・教授）、オ

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

ブザーバー：浅島 誠（副学長、総合研究院院長）、本間芳和（総合研究院副院長）、場所：神楽坂キャンパス／富士見校舎5階会議室）が開催された。その際の主要なコメントは以下の3点であった。1）研究内容が雑駁である、2）理科大ならではのTRとは何か、3）早めに企業や医療機関と連携すべき。1）に関しては、前述のごとく6つのテーマに集約した。また2）に関しては未だ明確な回答を持っていない。しかし、医療機関を持たない事で、前述の3つのTRプラットフォームを課題の特徴によって使い分けられることができることが、理科大、医療機関をもたない理工系総合大学の優位性の1つではないかと考える。3）に関しては、本学URAと連携して、またTRセンター自体が学内研究グループや学外の医療機関との連携の窓口になるべく、活動していきたい。

12 キーワード(当該研究内容をよく表していると思われるものを8項目以内で記載してください。)

- (1) 核酸医薬 (2) ペプチド医薬 (3) ドラッグリポジショニング
 (4) 漢方薬 (5) TRプラットフォーム (6) 国際化
 (7) _____ (8) _____

13 研究発表の状況(研究論文等公表状況。印刷中も含む。)

上記、11(4)に記載した研究成果に対応するものには*を付すこと。

<雑誌論文>

【探索グループ】

西山千春

1. *Umazume, A., Kezuka, T., Matsuda, R., Usui, Y., Takahashi, H., Yamakawa, N., Yashiro, T., Nishiyama, C., and Goto, H. Role of PU.1 expression as an inflammatory marker in experimental autoimmune uveoretinitis. *Ocular Immunology and Inflammation*. in press. (査読有)
2. *Yashiro, T., Kasakura, K., Oda, Y., Kitamura, N., Inoue, A., Nakamura, S., Yokoyama, H., Fukuyama, K., Hara, M., Ogawa, H., Okumura, K., Nishiyama, M., and Nishiyama, C. The hematopoietic cell-specific transcription factor PU.1 is critical for expression of CD11c. *Int. Immunol.* in press. (査読有)
3. Honjo, A., Nakano, N., Yamazaki, S., Hara, M., Uchida, K., Kitaura, J., Nishiyama, C., Yagita, H., Ohtsuka, Y., Ogawa, H., Okumura, K., and Shimizu, T. Pharmacological inhibition of Notch signaling suppresses food antigen-induced mucosal mast cell hyperplasia. *J. Allergy Clin. Immunol.* in press. (査読有)
4. *Yashiro, T., Hara, M., Ogawa, H., Okumura, K., and Nishiyama, C. Critical role of transcription factor PU.1 in the function of the OX40L/TNFSF4 promoter in dendritic cells. *Sci. Rep.* 6:34825 (2016). (査読有)
5. *Miura, R., Kasakura, K., Nakano, N., Hara, M., Maeda, K., Okumura, K., Ogawa, H., Yashiro, T., and Nishiyama, C. Role of PU.1 in MHC class II expression via CIITA transcription in plasmacytoid dendritic cells. *PLoS One* 11:e0154094 (2016). (査読有)
6. *Yashiro, T., Kubo, M., Ogawa, H., Okumura, K., and Nishiyama, C. PU.1 suppresses Th2 cytokine expression via silencing of GATA3 transcription in dendritic cells. *PLoS One* 10: e0137699 (2015). (査読有)
7. Yamazaki, S., Nakano, N., Honjo, A., Hara, M., Maeda, K., Nishiyama, C., Kitaura, J., Ohtsuka, Y., Okumura, K., Ogawa, H., and Shimizu, T. The transcription factor Ehf is involved in TGF- β -induced suppression of Fc γ RI and c-kit expression and Fc γ RI-mediated activation in mast cells. *J. Immunol.* 195: 3427-3435 (2015). (査読有)

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

8. Ito, T., Egusa, C., Maeda, T., Numata, T., Nakano, N., Nishiyama, C., and Tsuboi, R. IL-33 promotes MHC class II expression in murine mast cells. *Immun. Inflamm. Dis.* 3: 196-208 (2015). (査読有)
9. *Nakano, N., Nishiyama, C., Yagita, H., Hara, M., Motomura, Y., Kubo, M., Okumura, K., and Ogawa, H. Notch signaling enhances FcεRI-mediated cytokine production by mast cells through direct and indirect mechanisms. *J. Immunol.* 194: 4535-4544 (2015). (査読有)
10. *Ishiyama, K., Yashiro, T., Nakano, N., Kasakura, K., Miura, R., Hara, M., Kawai, F., Maeda, K., Tamura, N., Okumura, K., Ogawa, H., Takasaki, Y., and Nishiyama, C. Involvement of PU.1 in NFATc1 promoter function in osteoclast development. *Allergol. Int.* 64:241-247 (2015). (査読有)
11. Yoshida, A., Tomita, T., Fujimura, T., Nishiyama, C., Kuzuyama, T., and Nishiyama, M.* Structure insight into amino group-carrier protein-mediated lysine biosynthesis: crystal structure of the LysZ-LysW complex from *Thermus thermophilus*. *J. Biol. Chem.* 290: 435-447. (2015). (査読有)
12. Kasakura, K., Takahashi, K., Ito, T., Hosono, A., Nunomura, S., Ra, C., Momose, Y., Ito, K., Nishiyama, C., and Kaminogawa, S. C/EBPα controls functions of mast cells. *FEBS Lett.* 588:4645-4653. (2014). (査読有)
13. Kasakura, K., Takahashi, K., Ito, T., Hosono, A., Momose, Y., Ito, K., Nishiyama, C., and Kaminogawa, S. Commensal bacteria directly suppress in vitro degranulation of mast cells in a MyD88-independent manner. *Biosci. Biotechnol. Biochem.* 78:1669-1676. (2014). (査読有)
14. *Inage, E., Kasakura, K., Yashiro, T., Suzuki, R., Baba, Y., Nakano, N., Hara, M., Tanabe, A., Oboki, K., Matsumoto, K., Saito, H., Niyonsaba, F., Ohtsuka, Y., Ogawa, H., Okumura, K., Shimizu, T., and Nishiyama, C. Critical roles for PU.1, GATA1 and GATA2 in the expression of human FcεRI on mast cells: PU.1 and GATA1 transactivate *FCER1A*, and GATA2 transactivates *FCER1A* and *MS4A2*. *J. Immunol.* 192:3936-3946 (2014). (査読有)
15. Nakamura, Y., Nakano, N., Ishimaru, K., Hara, M., Ikegami, T., Tahara, Y., Katoh, R., Ogawa, H., Okumura, K., Shibata, S., Nishiyama, C., and Nakao, A. Circadian regulation of allergic reaction by the mast cell clock. *J. Allergy Clin. Immunol.* 133:568-575 (2014). (査読有)
16. Schendzielorz, G., Dippong, M., Grünberger, A., Kohlheyer, D., Yoshida, A., Binder, S., Nishiyama, C., Nishiyama, M., Bott, M., Eggeling, L. Taking control over control: Use of product sensing in single cells to remove flux control at key enzymes in biosynthesis pathways. *ACS Synth. Biol.* 3:21-29 (2014). (査読有)

深井文雄

1. *Nagai, R., Kudo, C., Tawara, H., Fujita, M., Iyoda, T., and Fukai, F., Involvement of a peptide derived from tenascin-C in malignant progression of glioblastoma -New target for glioblastoma chemotherapy-. *Peptide Science 2016*. in press. (査読有)
2. *Asayama, T., Sasada, M., Otsuka, K., Iyoda, T., and Fukai, F., A peptide derived from tenascin-C, TNIIIA2, enhances proteasomal degradation of N-Myc and neural differentiation of neuroblastoma cells induced by all-trans retinoic acid. *Peptide Science 2016*. in press. (査読有)
3. Hagiwara, Y., Iyoda, T., and Fukai, F., Senescence induction in fibroblasts by the tenascin-C derived peptide TNIIIA2 is associated with malignant transformation of pre-malignant epithelial cells. *Peptide Science 2016*. in press. (査読有)
4. *Suzuki, H., Sasada, M., Kamiya, S., Ito, Y., Watanabe, H., Okada, Y., Ishibashi, K., Iyoda, T., Yanaka, A., and Fukai, F., The promoting effect of extracellular matrix peptide TNIIIA2 derived from tenascin-C in colon cancer cell infiltration. *Int. J. Mol. Sci.* 18(1), pii: E181 (2017). (査読有)

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

5. Imaizumi, T., Kuga, A., Iyoda, T., and Fukai, F., Participation of Membrane-Type eEF1A in Migration, Invasion, and Metastasis of Tumor Cells. *Peptide Science* 2015. 193-196 (2016). (査読有)
6. Iyoda, T., and Fukai, F., Promotion of Macrophage Foam Cell Formation by the Peptide Derived from Tenascin-C. *Peptide Science* 2015. 203-206 (2016). (査読有)
7. *Iyoda, T., Nagamine, Y., Nakane, Y., Tokita, Y., Akari, S., Otsuka, K., Fujita, M., Itagaki, K., Takizawa, Y., Orita, H., Owaki, T., Taira, J., Hayashi, R., Kodama, H., and Fukai, F., Coadministration of the FNIII14 peptide synergistically augments the anti-cancer activity of chemotherapeutic drugs by activating proapoptotic Bim. *PLoS One*. 11(9), e0162525 (2016). (査読有)
8. Kuga, A., Imaizumi, T., Iyoda, T., and Fukai, F., Membrane Expression of Eukaryotic Protein Elongation Factor (eEF) 1A and its Physiological Role. *Peptide Science* 2015. 235-238(2016). (査読有)
9. Mizunuma, T., Iyoda, T., and Fukai, F., Cell adhesion-mediated drug resistance (CAM-DR) in acute myelogenous leukemia cells and its abrogation by the antiadhesive peptide FNIII14. *Peptide Science* 2014, 261-264 (2015).
10. Iyoda, T., Kazama, M., Takeda, K., and Fukai, F., Role of the tenascin-C-derived peptide TNIIIA2 in the formation of atherosclerotic foam cell. *Peptide Science* 2014, 61-64 (2015). (査読有)
11. *Tanaka, R., Seki, Y., Saito, Y., Kamiya, S., Fujita, M., Okutsu, H., Iyoda, T., Takai, T., Owaki, T., Yajima, H., Taira, J., Hayashi, R., Kodama, H., Matsunaga, T., and Fukai, F., Tenascin-C-derived peptide TNIIIA2 highly enhances cell survival and platelet-derived growth factor (PDGF)-dependent cell proliferation through potentiated and sustained activation of integrin $\alpha 5\beta 1$. *J. Biol. Chem.* 289(25), 17699-17708 (2014). (査読有)
12. Iyoda, T., Takada, M., Fukatsu, K., Kumokoshi, S., Fujisawa, T., Shimada, T., Shimokawa, N., Matsunaga, T., Makino, K., Doi, N., Terada, H., and Fukai, F., A novel mechanism underlying the basic defensive response of macrophages against Mycobacterium infection. *J. Immunol.* 192(9), 4254-4262 (2014). (査読有)

佐藤圭子

1. *Sato, K., and Akimoto, K., Expression levels of KMT2C and SLC20A1 identified by information-theoretical analysis are powerful prognostic biomarkers in ER-positive breast cancer, *Clinical Breast Cancer*, in press (査読有)
2. Sato, K., Hara, T. and Ohya, M., A coding theoretical Approach to predict aequence changes in H5N1 influenza A virus hemagglutinin. *Proceedings of the 9th International Joint Conference on Biomedical Engineering Systems and Technologies (BIOSTEC 2016) - Volume 3: Bioinformatics (ISBN: 978-989-758-170-0)*, 159-167 (2016). (査読有)
3. 佐藤圭子、原利英、大矢雅則、H5N1 インフルエンザ A 型ウイルスヘマグルチニンレセプター結合領域の符号構造と配列予測、次世代データマイニング研究部門平成 26 年度研究成果概要集、pp 71-75, (2015). (査読無)

秋本和憲

1. *Sato, K. and Akimoto, K. Expression Levels of KMT2C and SLC20A1 identified by information-theoretical analysis are powerful prognostic biomarkers in ER-positive breast cancer *Clinical Breast Cancer*, in press (査読有)
2. Metz, P.J., Lopez, J., Kim, S.H., Akimoto, K., Ohno, S., and Chang, J.T., Regulation of Asymmetric Division by Atypical Protein Kinase C Influences Early Specification of CD8(+) T Lymphocyte Fates. *Sci. Rep.* 6:19182. (2016) (査読有)
3. Mizushima, T., Asai-Sato, M., Akimoto, K., Nagashima, Y., Taguri, M., Sasaki, K., Nakaya, M., Asano, R., Tokinaga, A., Kiyono, T., Hirahara, F., Ohno, S., and Miyagi, E., Aberrant expression of the cell polarity regulator aPKC λ/ι is associated

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

with disease progression in cervical intraepithelial neoplasia (CIN): a possible marker for predicting CIN prognosis. *Int. J. Gynecol. Pathol.* 35, 106-117 (2016) (査読有)

4. Sasaki, K., Kakuwa, T., Akimoto, K., Koga, H., and Ohno, S., Regulation of epithelial cell polarity by PAR-3 depends on Girdin transcription and Girdin-G α i3 signaling. *J. Cell Sci.* 128, 2244-22589 (2015). (査読有)
5. Osada, S.-I., Minematsu, N., Oda, F., Akimoto, K., Kawana, S., and Ohno, S., Atypical Protein Kinase C Isoform, aPKC λ , is Essential for Maintaining Hair Follicle Stem Cell Quiescence. *J. Investigative Dermatology* 135, 2584-2592 (2015). (査読有)
6. Ichikawa, Y., Nagashima, Y., Morioka, K., Akimoto, K., Kojima, Y., Ishikawa, T., Goto, A., Kobayashi, N., Watanabe, K., Ota, M., Fujii, S., Kawamata, M., Takagawa, R., Kunizaki, C., Takahashi, H., Nakajima, A., Maeda, S., Shimada, H., Inayama, Y., Ohno, S., and Endo, I., Colorectal laterally spreading tumors show characteristic expression of cell polarity factors, including atypical protein kinase C λ/ι , E-cadherin, β -catenin and basement membrane component. *Oncology Letters* 8, 977-984 (2014). (査読有)
7. Okayama, A., Miyagi, Y., Oshita, F., Nishi, M., Nakamura, Y., Nagashima, Y., Akimoto, K., Ryo, A., and Hirano, H., Proteomic analysis of proteins related to prognosis of lung adenocarcinoma. *J. Proteome Res.*, 13, 4686-4694 (2014). (査読有)

【創薬グループ】

和田 猛

1. *Hara, R. I., Maeda, Y., Sakamoto, T., Wada, T., Double-stranded RNA-binding artificial cationic oligosaccharides stabilizing siRNAs with a low N/P ratio *Org. Biomol. Chem.* 15, 1710-1717 (2017). (査読有)
2. 岡夏央、和田猛、リン原子修飾オリゴ核酸の立体選択的合成、*有機合成化学協会誌*, 74, 31-44 (2016). (査読有)
3. 和田猛、核酸医薬への化学的アプローチ、*Medchem. News.* 26, 18-21(2016). (査読有)
4. *Nukaga, Y., Oka, N., Wada, T., Stereocontrolled Solid-phase Synthesis of Phosphate/ Phosphorothioate (PO/PS) Chimeric Oligodeoxyribonucleotides on an Automated Synthesizer Using an Oxazaphospholidine-phosphoramidite Method. *J. Org. Chem.* 81, 2753-2762 (2016). (査読有)
5. Sato, K., Wada, T., One-pot conversion reactions of glycosyl boranophosphates into glycosyl phosphate derivatives via acyl phosphite intermediates. *Org. Biomol. Chem.* 14, 11092-11095 (2016). (査読有)
6. *Iwata, R., Doi, A., Maeda, Y., Wada, T. Synthesis of oligodiaminomannoses and analysis of their RNA duplex binding properties and their potential application as siRNA-based drugs. *Org. Biomol. Chem.* 13, 9504-9515 (2015). (査読有)
7. Iwata, R., Nakayama, F., Hirochi, S., Sato, K., Piao, W., Nishina, K., Yokota, T., Wada, T., Synthesis and properties of vitamin E analog-conjugated neomycin for delivery of RNAi drugs to liver cells. *Bioorg. Med. Chem. Lett.* 25, 815-819 (2015). (査読有)
8. Nishina, T., Numata, J., Nishina, K., Yoshida-Tanaka, K., Nitta, K., Piao, W., Iwata, R., Ito, S., Kuwahara, H., Wada, T., Mizusawa, H., Yokota, T., Chimeric Antisense Oligonucleotide Conjugated to α -Tocopherol. *Mol. Ther. Nucleic Acids.* 4, e220 (2015). (査読有)
9. *Nukaga, Y., Takemura, T., Iwamoto, N., Okad, N., and Wada, T., Enhancement of affinity of 2'-O-Me-oligonucleotides for complementary RNA by incorporating a stereoregulated boranophosphate backbone. *RSC Adv.* 5, 2392-2395 (2015). (査読有)
10. 和田猛、核酸医薬におけるものづくりの力、*Antisense.* 19, 6 (2015). (査読有)

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

11. Iwata, R., Nishina, K., Yokota, T., Wada, T. Synthesis and properties of double-stranded RNA-bindable oligodiaminogalactose derivatives conjugated with vitamin E *Bioorg. Med. Chem.* 22, 1394-1403 (2014). (査読有)
12. Saito, K., Wada, T. 3-Nitro-1,2,4-triazol-1-yl-tris(pyrrolidin-1-yl)phosphonium hexa- fluorophosphate (PyNTP) as a condensing reagent for solid-phase peptide synthesis *Tetrahedron Lett.* 55, 1991-1993 (2014). (査読有)
13. Uehara, S., Hiura, S., Higashida, R., Oka, N., Wada, T. Solid-phase Synthesis of P-Boronated Oligonucleotides by the H-Boranophosphonate Method *J. Org. Chem.* 79, 3465-3472 (2014). (査読有)

花輪剛久

1. *Kawano, Y., Ishii, N., Shimizu, Y., and Hanawa, T., Development and characterization of a suspension containing nanoparticulated rebamipide for a mouth wash for stomatitis, *J. Pharm. Sci. Tech. Jpn.*, 77(2), 104-115 (2017). (査読有)
2. Miyajima, A., Hirota, T., Tashiro, M., Noguchi, W., Kawano, Y., Hanawa, T., Kigure, A., Anata, T., Yamamoto, Y., Yuasa, N., Koshino, M., Shiraishi, Y., Yuzawa, K., Akagi, K., Yoshimasu, T., Makigami, K., and Komoda, M. Pharmacokinetics of ivermectin applied topically by whole-body bathing method in healthy volunteers, *J. Dermatol.* in press (2016). (査読有)
3. *Kawano, Y., Imamura, A., Nakamura, T., Akaishi, M., Satoh, M., and Hanawa, T., Development and characterization of oral spray for stomatitis containing irsogladine maleate, *Chem. Pharm. Bull.*, 64(12), 1659-1665 (2016). (査読有)
4. Satoh, M., Kamada, A., Saito, M., Akaishi, M., Imamura, A., Kawano Y., and Hanawa, T., Healing effects of irsogladine maleate on acetic acid-induced oral stomatitis in 5-fluorouracil-treated and -untreated syrian golden hamsters, *Research & Reviews in Pharmacy and Pharmaceutical Sciences*, 5(4), 18-22 (2016). (査読有)
5. Ishii, N., Kawano, Y., Suzuki, M., Komoda, M., Makino, K., and Hanawa, T., Effects of a camostat mesilate gargle on stomatitis caused by molecular target therapy: A case report, *日本緩和医療薬学雑誌*, 9(3), 87-91 (2016). (査読有)
6. 河野弥生、佐藤光利、花輪剛久、大学から発信する Evidence-based hospital formulation (EBHF), *医療薬学*, 42, 492-498 (2016). (査読有)
7. 河野弥生、花輪剛久、医療現場のニーズを考慮した院内製剤の研究開発, *薬剤学*, 76(4), 217-223, (2016). (査読有)
8. Kawano, Y., Sasatsu, M., Mizutani, A., Hirose, K., Hanawa, T. (Corresponding Author), and Onishi, H., Preparation and evaluation of stomatitis film using xyloglucan containing loperamide, *Chem. Pharm. Bull.*, 64(6), 1-6, (2016). (査読有)
9. Goto K., Shinozaki I., Ishihara T., Kaiho F., Hanawa T., Evaluation of community pharmacist training on patients' non-verbal communication. *Jpn. J. Pharm. Health Care Sci.*, 41, 66-79(2015). (査読有)
10. 花輪剛久、小口敏夫、薬物治療を支援する院内製剤-現状と課題-, *Yakugaku Zasshi*. 135, 929-930 (2015). (査読有)
11. 佐古有紀、桐林東一郎、河野弥生、花輪剛久、宮川信明、骨粗鬆症患者における経口ビスホスホネート製剤服薬実態調査、*医療薬学*, 41, 750-756(2015).
12. 花輪剛久、河野弥生、医療現場のニーズに応える製剤設計、*Pharm. Tech. Japan*. 31, 149-155 (2015). (査読無)
13. 前田拓也、津久井宏行、梅原伸大、岩朝静子、杉浦唯久、早川美奈子、河野弥生、山崎健二、酪酸菌製剤による warfarin 作用減弱が疑われた 1 例、*胸部外科*, 67, 505-507 (2014). (査読有)
14. 花輪剛久、これからの院内製剤に対する大学のかかわり、日本病院薬剤師会雑誌、50(6)、725-728 (2014) (査読有)

大塚英典

1. Matsukuma, D., Sambai, T., and Otsuka, H. UCST-type phase transition driven by

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

protein-derived polypeptide employing gelatin and chitosan. *Polym. Adv. Technol.*, in press, (査読有)

- Iijima, M., Ulkoski, D., Sakuma, S., Matsukuma, D., Nishiyama, N., Otsuka, H. and Scholz, C. Synthesis of PEGylated poly(amino acid) pentablock copolymers and their self-assembly. *Polym. Int.*, 65: 1132-1141. (2016) (査読有)
- Otsuka, H., Muramatsu, Y., and Matsukuma, D., Gold nanorod functionalized with self-assembled glycopolymers for ultrasensitive detection of proteins. *Chem. Lett.*, 44(2), 132-134 (2015). (査読有)
- Matsukuma, D., and Otsuka, H., Thermo-responsive reversible phase-transition of alginate based semi-IPN gel through self-assembly of interpenetrated elastin-like polypeptide. *Chem. Lett.*, 44(1), 26-28 (2015). (査読有)
- *Otsuka, H., Matsukuma, D., Sanbai, T., and Ikenaga, Y., Self-Assembly of Poly(ethylene glycol)-block-polypyridine copolymer into micelles and at silica surface: Effect of molecular architecture on silica dispersion. *Colloid Polym. Sci.*, 292, 291-300 (2014). (査読有)
- *Matsukuma, D., Maejima, Y., Ikenaga, Y., Sanbai, T., Ueno, K., and Otsuka, H., Amphiphilic copolymer of poly(ethylene glycol)-block-polypyridine; Synthesis, physicochemical characterization, and adsorption onto silica nanoparticle. *J. Nanosci. Nanotechnol.*, 14(9), 6774-6780 (2014). (査読有)
- *Kutsuzawa, K., Suzuki, T., Kishimoto, H., Murakami, A., Azuma, T., Abe, R., and Otsuka, H., Highly robust protein production by coculture of CHO spheroids layered on feeder cells in serum-free medium. *Colloid Polym. Sci.*, 292, 839-848 (2014). (査読有)
- Otsuka, H., Sasaki, K., Okimura, S., Nagamura, M., Watanabe, R., and Kawabe, M., Contribution of fibroblasts cultured on 3D silica nonwoven fabrics to the co-cultured hepatocytes function. *Chem. Lett.*, 43, 343-345 (2014). (査読有)
- Otsuka, H., Hagiwara, T., and Yamamoto, S., Carbohydrate-based amphiphilic diblock copolymers with pyridine for the sensitive detection of protein binding. *J. Nanosci. Nanotechnol.*, 14(9), 6764-6773 (2014). (査読有)

鳥越秀峰

- *Kondo, J., Nomura, Y., Kitahara, Y., Obika, S., and Torigoe, H., The Crystal structure of a 2',4'-BNANC[N-Me]-modified antisense gapmer in complex with the target RNA. *Chem. Commun.*, 52, 2354-2357 (2016). (査読有)
- Kuriyama, M., Haruta, K., Dairaku, T., Kawamura, T., Kikkawa, S., Inamoto, K., Tsukamoto, H., Kondo, Y., Torigoe, H., Okamoto, I., Ono, A., Morita, E. H., Tanaka, Y., Hg²⁺-Trapping Beads: Hg²⁺-Specific Recognition through Thymine-Hg(II)-Thymine Base Pairing. *Chem. Pharm. Bull.*, 62(7), 709-712 (2014). (査読有)

【薬効・機能評価グループ】

岡淳一郎

- Saitoh, A., Akagi, K., Oka, J-I., Yamada, M. Post-reexposure administration of D-cycloserine facilitates reconsolidation of contextual conditioned fear memory in rats. *Journal of Neural Transmission*, in press. (査読有)
- Sasaki-Hamada, S., Suzuki, A., Ueda, Y., Matsumoto, K., Oka, J-I. Serotonergic and dopaminergic systems are implicated in the antidepressant-like effects of chotosan, a Kampo formula, in mice. *Journal of Pharmacological Sciences* 133:110-113, (2017). (査読有)
- *Sasaki-Hamada, S., Nakamura, R., Nakao, Y., Akimoto, T., Sanai, E., Nagai, M., Horiguchi, M., Yamashita, C., Oka, J-I. Antidepressant-like effects exerted by the intranasal administration of a glucagon-like peptide-2 derivative containing cell-penetrating peptides and a penetration-accelerating sequence in mice. *Peptides*

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- 87:64-70, (2017). (査読有)
4. *Nakao, Y., Horiguchi, M., Nakamura, R., Sasaki-Hamada, S., Ozawa, C., Funane, T., Ozawa, R., Oka, J-I., Yamashita, C. LARETH-25 and β -CD improve central transitivity and central pharmacological effect of the GLP-2 peptide. *International Journal of Pharmaceutics* 515:37-45, (2016). (査読有)
 5. Sasaki-Hamada, S., Hoshi, M., Niwa, Y., Ueda, Y., Kokaji, A., Kamisuki, S., Kuramochi, K., Sugawara, F., Oka, J-I. Neoechinulin A induced memory improvements and antidepressant-like effects in mice. *Progress in Neuro-Psychopharmacology & Biological Psychiatry* 71:155-161, (2016). (査読有)
 6. Suzuki, S., Saitoh, A., Ohashi, M., Yamada, M., Oka, J-I., and Yamada, M. The Infralimbic and prelimbic medial prefrontal cortices have differential functions in the expression of anxiety-like behaviors in mice. *Behav. Brain Res.* 304:120-124, (2016). (査読有)
 7. Saitoh, A., Makino, Y., Hashimoto, T., Yamada, M., Goto, L., Sugiyama, A., Ohashi, M., Tsukagoshi, M., Oka, J-I., and Yamada, M. The voltage-gated sodium channel activator veratrine induces anxiogenic-like behaviors in rats. *Behav. Brain Res.* 292:316-322, (2015). (査読有)
 8. Yamada, M., Saitoh, A., Ohashi, M., Suzuki, S., Oka, J-I., and Yamada, M. Induction of c-Fos immunoreactivity in the amygdala of mice expressing anxiety-like behavior after local perfusion of veratrine in the prelimbic medial prefrontal cortex. *J. Neural Transm.* 122:1203-1207, (2015). (査読有)
 9. Sugiyama, A., Saitoh, A., Inagaki, M., Oka, J-I., and Yamada, M. Systemic administration of riluzole enhances recognition memory and facilitates extinction of fear memory in rats. *Neuropharmacol.* 97:322-328, (2015). (査読有)
 10. Sasaki-Hamada, S., Hojo, Y., Koyama, H., Otsuka, H., and Oka, J-I. Changes in hippocampal synaptic functions and protein expression in monosodium glutamate-treated obese mice during development of glucose intolerance. *Eur. J. Neurosci.* 41:1393-1401, (2015). (査読有)
 11. *Sasaki-Hamada, S., Yuri, Y., Hoshi, M., and Oka, J-I. Immunohistochemical determination of the site of antidepressant-like effects of glucagon-like peptide-2 in ACTH-treated mice. *Neurosci.* 294:156-165, (2015). (査読有)
 12. Yamada, M., Tsukagoshi, M., Hashimoto, T., Oka, J-I., Saitoh, A., Yamada, M. Lysophosphatidic acid induces anxiety-like behavior via its receptors in mice. *J. Neural Transm.* 122:487-494, (2015). (査読有)
 13. Iwai, T., Jin, K., Ohnuki, T., Sasaki-Hamada, S., Nakamura, M., Saitoh, A., Sugiyama, A., Ikeda, M., Tanabe, M., Oka, J-I. Glucagon-like peptide-2-induced memory improvement and anxiolytic effects in mice. *Neuropeptides* 49:7-14, (2015). (査読有)
 14. Ohashi, M., Saitoh, A., Yamada, M., Oka, J-I., and Yamada, M. Riluzole in the prelimbic medial prefrontal cortex attenuated veratrine-induced anxiety-like behaviors in mice. *Psychopharmacol.* 232:391-398, (2015). (査読有)
 15. Niu, Y., Li, F., Inada, C., Tanaka, K., Watanabe, S., Fujiwara, H., Sasaki-Hamada, S., Oka, J-I., Matsumoto, K. Chemical profiling with HPLC-FTMS of exogenous and endogenous chemicals susceptible to the administration of chitosan in an animal model of type 2 diabetes-induced dementia. *J. Pharmaceut. Biomed. Anal.* 104:21-30, (2015). (査読有)
 16. Saitoh, A., Ohashi, M., Suzuki, S., Tsukagoshi, M., Sugiyama, A., Yamada, M., Oka, J-I., Inagaki, M., Yamada, M. Activation of the prelimbic medial prefrontal cortex induces anxiety-like behaviors via N-methyl-D-aspartate receptor-mediated glutamatergic neurotransmission in mice. *J. Neurosci. Res.* 92:1044-1053, (2014). (査読有)

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

17. Sacai, H., Sasaki-Hamada, S., Sugiyama, A., Saitoh, A., Mori, K., Yamada, M., Oka, J-I. The impairment in spatial learning and hippocampal LTD through the PKA pathway in juvenile-onset diabetes rats are rescued by modulating NMDA receptor function. *Neurosci. Res.* 81-82:55-63, (2014). (査読有)
18. Sugiyama, A., Nagase, H., Oka, J-I., Yamada, M., Saitoh, A. DOR₂-selective but not DOR₁-selective antagonist abolishes anxiolytic-like effects of the d opioid receptor agonist KNT-127. *Neuropharmacol.* 79:314-320, (2014). (査読有)
19. Sasaki-Hamada, S., Tamaki, K., Otsuka, H., Ueno, T., Sacai, H., Niu, Y., Matsumoto, K., Oka, J-I. Chotosan, a Kampo formula, ameliorates hippocampal LTD and cognitive deficits in juvenile-onset diabetes rats. *J. Pharmacol. Sci.* 124:192-200, (2014). (査読有)
20. Iwai, T., Sawabe, T., Tanimitsu, K., Suzuki, M., Sasaki-Hamada, S., Oka, J-I. Glucagon-like peptide-1 protects synaptic and learning functions from neuroinflammation in rodents. *J. Neurosci. Res.* 92:446-454 (2014). (査読有)

東達也

1. Itoh, N., Kimoto, A., Yamamoto, E., Higashi, T., Sanata, T., Funatsu, T., and Kato, M., High Performance Liquid Chromatography Analysis of 100-nm Liposomal Nanoparticles Using Polymer-coated, Silica Monolithic Columns with Aqueous Mobile Phase. *J. Chromatogr. A* 1484, 34-40 (2017). (査読有)
2. Ogawa, S., Kittaka, H., Nakata, A., Sato, M., Nomura, F., and Higashi, T., Enhancing Analysis Throughput, Sensitivity and Specificity in LC/ESI-MS/MS Assay of Plasma 25-Hydroxyvitamin D₃ by Derivatization with Triplex DAPTAD Isotopologues. *J. Pharm. Biomed. Anal.* 136, 126-133 (2017). (査読有)
3. Higashi, T., Shimada, K., Application of Cookson-type Reagents for Biomedical HPLC and LC/MS Analyses: A Brief Overview., *Biomed. Chromatogr.* 31, e3808 (2017). (査読有)
4. *Higashi, T., Aiba, N., Tanaka, T., Yoshizawa, K., and Ogawa, S., Methods for Differential and Quantitative Analyses of Brain Neurosteroid Levels by LC/MS/MS with ESI-enhancing and Isotope-coded Derivatization. *J. Pharm. Biomed. Anal.* 117, 155-162 (2016). (査読有)
5. Ogawa, S., Tomaru, K., Watanabe, S., and Higashi, T., LC/ESI-MS/MS Method for Determination of Salivary Eicosapentaenoic Acid Concentration-to-Arachidonic Acid Concentration Ratio. *Biomed. Chromatogr.* 30, 29-34 (2016). (査読有)
6. Higashi, T., Yamagata, K., Kato, Y., Ogawa, Y., Takano, K., Nakaaze, Y., Iriyama, T., Min, J. Z., and Ogawa, S., Methods for Determination of Fingernail Steroids by LC/MS/MS and Differences in Their Contents between Right and Left Hands. *Steroids* 109, 60-65 (2016). (査読有)
7. Ogawa, S., Kittaka, H., Shinoda, K., Ooki, S., Nakata, A., and Higashi, T., Comparative Evaluation of New Cookson-type Reagents for LC/ESI-MS/MS Assay of 25-Hydroxyvitamin D₃ in Neonatal Blood Samples. *Biomed. Chromatogr.* 30, 938-945 (2016). (査読有)
8. Higashi, T., Yokota, M., Goto, A., Ogawa, S., Komatsu, K., Sugiura, T., Sato, M., and Nomura, F., A Method for Simultaneous Determination of 25-Hydroxyvitamin D₃ and Its 3-Sulfate in Newborn Plasma by LC/ESI-MS/MS after Derivatization with Proton-affinitive Cookson-type Reagent. *Mass Spectrom. (Tokyo)* 5, S0051 (2016). (査読有)
9. Satoh, M., Ishige, T., Ogawa, S., Nishimura, M., Matsushita, K., Higashi, T., and Nomura, F., Development and Validation of the Simultaneous Measurement of Four Vitamin D Metabolites in Serum by LC/MS/MS for Clinical Laboratory Applications. *Anal. Bioanal. Chem.* 408, 7617-7627 (2016). (査読有)
10. Higashi, T., and Ogawa, S., Chemical Derivatization for Enhancing Sensitivity during LC/ESI-MS/MS Quantification of Steroids in Biological Samples: A Review, *J.*

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- Steroid Biochem. *Mol. Biol.* 162, 57-69 (2016). (査読有)
11. *Higashi, T., and Ogawa, S., Isotope-coded ESI-enhancing Derivatization Reagents for Differential Analysis, Quantification and Profiling of Metabolites in Biological Samples by LC/MS: A Review. *J. Pharm. Biomed. Anal.* 130, 181-193 (2016).
(査読有)
 12. Kato, M., Sasaki, M., Ueyama, Y., Koga, A., Sano, A., Higashi, T., Santa, T., Comparison of the Migration Behavior of the Polyethylene Glycol- and the Silica-Based Nanoparticles Using Micellar Electrokinetic Chromatography. *J. Sep. Sci.* 38, 468-474 (2015). (査読有)
 13. 石毛崇之、佐藤 守、小川祥二郎、西村 基、東 達也、野村文夫、LC-MS/MSによるビタミンDの代謝動態の評価、*臨床病理*、63, 457-464 (2015)。 (査読有)
 14. Ogawa, S., Tadokoro, H., Sato, M., and Higashi, T., Enantioselective Determination of Ibuprofen in Saliva by Liquid Chromatography/Tandem Mass Spectrometry with Chiral Electrospray Ionization-Enhancing and Stable Isotope-Coded Derivatization. *J. Pharm. Biomed. Anal.* 98, 387-392 (2014). (査読有)
 15. Higashi, T., Goto, A., Morohashi, M., Ogawa, S., Komatsu, K., Sugiura, T., Fukuoka, T., and Mitamura, K., Development and Validation of a Method for Determination of Plasma 25-Hydroxyvitamin D₃ 3-Sulfate Using Liquid Chromatography/Tandem Mass Spectrometry. *J. Chromatogr. B* 969, 230-234 (2014). (査読有)
 16. Ogawa, S., Ooki, S., Shinoda, K., Higashi, T., Analysis of Urinary Vitamin D₃ Metabolites by Liquid Chromatography/Tandem Mass Spectrometry with ESI-Enhancing and Stable Isotope-Coded Derivatization. *Anal. Bioanal. Chem.* 406, 6647-6654 (2014). (査読有)

吉澤一巳

1. 益田律子, 吉澤一巳, 向精神薬. *ペインクリニック*. 37, 52-63 (2016).
2. Higashi, T., Aiba, N., Tanaka, T., Yoshizawa, K., and Ogawa, S., Methods for differential and quantitative analyses of brain neurosteroid levels by LC/MS/MS with ESI-enhancing and isotope-coded derivatization. *J. Pharm. Biomed. Anal.*, 117, 155-162 (2016).
3. Mori, T., Itoh, T., Yoshizawa, K., Ise, Y., Mizuo, K., Saeki, T., Komiya, S., Masukawa, D., Shibasaki, M., and Suzuki, T., Involvement of μ - and δ -opioid receptor function in the rewarding effect of (\pm)-pentazocine. *Addict Biol.* 20, 724-732 (2015).
4. Mori, T., Ohya, J., Masumoto, A., Harumiya, M., Fukase, M., Yoshizawa, K., Hayashi, T., and Suzuki, T., Possible involvement of the Sigma-1 receptor chaperone in chemotherapeutic-induced neuropathic pain. *Synapse*. 69, 526-532 (2015).
5. 吉澤一巳, 田代真弓, 益田律子, 帯状疱疹に対する抗ウイルス薬の薬物相互作用. *ペインクリニック*. 35, S337-S344 (2014).
6. Mori, T., Rahmadi, M., Yoshizawa, K., Itoh, T., Shibasaki, M., and Suzuki, T., Inhibitory effects of SA4503 on the rewarding effects of abused drugs. *Addict Biol.* 19, 362-369 (2014).
7. Mori, T., Uzawa, N., Kazawa, H., Watanabe, H., Mochizuki, A., Shibasaki, M., Yoshizawa, K., Higashiyama, K., and Suzuki, T., Differential substitution for the discriminative stimulus effects of 3,4-methylenedioxymethamphetamine and methylphenidate in rats. *J. Pharmacol. Exp. Ther.*, 350, 403-411 (2014).
8. 天津怜, 齋藤隼, 大登剛, 吉澤一巳, 杉山奈津子, 齋藤光江, 小茂田昌代, 外来臨床薬剤師支援システムの開発 -乳がん治療における薬学的管理の質の向上を目指して-. *医薬品情報学*. 16, 119-124 (2014).

樋上賀一

1. *Fujii, N., Narita, T., Okita, N., Kobayashi, M., Furuta, Y., Chujo, Y., Sakai, M., Yamada, A., Takeda, K., Konishi, T., Sudo, Y., Shimokawa, I., and Higami, Y.,

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

Sterol regulatory element-binding protein-1c orchestrates metabolic remodeling of white adipose tissue by caloric restriction. *Aging Cell*. in press (査読有)

2. *Mizunoe, Y., Sudo, Y., Okita, N., Hiraoka, H., Mikami, K., Narahara, T., Negishi, A., Yoshida, M., Higashibata, R., Watanabe, S., Kaneko, H., Natori, D., Furuichi, T., Yasukawa, H., Kobayashi, M., and Higami, Y., Involvement of lysosomal dysfunction in autophagosome accumulation and early pathologies in adipose tissue of obese mice. *Autophagy*. in press (査読有)
3. Terawaki, K., Kashiwase, Y., Sawada, Y., Hashimoto, H., Yoshimura, M., Ohbuchi, K., Sudo, Y., Suzuki, M., Miyano, K., Shiraishi, S., and Higami, Y., Yanagihara, K., Hattori, T., Kase, Y., Ueta, Y., and Uezono, Y. Development of ghrelin resistance in a cancer cachexia rat model using human gastric cancer-derived 85As2 cells and the palliative effects of the Kampo medicine rikkunshito on the model. *PLoS One*, 12(3):e0173113 (2017). (査読有)
4. 小林正樹、樋上賀一、発がんメカニズムにおけるメタボリック症候群の関与、泌尿器外科 30(2), 117-121 (2017). (査読無)
5. *Okita, N., Tsuchiya, T., Fukushima, M., Itakura, K., Yuguchi, K., Narita, T., Hashizume, Y., Sudo, Y., Chiba, T., Shimokawa, I., and Higami, Y., Chronological analysis of caloric restriction-induced alteration of fatty acid biosynthesis in white adipose tissue of rats. *Exp. Gerontol.* 63:59-66 (2015). (査読有)
6. Terawaki, K., Sawada, Y., Kashiwase, Y., Hashimoto, H., Yoshimura, M., Suzuki, M., Miyano, K., Sudo, Y., Shiraishi, S., and Higami, Y., Yanagihara, K., Kase, Y., Ueta, Y., Uezono, Y., New cancer cachexia rat model generated by implantation of a peritoneal dissemination-derived human stomach cancer cell line. *Am. J. Physiol. Endocrinol. Metab.* 306(4), E373-87 (2014). (査読有)
7. Okita, N., Ishikawa, N., Mizunoe, Y., Oku, M., Nagai, W., Suzuki, Y., Matsushima, S., Mikami, K., Okado, H., Sasaki, T., and Higami, Y., Inhibitory effect of p53 on mitochondrial content and function during adipogenesis. *Biochem. Biophys. Res. Commun.* 446(1), 91-97 (2014). (査読有)
8. Hatachi, G., Tsuchiya, T., Miyazaki, T., Matsumoto, K., Yamasaki, N., Okita, N., Nanashima, A., Higami, Y., and Nagayasu, T., The poly(adenosine diphosphate-ribose) polymerase inhibitor PJ34 reduces pulmonary ischemia-reperfusion injury in rats. *Transplantation*. 98(6), 618-624 (2014). (査読有)
9. Miyano, K., Sudo, Y., Yokoyama, A., Hisaoka-Nakashima, K., Morioka, N., Takebayashi, M., Nakata, Y., Higami, Y., Uezono, Y., History of the G protein-coupled receptor (GPCR) assays from traditional to a state-of-the-art biosensor assay. *J. Pharmacol. Sci.* 126(4), 302-9 (2014). (査読有)

磯濱洋一郎

1. * 磯濱洋一郎, 漢方薬のユニークな作用を担う薬理学的標的分子, 小児疾患の身近な漢方治療, 14, 6-29 (2016).
2. Fujitsuka, N., Tamai, M., Tsuchiya, K., Iizuka, S., Tsuchiya, N., Makino, B., Hattori, T., Kase, Y., and Isohama, Y., Boiogito, a Kampo Medicine, Improves Hydrarthrosis in a Rat Model of Knee Osteoarthritis. *BMC Complement Altern. Med.* 15, 451-548 (2015).

【臨床試験グループ】
小茂田昌代

1. *赤木圭太, 大沼亜紀, 杉岡晃仁, 金永進, 田代真理, 湯澤薫, 野口航, 湯浅奈絵, 小茂田昌代: ストロメクトール®錠の投与量に影響を及ぼす簡易懸濁法の器具および経管投与手技の実態調査. *千葉県薬誌* 63: 9-13 (2017). (査読有)
2. *Miyajima, A., Hirota, T., Sugioka, A., Fukuzawa, M., Sekine, M., Yamamoto, Y., Yoshimasu, T., Kigure, A., Anata, T., Noguchi, W., Akagi, K., and Komoda, M.,

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

Effect of High Fat Meal Intake on the Pharmacokinetic Profile of Ivermectin in Japanese Patients with Scabies. *J. Dermatol.* 42(1), 87-9 (2016). (査読有)

3. *Miyajima, A., Komoda, M., Akagi, K., Yuzawa, K., Yoshimasu, T., Yamamoto, Y., and Hirota, T., Experimental Study of Pharmacokinetics of External, Whole Body Bathing Application of Ivermectin. *J. Dermatol.* 42, 87-89 (2015). (査読有)

4. *石井則久、浅井俊弥、朝比奈昭彦、石河晃、今村英一、加藤豊範、金澤伸雄、久保田由美子、黒須一見、幸野健、小茂田昌代、関根万里、田中勝、谷口裕子、常深祐一郎、夏秋優、廣田孝司、牧上久仁子、松田知子、吉住順子、四津里英、和田康夫、疥癬診療ガイドライン(第3版)、日本皮膚科学会雑誌, 125, 2023-2048 (2015) (査読有)

5. *金永進、酒巻智美、湯浅奈絵、吉増孝嗣、宮嶋篤志、廣田孝司、小茂田昌代、経鼻チューブを使用した経管投与がストロメクトール®錠の投与量に及ぼす影響. *医療薬学.* 40(9), 515-521 (2014). (査読有)

佐藤嗣道

1. Roughead, E. E., Chan, E. W., Choi, N.-K., Griffiths, J., Jin, X.-M., Lee, J. Kimura, M., Kimura, T., Kubota, K., Lai E. C.-C., Man K.KC., Nguyen, T.A., Ooba, N., Park, B.-J, Sato, T., Shin, J.-Y., Wang, T.T., Wong I.,CK., Yang, Y.-H. K., and Pratt, N.L.. Proton pump inhibitors and risk of Clostridium difficile infection: a multi-country study using sequence symmetry analysis. *Expert Opinion On Drug Safety* 15, 1589-1595 (2016). (査読有)

2. 鹿村恵明, 真野泰成, 小茂田昌代, 根岸健一, 佐藤嗣道, 宮崎智. 薬局薬剤師の疑義照会による医療費削減効果及び医薬分業率との関連性 -全国薬局疑義照会調査-. *YAKUGAKU ZASSHI* 136, 1263-1273 (2016). (査読有)

3. 佐藤嗣道. 序論: 医療情報データベースの現状と利活用に向けた展望. *医薬ジャーナル*, 52, 1851-1854 (2016). (査読無)

4. Shimomura, H., Ono, A., Imanaka, K., Majima, T., Masuyama, H., Sato, T., and Aoyama, T., Retrospective Investigation of Combination Therapy with Clarithromycin and Levofloxacin for Pulmonary Mycobacterium Avium Complex Disease. *J. Pharm. Health Care and Sciences* 1, 24 (2015). (査読有)

5. Roughead, E. E., Chan, E. W., Choi, N.-K., Kimura, M., Kimura, T., Kubota, K., Lai, E. C.-C., Man, K. K. C., Nguyen, T. A., Ooba, N., Park, B.-J., Sato, T., Shin, J.-Y., Wang, T., Griffiths, J., Wong, I.C.K., Yang, Y.-H. K., and Pratt, N. L., Variation in Association Between Thiazolidinediones and Heart Failure Across Ethnic Groups: Retrospective Analysis of Large Healthcare Claims Databases in Six Countries. *Drug Saf.* 38, 823-831 (2015). (査読有)

6. Pratt, N., Chan, E.W., Choi, N.-K., Kimura, M., Kimura, T., Kubota, K., Lai, E. C.-C., Man, K. K. C., Ooba, N., Park, B.-J., Sato, T., Shin, J.-Y., Wong, I. C. K., Yang, Y.-H. K., and Roughead, E. E., Prescription Sequence Symmetry Analysis: Assessing Risk, Temporality, and Consistency for Adverse Drug Reactions across Datasets in Five Countries. *Pharmacoepidemiol. Drug Saf.* 24, 858-864 (2015). (査読有)

7. Kubota, K., Kamijima, Y., Sato, T., Ooba, N., Koide, D., Iizuka, H., and Nakagawa, H., Epidemiology of psoriasis and palmoplantar pustulosis: a nationwide study using the Japanese national claims database. *BMJ Open* 5, e006450 (2015). (査読有)

8. 佐藤嗣道、患者のニーズに合った医薬品ガイドとは? *YAKUGAKU ZASSHI*, 135, 297-306 (2015) (査読無)

9. Ooba, N., Sato, T., Wakana, A., Orii, T., Kitamura, M., Kokan, A., Kurata, H., Shimodozono, Y., Matsui, K., Yoshida, H., Yamaguchi, T., Kageyama, S., Kubota, K., A Prospective Stratified Case-Cohort Study on Statins and Multiple Adverse Events in Japan. *PLoS One* 9, e96919 (2014). (査読無)

10. 久保田潔、青木事成、漆原尚巳、鍵村達夫、景山茂、小出大介、古閑晃、佐藤嗣道、中村敏明、中島研、畑中直也、平河武、宮川功、望月眞弓、「日本における適正な安全性監視計画作

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

成のためのタスクフォース」報告書、よりよい医薬品安全性監視計画作成とチェックリスト。
 薬剤疫学. 19, 57-74 (2014). (査読無)

浜田知久馬

1. Uozumi, R., and Hamada, C. Interim decision-making strategies in adaptive designs for population selection using time-to-event endpoints. *J. Biopharm. Stat.* 27(1):84-100. (2017)
2. Nagasawa, H., Hamada, C., Wakabayashi, M., Nakagawa, Y., Nomura, S., and Kohno, Y. Time to spontaneous ductus arteriosus closure in full-term neonates. *Open Heart.* 2016 3(1):e000413 (2016).
3. Hamada, C., Yamada, Y., Azuma, M., Nishikawa, K., Gotoh, M., Bando, H., Sugimoto, N., Nishina, T., Amagai, K., Chin, K., Niwa, Y., Tsuji, A., Imamura, H., Tsuda, M., Yasui, H., Fujii, H., Yamaguchi, K., Yasui, H., Hironaka, S., Shimada, K., Miwa, H., and Hyodo, I. Meta-analysis supporting noninferiority of oxaliplatin plus S-1 to cisplatin plus S-1 in first-line treatment of advanced gastric cancer (G-SOX study): indirect comparison with S-1 alone. *Int J Clin Oncol.* 21(4):668-75 (2016).
4. Bando, H., Yamada, Y., Tanabe, S., Nishikawa, K., Gotoh, M., Sugimoto, N., Nishina, T., Amagai, K., Chin, K., Niwa, Y., Tsuji, A., Imamura, H., Tsuda, M., Yasui, H., Fujii, H., Yamaguchi, K., Yasui, H., Hironaka, S., Shimada, K., Miwa, H., Hamada, C., Hyodo, I. Efficacy and safety of S-1 and oxaliplatin combination therapy in elderly patients with advanced gastric cancer. *Gastric Cancer.* 19(3):919-26 (2016).
5. Kimura, K., Nakao, K., Shibata, Y., Sone, T., Takayama, T., Fukuzawa, S., Nakama, Y., Hirayama, H., Matsumoto, N., Kosuge, M., Hiro, T., Sakuma, H., Ishihara, M., Asakura, M., Hamada, C., Kaneko, A., Yokoi, T., Hirayama, A.; AMITY study group. Randomized controlled trial of TY-51924, a novel hydrophilic NHE inhibitor, in acute myocardial infarction. *J. Cardiol.* 67(4):307-13 (2016).
6. Sato, H., Hirakawa, A., and Hamada, C. An adaptive dose-finding method using a change-point model for molecularly targeted agents in phase I trials. *Stat. Med.* 35(23):4093-109 (2016).
7. Kakurai, Y., Hirakawa, A., and Hamada, C., A Dose-Finding Method Based on Multiple Dosing in Two-Agent Combination Phase I Trials. *J. Biopharm. Stat.* 25, 1065-1076 (2015).
8. Kaneko, S., Hirakawa, A., and Hamada, C., Enhancing the Lasso Approach for Developing a Survival Prediction Model Based on Gene Expression Data. *Comput. Math. Methods. Med.* 259474 (2015)
9. Abe, K., Itoyama, Y., Sobue, G., Tsuji, S., Aoki, M., Doyu, M., Hamada, C., Kondo, K., Yoneoka, T., Akimoto, M., and Yoshino, H., Edaravone ALS Study Group. Confirmatory double-blind, parallel-group, placebo-controlled study of efficacy and safety of edaravone (MCI-186) in amyotrophic lateral sclerosis patients. *Amyotroph Lateral SclerFrontotemporal Degener.* 15(7-8), 610-7 (2014).
10. Asano, J., Hirakawa, A., and Hamada, C., Assessing the prediction accuracy of cure in the Cox proportional hazards cure model: an application to breast cancer data. *Pharm. Stat.* 13(6), 357-63 (2014).
11. Uchiyama, S., Shinohara, Y., Katayama, Y., Yamaguchi, T., Handa, S., Matsuoka, K., Ohashi, Y., Tanahashi, N., Yamamoto, H., Genka, C., Kitagawa, Y., Kusuoka, H., Nishimaru, K., Tsushima, M., Koretsune, Y., Sawada, T., and Hamada, C., Benefit of cilostazol in patients with high risk of bleeding: subanalysis of cilostazol stroke prevention study 2. *Cerebrovasc Dis.* 37(4), 296-303 (2014).
12. Tsuchiya, T., Sadahiro, S., Sasaki, K., Kondo, K., Katsumata, K., Nishimura, G., Kakeji, Y., Baba, H., Morita, T., Koda, K., Sato, S., Matsuoka, J., Yamaguchi, Y., Usuki, H., Hamada, C., Kodaira, S., and Saji, S., Safety analysis of two different

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

regimens of uracil-tegafur plus leucovorin as adjuvant chemotherapy for high-risk stage II and III colon cancer in a phase III trial comparing 6 with 18 months of treatment: JFMC33-0502 trial. *Cancer Chemother Pharmacol.* 73(6), 1253-61 (2014).

- Asakawa, T., Hirakawa, A., and Hamada, C., Bayesian model averaging continual reassessment method for bivariate binary efficacy and toxicity outcomes in phase I oncology trials. *J. Biopharm. Stat.* 24(2), 310-25 (2014).
- Nakamura, M., Nanto, S., Hirayama, A., Takayama, T., Nishikawa, M., Kimura, K., Morita, S., Aizawa, T., Asano, R., Matsumaru, Y., Hamada, C., and Isshiki, T, OPERA Steering Committee and Investigators. Optimal duration of dual antiplatelet therapy following treatment with the endeavor zotarolimus-eluting stent in real-world Japanese patients with coronary artery disease (OPERA): study design and rationale. *Catheter Cardiovasc Interv.* 84(3), 368-74 (2014).
- Ishihara, M., Asakura, M., Kimura, K., Nakao, K., Hamada, C., and Hirayama, A., Trial design and rationale of TY-51924 as a novel Na⁺/H⁺ exchanger inhibitor in patients with ST-elevation acute myocardial infarction undergoing percutaneous coronary intervention. *J. Cardiol.* 63(1), 82-7 (2014).
- 矢田真城、浜田知久馬、有効性と毒性を指標とした CRM の中止基準に関する研究. *臨床薬理.* 45-1, 3-10 (2014).
- 矢田真城、浜田知久馬、代替性評価指標を利用した CRM の性能評価に関する研究. *臨床薬理.* 45-5, 179-186 (2014).

<図書>

【探索グループ】

深井文雄

- Iyoda, T., and Fukai, F., Deregulation of platelet-derived growth factor (PDGF)-dependent cell proliferation through potentiated and sustained activation of β 1-integrin, induced by tenascin-C-derived peptide TNIIIA2, Platelet-Derived Growth Factors (PDGFs): Types, Functions and Research. Nova publishers, in press
- Iyoda, T., Matsunaga, T., and Fukai, F., "Chapter 24. Integrin-dependent Cell Regulation and its Clinical Application" in "Encyclopedia of Biocolloid and Biointerface Science" edited by Ohshima, H., John Wiley and Sons, pp313-323 (2016)
- Matsunaga, T., Iyoda, T., and Fukai, F., Cell regulation through adhesion to the extracellular matrix via adhesion molecule, integrins -Therapeutic application of integrin activation-modulating peptides-. *Colloid and Interface Science in Pharmaceutical Research and Development.* Eds. Ohshima, H. and Makino, K., Elsevier, pp. 412-418 (2014).

秋本和憲

- 秋本和憲、17章 がん治療、理工系の基礎 生命科学入門、池北雅彦、武村政春、鳥越秀峰、田村浩二、水田龍信、橋本茂樹、太田尚孝、鞆達也、和田直之、松永幸大、吉澤一巳、鈴木智順、秋本和憲(編)、丸善出版、pp219-227 (2016)

【創薬グループ】

和田 猛

- 和田猛、額賀陽平、立体化学的に純粋なリン原子修飾核酸医薬の創製、核酸医薬の創製と応用展開、和田猛監修、シーエムシー出版、pp60-69, (2016).
- 和田猛、原倫太郎、前田雄介、カチオン性人工分子を用いる核酸医薬の安定化とデリバリー、核酸医薬の創製と応用展開、和田猛監修、シーエムシー出版、pp218-228 (2016).
- 和田猛、6章、アルケンおよびアルキンの反応、ブルース有機化学概説 第3版、西郷和彦他監訳、化学同人、pp212-249 (2016).
- 和田猛、7章、非局在化電子が安定性、pKa および反応生成物に及ぼす効果・芳香族性およびベンゼンの反応、ブルース有機化学概説 第3版、西郷和彦他監訳、化学同人、pp250-306,

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

(2016).

5. 和田猛、14 章、ラジカル、ブルース有機化学概説 第 3 版、西郷和彦他監訳、化学同人、pp562-577, (2016).
6. 岡夏央、松村史子、和田猛、糖-1-リン酸誘導体の化学合成、複合糖質の化学と最新応用技術《普及版》、稲津敏行他監訳、シーエムシー出版、pp28-36 (2015).
7. 和田猛、活性エステル、有機合成実験法ハンドブック第 2 版、丸善出版、pp371-374 (2015).
8. 和田猛、リン原子修飾核酸の化学的創製、核酸医薬の最前線《普及版》、和田猛監訳、シーエムシー出版、pp67-75 (2014).
9. 和田猛、7 章、アルキンの反応 (多段階合成の基礎)、ブルース有機化学 第 7 版 (上)、西郷和彦他監訳、化学同人、pp340-376 (2014).
10. 和田猛、8 章、非局在化電子が安定性、pKa, および反応生成物に及ぼす効果、ブルース有機化学 第 7 版 (上)、西郷和彦他監訳、化学同人、pp377-457 (2014).
11. 13 章、ラジカル・アルカンの反応、ブルース有機化学 第 7 版 (上)、西郷和彦他監訳、化学同人、pp632-672 (2014).

花輪剛久

1. 花輪剛久、院内製剤学、京都廣川書店 (2014).

大塚英典

1. Matsukuma, D., and Otsuka, H., “Biocompatible Interface Responsive to an Environment Change in the Living Body” in “Stimuli-Responsive Interfaces: Fabrication and Application”, Springer Nature Singapore Pte Ltd. 2017. ISBN 978-981-10-2461-0, DOI 10.1007/978-981-10-2463-4
2. Matsukuma, D., and Otsuka, H., “Strategies of Metal Nanoparticles for Nanobiology”, in “Encyclopedia of Biocolloid and Biointerface Science”, John Wiley & Sons, Inc., Hoboken, NJ, USA, Published Online: 24 SEP 2016, DOI: 10.1002/9781119075691.ch66.
3. 大塚英典、医療用ナノ粒子に必要な表面修飾、機能化と分散安定化、ナノ粒子表面修飾・分析評価技術～各種表面修飾の方法と修飾状態の分析・評価技術～、(株)情報機構、第 5 章第 1 節(2016).
4. Otsuka, H., “Micropatterning of cell aggregate in three dimension for in vivo mimicking cell culture”, in “Colloid and Interface Science in Pharmaceutical Research and Development”, Elsevier, ISBN: 978-0-444-62614-1, Chapter 11, pp223-241 (2014)
5. Matsukuma, D., and Otsuka, H., “PEGylation for biocompatible surface”, in “Colloid and Interface Science in Pharmaceutical Research and Development”, Elsevier, ISBN: 978-0-444-62614-1, Chapter 13, pp261-283 (2014).

鳥越秀峰

1. Tanaka, Y., Kondo, J., Sychrovský, V., Šebera, J., Dairaku, T., Saneyoshi, H., Urata, H., Torigoe, H., and Ono, A., Structures, Physicochemical Properties, and Applications of T-Hg(II)-T, C-Ag(I)-C, and Other Metallo-Base-Pairs. Chem. Commun. 51, pp17343-17360 (2015).

【薬効・機能評価グループ】

岡淳一郎

1. 岡淳一郎、松本欣三、濱田幸恵. 釣藤散の脳機能障害改善作用. 日本薬理学雑誌 147:157-160, 2016. (査読無)
2. 岡淳一郎、薬物作用の分類、薬物作用のメカニズム、薬物の用量と作用. MRテキスト I 医薬品情報 2012, 2015 改訂, 大谷壽一・岡淳一郎・折井孝男 (編)、公認財団法人MR研修センター, pp130-141 (2015).

東達也

1. 東 達也、池川繁男、クロマトグラフ法 (クロマトグラフィー)、薬学生のための臨床化学

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

改訂第4版、藤田芳一、眞野成康(編)、南江堂、pp32-39(2015).

2. 東 達也、馬渡一浩、本間啓子、ホルモン、薬学生のための臨床化学 改訂第4版、藤田芳一、眞野成康(編)、南江堂、pp.154-168(2015).

樋上賀一

1. *Mizunoe, Y., Sudo, Y., Okita, N., and Higami, Y., Autophagy in adipose tissue. "Autophagy vol 10" edited by Hayat, M. A., Elsevier Inc., pp147-156, (2016)

磯濱洋一郎

1. 磯濱洋一郎、漢方薬の薬理作用、成人病と生活習慣病、45, 151-159(2015).
2. 磯濱洋一郎、抗浮腫作用をもつ五苓散の薬理作用とアクアポリン、整形外科漢方処方マニュアル、28, 9-14(2015).
3. 磯濱洋一郎、漢方薬のユニークな作用を担う薬理学的標的分子、小児疾患の身近な漢方処方、14, 6-28(2015).

【臨床試験グループ】

小茂田昌代

1. 小茂田昌代、簡易懸濁法マニュアル、倉田なおみ、石田志郎(編)、じほう、p93,(2017)
2. 小茂田昌代、簡易懸濁法マニュアル、倉田なおみ、石田志郎(編)、じほう、p121-122,(2017)
3. 小茂田昌代、簡易懸濁法マニュアル、倉田なおみ、石田志郎(編)、じほう、p178-182(2017)
4. 小茂田昌代、研修ノートシリーズ 皮膚科研修ノート、永井良三(総監)、佐藤伸一、藤本学(編)、診断と治療社、p646-648,(2016).
5. 小茂田 昌代: 病棟アワー、「薬物有害事象マネジメント」、ラジオ日経、(2016).
6. *石井則久、小茂田昌代、他、EBM 皮膚疾患の治療 up-to-date、中外医学社、309-312(2015).

佐藤嗣道

1. 佐藤嗣道、9-1. 臨床研究の目的とデザイン、9-2. 観察研究、山崎幹夫(監修)、望月眞弓、武立啓子、堀里子(編)、医薬品情報学 [第4版]、東京大学出版会、pp.125-131, pp.132-139(2016).

浜田知久馬

1. 矢田真城、浜田知久馬、抗がん剤の第I相試験におけるMTD推定に有用なCRMの歴史的発展と将来の展望. 臨床薬理. 46-1, 8-16(2015)
2. Nakanishi, N., Hashimoto, T., and Hamada, C., Validity and effectiveness of the Williams multiple comparison test in pharmacological studies. (薬理薬効試験におけるこれからの標準的検定手法薬理薬効試験におけるWilliams多重比較検定の妥当性と有用性). Nihon Yakurigaku Zasshi. 144(4), 185-191(2014).

<学会発表>

【探索グループ】

西山千春

国内学会発表

1. Yashiro, T., Kasakura, K., Nishiyama, C. The nuclear orphan receptor NR4a3/NOR1 is involved in the function of dendritic cells. The 45th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, Ginowan (Okinawa), December 5-7(2016).
2. Kasakura, K., Yashiro, T., Hara, M., Okumura, K., Nishiyama, C. GATA2 is involved in the expression of the decoy receptor for IL-33 by binding to the proximal promoter with chromosomal loop formation. The 45th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, Ginowan (Okinawa), December 5-7(2016).
3. Tezuka, T., Kasahara, T., Ueno, Y., Nishiyama, C., Oda, A., Goitsuka, R. Transcription factor Tlx1 regulates the ability of spleen mechanical stromal cells to support the survival of hematopoietic progenitor cells in vitro. The 45th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, Ginowan (Okinawa), December

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- 5-7 (2016).
4. Oda, A., Tezuka, T., Kasahara, T., Ueno, Y., Nishiyama, C., Goitsuka, R. Interdependent roles of Tlx1-expressing mesenchymal cells and macrophages in extra medullary hematopoiesis in the spleen. The 45th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, Ginowan (Okinawa), December 5-7 (2016).
 5. 山本満智子、八代拓也、笠倉和巳、西山千春、インフラマソーム構成分子 NLRP3 遺伝子の単球系細胞特異的発現制御機構の解明、第 39 回日本分子生物学会年会、横浜、11 月 30 日-12 月 2 日 (2016) .
 6. 渡辺良介、八代拓也、笠倉和巳、西山千春、樹状細胞における PD-L2 の遺伝子発現制御機構の解析、第 39 回日本分子生物学会年会、横浜、11 月 30 日-12 月 2 日 (2016) .
 7. 内田万紀子、中野信浩、原むつ子、笠倉和巳、八代拓也、西山千春、マスト細胞における転写因子 Ehf の機能解析、第 39 回日本分子生物学会年会、横浜、11 月 30 日-12 月 2 日 (2016) .
 8. 内田佑奈、八代拓也、笠倉和巳、西山千春、NR4a3 によるマクロファージにおける MDC/CCL22 発現調節、第 39 回日本分子生物学会年会、横浜、11 月 30 日-12 月 2 日 (2016) .
 9. 小田祥人、笠倉和巳、八代拓也、西山千春、PU.1 を標的としたマスト細胞依存性アレルギー反応の制御、第 39 回日本分子生物学会年会、横浜、11 月 30 日-12 月 2 日 (2016) .
 10. 由良志織、八代拓也、笠倉和巳、西山千春、樹状細胞の免疫調節機能に対する Pterostilbene の作用、日本食品免疫学会 2016 年度大会、東京、11 月 9-10 日 (2016) .
 11. 藤垣泉、笠倉和巳、八代拓也、西山千春、短鎖脂肪酸によるマスト細胞の機能制御、日本食品免疫学会 2016 年度大会、東京、11 月 9-10 日 (2016) .
 12. 濱田琢人、笠倉和巳、八代拓也、西山千春、Tannic acid によるアレルギー抑制効果とメカニズム解析、日本食品免疫学会 2016 年度大会、東京、11 月 9-10 日 (2016) .
 13. 八代拓也、長岡雅典、笠倉和巳、西山千春、樹状細胞の活性化反応における核内受容体型転写因子 NR4a3 の機能解析、日本農芸化学会 2016 年度大会、札幌、3 月 27-30 日 (2016).
 14. 山本真也、中野信浩、八代拓也、笠倉和巳、奥村康、西山真、西山千春、マウス IgE 抗体への結合活性が上昇したヒト Fc ϵ RI α サブユニット改変体の作製、日本農芸化学会 2016 年度大会、札幌、3 月 27-30 日 (2016).
 15. 中野信浩、本庄明日香、西山千春、大塚宣一、清水俊明、奥村康、小川秀興、Notch シグナル阻害による食物アレルギーの症状の軽減、日本農芸化学会 2016 年度大会、札幌、3 月 27-30 日 (2016).
 16. 笠倉和巳、八代拓也、原むつ子、奥村康、西山千春、マスト細胞における C/EBP α 遺伝子の発現抑制の調節、日本農芸化学会 2016 年度大会、札幌、3 月 27-30 日 (2016).
 17. 山口昌樹、八代拓也、笠倉和巳、西山千春、樹状細胞において RALDH2 発現を亢進する食品成分の探索、日本農芸化学会 2016 年度大会、札幌、3 月 27-30 日 (2016).
 18. 中村秀輔、八代拓也、笠倉和巳、西山千春、マウスランゲルハンス細胞において Cd207 遺伝子は転写調節因子 PU.1 によって転写制御される、BMB2015 (第 38 回日本分子生物学会年会、第 88 回日本生化学会大会)、神戸、12 月 1-4 日 (2015).
 19. 竹内裕美、八代拓也、笠倉和巳、西山千春、T 細胞における CCR7 発現制御機構の解析、BMB2015 (第 38 回日本分子生物学会年会、第 88 回日本生化学会大会)、神戸、12 月 1-4 日 (2015).
 20. 山口昌樹、八代拓也、笠倉和巳、西山千春、樹状細胞における RALDH2 の発現制御機構、BMB2015 (第 38 回日本分子生物学会年会、第 88 回日本生化学会大会)、神戸、12 月 1-4 日 (2015).
 21. 太田彩花、笠倉和巳、八代拓也、西山千春、マスト細胞における IL-10 発現制御機構の解明、BMB2015 (第 38 回日本分子生物学会年会、第 88 回日本生化学会大会)、神戸、12 月 1-4 日 (2015).
 22. Oda, Y., Kasakura, K., Yashiro, T., Okumura, K., Nishiyama, C., PU.1 Regulates Expression of the Syk Gene in Mast Cells. The 44th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, Sapporo, November 18-20 (2015).
 23. Nakano, N., Nishiyama, C., Hara, M., Yagita, H., Okumura, K., Ogawa, H., Notch Signaling Enhances Mast Cell Cytokine Production through Direct and Indirect Mechanisms. The 44th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, Sapporo, November 18-20 (2015).

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

24. Yashiro, T., Okumura, K., Nishiyama, C., PU.1 Is Involved in Migration of Dendritic Cells via Regulating Expression of CCR7. The 44th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, Sapporo, November 18-20 (2015).
25. Miura, R., Kasakura, K., Nakano, N., Yashiro, T., Nishiyama, C., PU.1 Regulates MHC Class II Expression by Transactivation of CIITA in Plasmacytoid Dendritic Cells. The 44th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, Sapporo, November 18-20(2015).
26. 八代拓也、奥村康、西山千春、マスト細胞において GATA3 は Th2 型サイトカインの発現を制御する、日本農芸化学会 2015 年度大会、岡山大学、3 月 28 日(2015)。
27. 森貞志穂、岩永直樹、富田武郎、西山千春、葛山智久、西山真、高度高熱菌 *Thermus thermophiles* における ArgR を介した新規アルギニン生合成転写調節機構、日本農芸化学会 2015 年度大会、岡山大学、3 月 28 日(2015)。
28. 三浦亮介、笠倉和巳、中野信浩、前田隆浩、八代拓也、西山千春、形質細胞様樹状細胞における MHC class II 発現制御因子 CIITA の転写調節に対する PU.1 の役割、日本農芸化学会 2015 年度大会、岡山大学、3 月 28 日(2015)。
29. 笠倉和巳、原むつ子、奥村康、西山千春、菌体成分によるマスト細胞の Fc ϵ RI 発現抑制、日本農芸化学会 2015 年度大会、岡山大学、3 月 28 日(2015)。
30. 中野信浩、山崎晋、西山千春、大塚宣一、清水俊明、奥村康、小川秀興、TGF- β によるマスト細胞機能の抑制を仲介する転写因子 Ehf の機能解析、日本農芸化学会 2015 年度大会、岡山大学、3 月 28 日(2015)。
31. Kasakura, K., Yashiro, T., Okumura, K., and Nishiyama, C., Regulation of soluble ST2 expression in mast cells. The 43rd Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology. Kyoto, December 11 (2014).
32. 堀谷透志、笠倉和巳、斎藤臣雄、長田裕之、八代拓也、西山千春、ベタメタゾン^βはマスト細胞の Fc ϵ RI 発現を抑制する、第 37 回日本分子生物学会年会、みなとみらい横浜、11 月 27 日(2014)。
33. 長岡雅典、八代拓也、笠倉和巳、西山千春、樹状細胞における転写制御因子 NR4a3 の機能解析、第 37 回日本分子生物学会年会、みなとみらい横浜、11 月 27 日(2014)。
34. 野村くるみ、八代拓也、笠倉和巳、西山千春、樹状細胞における CCL22/MDC の発現制御機構の解析、第 37 回日本分子生物学会年会、みなとみらい横浜、11 月 27 日(2014)。
35. 三浦亮介、笠倉和巳、中野信浩、前田隆浩、八代拓也、西山千春、PU.1 は形質細胞様樹状細胞において、CIITA 第 3 プロモーター制御を介して MHC class II 発現に寄与する、第 37 回日本分子生物学会年会、みなとみらい横浜、11 月 27 日(2014)。

深井文雄

国内学会発表

1. 酒井俊輔、平野悠、笹田学、大塚一樹、伊豫田拓也、末永雄介、横井左奈、深井文雄、N-Myc のプロテアソーム分解を介した進行性神経芽腫の悪性形質の低下ならびにその治療への応用に関する基礎的検討、日本薬学会第 137 年会、仙台、3 月 27 日(2017)。
2. 工藤睦子、俵博希、長井怜雄、藤田元道、伊豫田拓也、山本哲哉、深井文雄、テネイシン C 由来インテグリン活性化ペプチドによる神経膠芽腫の悪性化進展およびそれに基づく新規治療法の提案、日本薬学会第 137 年会、仙台、3 月 26 日(2017)。
3. 板垣圭祐、笹田学、深井文雄、インテグリン機能制御に基づく抗がん剤の創製、日本薬学会第 137 年会 シンポジウム、仙台、3 月 25 日(2017)。
4. 平野悠、笹田学、伊豫田拓也、深井文雄、 β 1 インテグリン活性化に基づくビタミン A によるがんの分化誘導療法の効率化の試み、日本薬学会第 136 年会、横浜、3 月 28 日(2016)。
5. 浅山龍文、笹田学、伊豫田拓也、深井文雄、 β 1 インテグリン活性化に基づくレチノイン酸による神経芽腫分化誘導の促進、日本薬学会第 136 年会、横浜、3 月 28 日(2016)。
6. 菊池優希、渡辺ひかる、伊豫田拓也、鈴木英雄、深井文雄、大腸発がんおよびその悪性化進展におけるテネイシン C の関与、日本薬学会第 136 年会、横浜、3 月 27 日(2016)。
7. 俵博希、長井怜雄、堀越ひかる、藤田元道、伊豫田拓也、山本哲哉、深井文雄、テネイシン C 由来のインテグリン活性化ペプチドによる神経膠芽腫細胞の悪性化進展、日本薬学会第

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- 136 年会、横浜、3 月 27 日 (2016).
8. 大澤琢郎、萩原裕、山下理菜、伊豫田拓也、深井文雄、テネイシン C に由来するペプチドは細胞老化誘導を介してがん化に関与する、日本薬学会第 136 年会、横浜、3 月 27 日 (2016).
 9. 猪股弘基、久我章、今泉貴大、伊豫田拓也、深井文雄、膜型タンパク質翻訳伸長因子 eEF1A を介したペプチド FNIII14 の反接着作用の発現とその生理的意義、日本薬学会第 136 年会、横浜、3 月 27 日 (2016).
 10. 長井怜雄、工藤睦子、俵博希、藤田元道、伊豫田拓也、深井文雄、Involvement of a peptide derived from tenascin-C in malignant progression of glioblastoma -New target for glioblastoma chemotherapy-. 第 53 回ペプチド討論会、京都、10 月 26 日 (2016).
 11. 浅山龍文、笹田学、大塚一樹、伊豫田拓也、深井文雄、A peptide derived from tenascin-C, TNIIIA2, enhances proteasomal degradation of N-Myc and neural differentiation of neuroblastoma cells induced by all-trans retinoic acid. 第 53 回ペプチド討論会、京都、10 月 26 日 (2016).
 12. 萩原裕、伊豫田拓也、深井文雄、Senescence induction in fibroblasts by the tenascin-C derived peptide TNIIIA2 is associated with malignant transformation of pre-malignant epithelial cells. 第 53 回ペプチド討論会、京都、10 月 26 日 (2016).
 13. 工藤睦子、藤田元道、長井怜雄、俵博希、伊豫田拓也、山本哲哉、深井文雄、テネイシン C 由来インテグリン活性化ペプチドによる神経膠芽腫の悪性化進展およびそれに基づく新規治療法の提案、第 60 回日本薬学会関東支部大会、東京、9 月 17 日 (2016).
 14. 笹田学、平野悠、酒井俊輔、大塚一樹、伊豫田拓也、深井文雄、N-Myc 分解を基盤とした悪性神経芽腫に対する新規分化誘導療法、第 60 回日本薬学会関東支部大会、東京、9 月 17 日 (2016).
 15. 奥脇陽介、猪股弘基、板垣圭祐、伊豫田拓也、深井文雄、反接着性リガンド FNIII14 と膜型 eEF1A の相互作用は腫瘍細胞の移動・浸潤・転移に関与する、第 60 回日本薬学会関東支部大会、東京、9 月 17 日 (2016).
 16. 酒井俊輔、平野悠、浅山龍文、笹田学、大塚一樹、伊豫田拓也、末永雄介、横井左奈、深井文雄、N-Myc のプロテアソーム分解に基づく神経芽腫の悪性形質低下、第 60 回日本薬学会関東支部大会、東京、9 月 17 日 (2016).
 17. 伊豫田拓也、深井文雄、テネイシン C 分子内領域 TNIIIA2 によるマクロファージの機能調節と泡沫細胞化、第 4 回 MatriCell Forum、東京、9 月 4 日 (2016).
 18. 板垣圭祐、伊豫田拓也、深井文雄、反接着性リガンド FNIII14 と膜型 eEF1A の相互作用に基づく腫瘍細胞の移動・浸潤・転移の制御、第 4 回 MatriCell Forum、東京、9 月 3 日 (2016).
 19. 大塚一樹、伊豫田拓也、深井文雄、N-Myc タンパク質分解に基づく神経芽腫細胞の悪性形質低下とそれに基づく新規分化誘導療法、第 4 回 MatriCell Forum、東京、9 月 3 日 (2016).
 20. 笹田学、伊豫田拓也、深井文雄、がん原遺伝子産物 Myc family タンパク質の分解に基づく腫瘍細胞の悪性形質低下誘導、第 4 回 MatriCell Forum、東京、9 月 3 日 (2016).
 21. 藤田元道、伊豫田拓也、深井文雄、神経膠芽腫の悪性化に伴うテネイシン C の関与およびそれに基づく新規治療法の提案、第 4 回 MatriCell Forum、東京、9 月 3 日 (2016).
 22. 辻優奈、飯島一智、柿本敦史、二ノ宮理恵、伊豫田拓也、深井文雄、橋詰峰雄、多糖複合フィルムに対する細胞の接着および増殖性の評価と制御、日本化学会第 95 春季年会、船橋、3 月 28 日 (2015).
 23. 萩原裕、奥山慎、山下理菜、伊豫田拓也、深井文雄、細胞外マトリックスタンパク質に由来するペプチドは細胞老化の誘導を介して腫瘍形成と悪性化に関与する、日本薬学会第 135 年会、神戸、3 月 26-28 日 (2015).
 24. 伊豫田拓也、風間美香、竹田康次郎、深井文雄、テネイシン C 分子内領域による動脈硬化病態調節、日本薬学会第 135 年会、神戸、3 月 26-28 日 (2015).
 25. 笹田学、野原佑介、伊豫田拓也、深井文雄、 $\beta 1$ インテグリン活性化に基づく新規分化誘導療法に関する基礎的検討、日本薬学会第 135 年会、神戸、3 月 26-28 日 (2015).
 26. 長井怜雄、堀越ひかる、伊豫田拓也、深井文雄、テネイシン C 由来のペプチドによる神経膠芽腫の悪性化進展および それに基づく新規治療法の提案、日本薬学会第 135 年会、神戸、3 月 26-28 日 (2015).

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

27. Imaizumi, T., Kuga, A., Iyoda, T., and Fukai, F., Participation of Cell Membrane Expressed eEF1A in Migration, Invasion and Metastasis of Tumor Cells. 第52回ペプチド討論会、平塚、11月18日(2015).
28. Kuga, A., Imaizumi, T., Iyoda, T., and Fukai, F., Membrane Expression of Eukaryotic Protein Elongation Factor(eEF)1A and its Physiological Role. 第52回ペプチド討論会、平塚、11月17日(2015).
29. Iyoda, T., and Fukai, F., Promotion of Macrophage Foam Cell Formation by the Peptide Derived from Tenascin-C. 第52回ペプチド討論会、平塚、11月17日(2015).
30. 伊豫田拓也、深井文雄、テネイシン C 分子内領域によるマクロファージ機能調節、第3回 MatriCell Forum、津、9月13日(2015).
31. 笹田学、平野悠、野原佑介、伊豫田拓也、深井文雄、 $\beta 1$ インテグリン活性化に基づく Myc 分解による悪性形質低下、第3回 MatriCell Forum、津、9月12日(2015).
32. 久我章、今泉貴大、猪俣弘基、伊豫田拓也、深井文雄、膜型タンパク質翻訳伸長因子 eEF1A を介したペプチド FNIII14 の反接着作用の発現とその生理学的意義、第3回 MatriCell Forum、津、9月12日(2015).
33. 今泉貴大、久我章、猪俣弘基、伊豫田拓也、深井文雄、細胞膜上に発現したタンパク質翻訳伸長因子 eEF1A の腫瘍細胞の移動・浸潤・転移への関与、第3回 MatriCell Forum、津、9月12日(2015).
34. 生熊北斗、伊豫田拓也、深井文雄、悪性腫瘍細胞の浸潤および増殖におけるオートファジーの役割、第59回日本薬学会関東支部会、習志野、9月12日(2015).
35. 伊豫田拓也、深井文雄、テネイシン C 分子内領域によるマクロファージ泡沫化の亢進、第59回日本薬学会関東支部会、習志野、9月12日(2015).
36. 長井怜雄、藤田元道、堀越ひかる、俵博希、伊豫田拓也、深井文雄、テネイシン C 由来のインテグリン活性化ペプチドによる神経膠芽腫の悪性化進展、第59回日本薬学会関東支部会、習志野、9月12日(2015).
37. 萩原裕、山下里菜、大澤琢郎、伊豫田拓也、深井文雄、テネイシン C 由来ペプチドは細胞老化誘導を介してがん化とその悪性化に関与する、第59回日本薬学会関東支部会、習志野、9月12日(2015).
38. 笹田学、伊豫田拓也、深井文雄、 $\beta 1$ インテグリン活性化ペプチド TNIIIA2 を用いた新規分化誘導療法の基礎的検討、第19回日本がん分子標的治療学会学術集会、松山、6月11日(2015).
39. 萩原裕、山下里菜、大澤琢郎、伊豫田拓也、深井文雄、テネイシン C に由来するペプチドは細胞老化誘導を介して腫瘍形成および悪性化に関与する、第19回日本がん分子標的治療学会学術集会、松山、6月11日(2015).
40. 長井怜雄、日向野篤、伊豫田拓也、深井文雄、テネイシン C 由来のインテグリン活性化ペプチドによる神経膠腫細胞の悪性化進展、第19回日本がん分子標的治療学会学術集会、松山、6月11日(2015).
41. 久我章、伊豫田拓也、深井文雄、タンパク質翻訳伸長因子 eEF1A の細胞膜発現機構と膜 eEF1A の生理的役割、第47回日本結合組織学会学術大会、品川、5月16日(2015).
42. 伊豫田拓也、深井文雄、テネイシン C 由来ペプチド TNIIIA2 によるマクロファージ泡沫細胞化の亢進、第47回日本結合組織学会学術大会、品川、5月16日(2015).
43. 渡辺ひかる、伊豫田拓也、深井文雄、大腸発がんにおけるテネイシン C の関与、第47回日本結合組織学会学術大会、品川、5月16日(2015).
44. Iijima, K., Tsuiji, Y., Kakimoto, A., Ninomiya, R., Iyoda, T., Fukai, F., and Hashizume, M., Behavior of Fibroblast and Tumor Cells on Chondroitin Sulfate C/Chitosan Composite Films. 第24回日本MRS年次大会、横浜、12月12日(2014).
45. 長井怜雄、日向野篤、堀越ひかる、伊豫田拓也、深井文雄、テネイシン C 由来のペプチドはインテグリンの活性化を介して神経膠芽腫細胞の悪性化進展を増強する、第5回東京理科大学総合研究機構戦略的物理製剤学研究基盤センターシンポジウム・第12回東京理科大学薬学 DDS 研究センターシンポジウム、東京、12月8日(2015).
46. 萩原裕、奥山慎、山下理菜、伊豫田拓也、深井文雄、テネイシン C 由来ペプチド TNIIIA2 に

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- よる細胞老化誘導およびその腫瘍形成・悪性化進展への関与、第5回東京理科大学総合研究機構戦略的物理製剤学研究基盤センターシンポジウム・第12回東京理科大学薬学 DDS 研究センターシンポジウム、東京、12月8日 (2015).
47. Iyoda, T., Kazama, M., Takeda, K., and Fukai, F., Role of the tenascin-C-derived peptide TNIIIA2 in the formation of atherosclerotic foam cell. 第51回 ペプチド討論会、徳島、10月23日 (2014),
 48. Mizunuma, T., Iyoda, T., and Fukai, F., Cell adhesion-mediated drug resistance (CAM-DR) in acute myelogenous leukemia cells and its abrogation by the anti-adhesive peptide FNIII14. 第51回 ペプチド討論会、徳島、10月23日 (2014).
 49. 辻優奈、飯島一智、柿本敦史、二ノ宮理恵、伊豫田拓也、深井文雄、橋詰峰雄、コンドロイチン硫酸/キトサンフィルムに対する NIH3T3 細胞の接着性および増殖性評価、第4回 CSJ 化学フェスタ、東京、10月15日 (2014).
 50. 今泉貴大、伊豫田拓也、深井文雄、細胞膜上に発現したタンパク質翻訳伸長因子 eEF1A の腫瘍細胞移動・浸潤・転移への関与、第58回 日本薬学会関東支部大会、東京、10月4日 (2014).
 51. 久我章、岡本和良、伊豫田拓也、深井文雄、タンパク質翻訳伸長因子 eEF1A の細胞膜発現とその生理機構、第58回 日本薬学会関東支部大会、東京、10月4日 (2014).
 52. 飯島一智、辻優奈、柿本敦史、二ノ宮理恵、伊豫田拓也、深井文雄、橋詰峰雄、熱プレス法により作製したコンドロイチン硫酸/キトサン複合フィルム上での細胞培養、第8回バイオ関連化学シンポジウム、岡山、9月11日 (2014).
 53. 渡辺ひかる、石橋一馬、伊藤優香、岡田佑子、伊豫田拓也、鈴木英雄、深井文雄、大腸発がんおよび大腸がんの悪性化進展におけるテネイシンCの関与、第2回 MatriCell フォーラム、東京、9月7日 (2014).
 54. 山下理菜、奥山慎、萩原裕、伊豫田拓也、深井文雄、テネイシンC由来ペプチド TNIIIA2 による細胞老化誘導およびその腫瘍形成・悪性化への関与、第2回 MatriCell フォーラム、東京、9月7日 (2014).
 55. 伊豫田拓也、風間美香、竹田康次郎、深井文雄、動脈硬化病態進展におけるテネイシンC由来ペプチド、第2回 MatriCell フォーラム、東京、9月7日 (2014).
 56. 堀越ひかる、日向野篤、長井怜雄、藤田元道、伊豫田拓也、山本哲哉、深井文雄、神経膠芽腫の悪性化に伴うテネイシンCの関与およびそれに基づく新規治療法の提案、第2回 MatriCell フォーラム、東京、9月7日 (2014).
 57. 笹田学、野原佑介、伊豫田拓也、深井文雄、 $\beta 1$ インテグリン活性化に基づく新規分化誘導療法に関する基礎的検討、第2回 MatriCell フォーラム、東京、9月7日 (2014).
 58. 辻優奈、柿本敦史、二ノ宮理恵、飯島一智、伊豫田拓也、深井文雄、橋詰峰雄、多糖複合フィルムへの線維芽細胞の接着性評価と制御方法の検討、第43回医用高分子シンポジウム、つくば、7月28日 (2014).
 59. 飯島一智、辻優奈、柿本敦史、二ノ宮理恵、伊豫田拓也、深井文雄、橋詰峰雄、コンドロイチン硫酸/キトサン複合フィルム上での細胞接着・増殖挙動の解析、東京、7月24日 (2014).
 60. 伊豫田拓也、深井文雄、がん細胞の悪性形質発現におけるオートファジーの役割、第18回日本がん分子標的治療学会、仙台、6月25-27日 (2014).
 61. 奥山慎、伊豫田拓也、深井文雄、テネイシンC由来ペプチドによる細胞老化誘導およびその腫瘍形成・悪性化への関与、第18回日本がん分子標的治療学会、仙台、6月25-27日 (2014).
 62. 野原佑介、大塚一樹、伊豫田拓也、深井文雄、 $\beta 1$ インテグリン活性化ペプチド TNIIIA2 による神経芽腫細胞の分化促進、第18回日本がん分子標的治療学会、仙台、6月25-27日 (2014).
 63. 日向野篤、伊豫田拓也、山本哲哉、深井文雄、テネイシンC由来ペプチドはインテグリン活性化に基づいて神経膠芽腫細胞の増殖、移動能を過剰に増強する、第18回日本がん分子標的治療学会、仙台、6月25-27日 (2014).
 64. 今泉貴大、伊豫田拓也、深井文雄、細胞膜上に発現したタンパク質翻訳伸長因子 eEF1A の、腫瘍細胞の移動・浸潤・転移への関与、第46回日本結合組織学会学術大会/第61回マトリックス研究会大会・合同学術集会、名古屋、6月5-7日 (2014).

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

65. 生熊北斗、伊豫田拓也、深井文雄、悪性腫瘍細胞の増殖および浸潤におけるオートファジーの役割、第46回日本結合組織学会学術大会/第61回マトリックス研究会大会・合同学術集会、名古屋、6月5-7日(2014)。
66. 久我章、伊豫田拓也、深井文雄、タンパク質翻訳伸長因子 eEF1A の細胞膜発現機構と膜 eEF1A の生理的役割、第46回日本結合組織学会学術大会/第61回マトリックス研究会大会・合同学術集会、名古屋、6月5-7日(2014)。
67. 辻優奈、二ノ宮理恵、飯島一智、伊豫田拓也、深井文雄、橋詰峰雄、多糖複合フィルム上における線維芽細胞の接着・増殖挙動の解析、第63回高分子学会年次大会、名古屋、5月30日(2014)。

国際会議

68. Asayama, T., Kuga, A., Iyoda, T., and Fukai, F., Membrane Expression of Eukaryotic Protein Elongation Factor 1A and its Physiological Role. The 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences 2016 (iPoPS 2016), Noda, Japan, February 27(2016).
69. Iijima, K., Tsuiji, Y., Kakimoto, A., Ninomiya, R., Iyoda, T., Fukai, F., and Hashizume, M., Interaction of Fibroblast with Polysaccharide Composite Films Obtained by Hot-Press Technique. The 10th International Polymer Conference (IPC2014), Tsukuba-Japan, December 5 (2014).
70. Higano, A., Iyoda, T., Yamamoto, T., and Fukai, F., Integrin activation by the tenascin C-derived peptide TNIIIA2 enhances proliferation and migration in glioblastoma cells. The Fifth Indo-Japan International Joint Symposium on Overcoming Intractable Infectious Diseases Prevalent in Asian Countries, Tokyo-Japan, September 16-17 (2014).
71. Iyoda, T., Kazama, M., Takeda, K., and Fukai, F., Role of the tenascin-C-derived peptide TNIIIA2 in the formation of atherosclerotic foam cell. The Fifth Indo-Japan International Joint Symposium on Overcoming Intractable Infectious Diseases Prevalent in Asian Countries, Tokyo-Japan, September 16-17 (2014).

招待講演

72. 深井文雄、細胞接着分子インテグリンを標的とした新しい抗腫瘍薬の開発の展望、日本薬学会第136年会シンポジウム「がん分子標的治療の発展に貢献する薬学基礎研究～より有効な分指標的治療戦略のために～」、横浜、3月27日(2016)。
73. Iyoda, T., and Fukai, F., Role of the TNIIIA2 Site in Tenascin-C in the Progression of Atherosclerosis. The 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences 2016 (iPoPS 2016), Noda, Japan, February 28(2016).
74. Fukai, F., Cell Regulation through Control of Integrin Activation, International Symposium of Tokyo University of Science, Translational Research Center, Tokyo, June 25 (2016).
75. 伊豫田拓也、深井文雄、テネイシンCを介したマクロファージ機能調節と炎症関連病態の形成、第5回東京理科大学総合研究機構戦略的物理製剤学研究基盤センターシンポジウム・第12回東京理科大学薬学 DDS 研究センターシンポジウム、東京、12月8日(2015)。
76. 伊豫田拓也、深井文雄、細胞外マトリックス由来ペプチドによるマクロファージ機能と動脈硬化病態の調節、第133回日本薬理学会関東支部会、柏、10月10日(2015)。

佐藤圭子

国内学会発表

1. 佐藤圭子、原利英、大矢雅則、インフルエンザA型ウイルスレセプター結合領域の符号構造と変異規則の発見、トランスレーショナルリサーチセンター第1回公開セミナー、東京理科大学野田キャンパス、1月10日(2015)。
2. 西巻拓真、佐藤圭子、塩基の挿入欠失を考慮した遺伝的差異の有用性、日本遺伝学会第87回大会、宮城、9月(2015)。
3. 西巻拓真、佐藤圭子、塩基の挿入／欠失を考慮した遺伝的差異、日本進化学会第17回大会、東京、8月(2015)。

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

国際会議発表

4. Sato, K., Hara, T., and Ohya, M., A Coding Theoretical Approach to Predict Sequence Changes in H5N1 Influenza A Virus Hemagglutinin. 9th International Joint Conference on Biomedical Engineering Systems and Technologies (BIOSTEC 2016), Roma, Italy, February 22 (2016).
5. Motomura, H., Katayama, R., Tamori, S., Matsumura, M., Yanagawa, T., Waki, Y., Takasawa, R., Tanuma, S.-I., Miyagi, Y., Nagashima, Y., Imai, M., Sato, K., Akimoto, K., Correlation between the Expression Levels of aPKC λ/ι and GLO1 in Breast Cancer. 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences (iPoPS 2016), Chiba, Japan, March (2016).
6. Sato, K., Prognostic Classification of Breast Cancer Based on Information Measure. QBIC Workshop 2015, Chiba, Japan, October 19 (2015).
7. Keiko Sato, Toshihide Hara, Masanori Ohya, The code structure of the receptor binding domain of influenza A virus hemagglutinin, QBIC Workshop 2014, Noda campus of Tokyo University of Science, October 23 (2014).

秋本和憲

国内学会発表

1. *南島治、片山鈴花、小野寺佑佳、野崎優香、柳川拓哉、佐藤圭子、神保美穂、原泰志、安部良、今井美沙、田沼靖一、大野茂男、川上隆雄、秋本和憲、ALDH1 陽性乳癌幹細胞における PKC λ/ι 依存的な糖代謝機構の解析、日本薬学会第 137 年会、仙台、3 月 (2017)
2. *本村瞳、片山鈴花、多森翔馬、松村将史、柳川拓哉、和氣由布子、高澤涼子、田沼靖一、宮城洋平、長嶋洋治、秋本和憲、ヒト乳癌における Atypical protein kinase C (aPKC) λ/ι と糖代謝機構との関連、日本薬学会第 136 年会、横浜、3 月 (2016).
3. *野崎優香、稲田将大、片山鈴花、中根裕美、二俣沙央里、松村将史、小野寺佑佳、原泰志、安部良、今井美沙、田沼靖一、秋本和憲、Atypical protein kinase C (aPKC) 依存的な乳癌 ALDH1 陽性癌幹細胞の生存メカニズムの解析、日本薬学会第 136 年会、横浜、3 月 (2016).
4. *片山鈴花、中根裕美、稲田将大、小野寺佑佳、神保美穂、原泰志、安部良、今井美沙、田沼靖一、大野茂男、川上隆雄、秋本和憲、乳癌 ALDH1 陽性癌幹細胞における Atypical protein kinase C(aPKC) 依存的な解糖系代謝制御機構の役割、日本薬学会第 136 年会、横浜、3 月 (2016).
5. Babita Shashni, Hidehiko Matsuura, Kenta Nomura, Takuto Maeda, Kazunori Akimoto, Masanori Hayase, Hiroshi Takemura, Atsuo Yasumori, Naoyuki Aikawa, Shin Aoki Development of Convenient Methods in Detection and Separation of Circulating Tumor Cells (CTCs) and CTC Clusters 第 60 回日本薬学会関東支部大会、東京、9 月 (2016)
6. Babita Shashni, Hidehiko Matsuura, Kenta Nomura, Takuto Maeda, Kazunori Akimoto, Masanori Hayase, Hiroshi Takemura, Atsuo Yasumori, Naoyuki Aikawa, Shin Aoki, Development of Convenient Methods in Detection and Separation of Circulating Tumor Cells (CTCs) and CTC Clusters 第 10 回バイオ関連化学シンポジウム、金沢、9 月 (2016)
7. *本村瞳、和氣由布子、高澤涼子、宮城洋平、長嶋洋治、今井美沙、佐藤圭子、田沼靖一、大野茂男、秋本和憲、ヒト乳癌における Atypical protein kinase C(aPKC) と糖代謝機構との関連 第 60 回日本薬学会関東支部大会、東京、9 月 (2016)
8. 多森翔馬、南島治、松村将史、中根裕美、立花研、樋上賀一、大野茂男、秋本和憲 がん細胞における PKC λ/ι タンパク質過剰発現機構の解析、第 60 回日本薬学会関東支部大会、東京、9 月 (2016)
9. *野崎優香、本村瞳、小野寺佑佳、阿部真実、柳川拓哉、原泰志、阿部良、今井美沙、田沼靖一、大野茂男、秋本和憲、Atypical protein kinase C(aPKC) は ALDH1 陽性乳癌幹細胞の生存に関与する 第 60 回日本薬学会関東支部大会、東京、9 月 (2016)
10. 原 (岩田) 倫太郎、前田雄介、久田有希、二俣沙央里、秋本和憲、和田猛、カチオン性人工オリゴ糖による二本鎖型核酸医薬の高機能化、日本核酸医薬学会第 2 回年会 東京、11 月 (2016)
11. 高澤涼子、田中ひかり、高田兼市、松岡立己、菊地恵梨子、嶋田奈実、吉森篤史、秋本和

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- 憲、田沼靖一、スチルベン骨格化合物による human Glyoxalase I 阻害の解析、日本薬学会第135回年会、神戸市、3月(2015)。
12. 神保美穂、上田尚学、高畑良雄、片山鈴花、秋本和憲、川上隆雄、LC-MS/MS のデータ比較解析ソフトウェア i-RUBY の開発と腫瘍リン酸化プロテオミクスへの応用、日本プロテオーム学会 2015 年会 (JHUP0 第 13 回大会)、熊本、7月(2015)。
 13. *本村瞳、片山鈴花、多森翔馬、松村将史、柳川拓哉、和氣由布子、高澤涼子、田沼靖一、宮城洋平、長嶋洋治、秋本和憲、ヒト乳癌における Atypical protein kinase C (aPKC) λ/ι と糖代謝機構との関連、第 59 回日本薬学会関東支部大会、船橋、9月(2015)。
 14. 稲田将大、片山鈴花、中根裕美、田村溪、高澤涼子、原泰志、安部良、吉森篤史、四ノ宮成祥、田沼靖一、秋本和憲、ヒト乳癌 ALDHhigh 細胞に対する MET 阻害剤の効果、第 59 回日本薬学会関東支部大会、船橋、9月(2015)。
 15. *野崎優香、稲田将大、片山鈴花、中根裕美、二俣沙央里、小野寺佑佳、原泰志、安部良、田沼靖一、秋本和憲、Atypical protein kinase C(aPKC) 依存的な乳癌 ALDHhigh 細胞の生存メカニズムの解析、第 59 回日本薬学会関東支部大会、船橋、9月(2015)。
 16. 高柳亜由美、佐々木和教、秋本和憲、大野茂男、スフィアアッセイを用いたマウス乳腺幹細胞の解析、第 59 回日本薬学会関東支部大会、船橋、9月(2015)。
 17. *片山鈴花、中根裕美、稲田将大、小野寺佑佳、神保美穂、原泰志、安部良、田沼靖一、川上隆雄、秋本和憲、リン酸化プロテオミクスを用いた乳癌 ALDH1high 細胞における Atypical Protein Kinase C(aPKC) の機能解析、第 59 回日本薬学会関東支部大会、船橋、9月(2015)。
 18. *中根裕美、片山鈴花、南島治、椎名将太、松村将史、稲田将大、菊池恵梨子、嶋田奈実、原泰志、安部良、吉森篤史、田沼靖一、高澤涼子、秋本和憲、乳癌細胞株から単離した ALDH high 細胞に対する新規 Glyoxalase I (GLO I) 阻害剤 TLSC702 の増殖抑制効果、第 59 回日本薬学会関東支部大会、船橋、9月(2015)。
 19. 大原有樹、鈴木忠樹、中野哲郎、齊藤慎二、林健太郎、寺内芳彦、矢野遙香、相内章、秋本和憲、長谷川秀樹、経鼻不活化インフルエンザワクチンにおける合成二重鎖 RNA uPIC のアジュバント活性の検討、第 19 回日本ワクチン学会、犬山、11月(2015)。
 20. 菊池恵梨子、嶋田奈実、秋本和憲、田沼靖一、高澤涼子、がん特異的代謝における Glyoxalase I 阻害による代謝シフトの解析、BMB2015 第 38 回日本分子生物学会年会、第 88 回日本生化学会大会合同大会、神戸、12月(2015)。
 21. *中根裕美、片山鈴花、本村瞳、南島治、椎名将太、松村将史、稲田将大、菊池恵梨子、嶋田奈実、原泰志、安部良、吉森篤史、田沼靖一、高澤涼子、秋本和憲、乳癌 ALDH1high 細胞における解糖系代謝酵素 Glyoxalase I (GLO I) の役割解析、BMB2015 第 38 回日本分子生物学会年会、第 88 回日本生化学会大会合同大会、神戸、12月(2015)。
 22. 片山鈴花、中根裕美、稲田将大、小野寺佑佳、神保美穂、原泰志、安部良、田沼靖一、大野茂男、川上隆雄、秋本和憲、リン酸化プロテオミクスを用いた乳癌 ALDH1high 細胞における Atypical Protein Kinase C (aPKC) の機能解析、BMB2015 第 38 回日本分子生物学会年会、第 88 回日本生化学会大会 合同大会、神戸、12月(2015)。
 23. 岡山明子、宮城洋平、尾下文浩、西真由子、中村圭靖、長嶋洋治、秋本和憲、梁明秀、平野久、プロテオミクス解析による肺腺癌予後関連タンパク質の検出、日本プロテオーム学会 2014 年会 (JHUP0 第 12 回大会)、つくば、7月(2014)。
 24. *稲田将大、片山鈴花、中根裕美、田村 溪、高澤涼子、原泰志、安部良、吉森篤史、四ノ宮成祥、田沼靖一、秋本和憲、ヒト乳癌 ALDHhigh 細胞 に対する MET 阻害剤の効果、第 58 回日本薬学会関東支部大会、町田、10月(2014)。
 25. *中根裕美、菊池恵梨子、片山鈴花、稲田将大、鈴木悠平、野池 芽衣、小玉大地、嶋田奈実、原泰志、安部良、吉森篤史、田沼 靖一、高澤涼子、秋本和憲、Basal-like 型乳癌細胞株から単離した ALDHhigh 細胞に対する 新規 Glyoxalase I (GLO I) 阻害剤 TLSC702 の増殖抑制効果、第 58 回日本薬学会関東支部大会、町田、10月(2014)。
 26. 大原 有樹、鈴木 忠樹、中野 哲郎、齊藤 慎二、相内 章、秋本 和憲、長谷川 秀樹、低毒性型合成二本鎖 RNA uPIC を用いた経鼻インフルエンザワクチンの開発、第 62 回日本ウイルス学会学術集会、横浜市、11月(2014)。

国際会議発表

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

27. Motomura, H., Katayama, R., Tamori, S., Matsumura, M., Yanagawa, T., Waki, Y., Takasawa, R., Tanuma, S.-I., Miyagi, Y., Nagashima, Y., Imai, M., Sato, K., Akimoto, K., Correlation between the Expression Levels of aPKC λ/ι and GLO1 in Breast Cancer. 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences (iPoPS2016), Chiba, Japan, February (2016)
28. Tamori, S., Minamishima, O., Matsumura, M., Nozaki, Y., Nakane, H., Tachibana, K., Mizunoe, Y., Higami, Y., Akimoto, K., Regulation of the Expression of Atypical Protein Kinase C by Autophagy in Cancer Cells. The 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences (iPoPS2016), Chiba, Japan. February (2016).
29. *Nozaki, Y., Inada, M., Katayama, R., Nakane, H., Tamori, S., Onodera, Y., Futamata, S., Mizunoe, Y., Hara, Y., Abe, R., Imai, M., Tanuma, S.-I., Higami, Y., Akimoto, K., Survival Dependency of ALDH1 Positive Breast Cancer Stem Cells (CSCs) on Atypical Protein Kinase C (aPKC). 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences (iPoPS2016), Chiba, Japan, February (2016).
30. Shiina, S., Motomura, M., Shashni, B., Hayase, M., Aoki, S., Akimoto, K., Characterization of Role of Atypical Protein Kinase C (aPKC) in In Vitro Model of CTC Cluster. 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences (iPoPS2016), Chiba, Japan, February (2016).
31. Ohara, Y., Suzuki, T., Nakano, N., Saito, S., Ainai, A., Akimoto, K., Hasegawa, H., Inactivated Influenza Vaccine Combined with Low Toxicity dsRNAs Induces Mucosal and Systemic Immunity after Intranasal Immunization in Mice. 9th Vaccine & ISV Congress, Seoul, South Korea, October (2015).

招待講演

32. 秋本和憲、難治性乳がんの新規予後予測および創薬標的分子の探索と評価「文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」総合研究院トランスレーショナル(TR)センター第6回シンポジウム 東京、1月(2017)。
33. 秋本和憲、乳癌幹細胞の解糖系代謝における atypical protein kinase C (aPKC) の役割、日本薬学会第136年会、横浜、3月(2016)。
34. Akimoto, K., The Role of Atypical Protein Kinase C (aPKC) in Glycolysis of Breast Cancer Stem Cell. The 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences (iPoPS2016), Chiba, Japan, March (2016).
35. 秋本和憲、がん幹細胞制御に関わる分子の探索研究、神奈川県立がんセンター研究会、横浜、1月(2016)
36. Akimoto, K., The role of atypical protein kinase C (aPKC) in glycolysis of breast cancer stem cell International Symposium of Tokyo University of Science, Translational Research (TR) Center, Tokyo, Japan, June (2016)
37. 秋本和憲、乳がん幹細胞の解糖系代謝における atypical protein kinase C (aPKC) の役割がんプロ研究シンポジウム 東京、7月(2016)
38. 秋本和憲、「がん幹細胞の代謝制御機構の解明とそれを標的とした創薬への展開」～がん幹細胞を標的とした創薬研究～、横浜市立大学大学院セミナー、横浜、1月(2015)。

【創薬グループ】

和田 猛

国内学会発表

1. 原倫太郎、前田雄介、和田猛、二本鎖核酸結合性カチオン性人工オリゴ糖の開発と核酸医薬への応用展開、トランスレーショナルリサーチセンター第6回シンポジウム、東京、1月21日(2017)。
2. 庄司浩輔、前田雄介、原倫太郎、和田猛、リン原子修飾型核酸の立体選択的合成を可能とするキラル縮合剤の開発、トランスレーショナルリサーチセンター第6回シンポジウム、東京、1月21日(2017)。
3. 額賀陽平、岡夏央、和田猛、キメラ型リン原子修飾核酸の立体選択的合成と性質、日本化学会第97春季年会、神奈川、3月19日(2017)。
4. 齋藤竜也、石井友香、額賀陽平、内山直樹、岩本直樹、和田猛、オキサザホスホリジン法に

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- よるボラノホスフェートDNAの立体選択的合成、日本化学会第97春季年会3月19日(2017).
5. 小川裕貴、野呂美穂子、原倫太郎、和田猛、リン原子修飾N-アセチルマンノサミン- α -1-リン酸アナログの立体選択的合成、日本化学会第97春季年会、神奈川、3月16日(2017).
 6. 佐野美知、野呂美穂子、原倫太郎、和田猛、Leishmania由来糖鎖構造を模倣したリン原子修飾糖1-リン酸アナログの立体選択的合成、日本化学会第97春季年会、神奈川、3月16日(2017).
 7. 矢尾板絢、武田勝也、植木啓陽、石井歩、井本英之、小林慧、佐野美知、野呂美穂子、佐藤一樹、原倫太郎、和田猛、Leishmania由来糖鎖構造を模倣した2-フッ化糖1-リン酸誘導体の固相合成、日本化学会第97春季年会、神奈川、3月16日(2017).
 8. Iida, T., Yoshino, R., Hara, R., Wada, T., Development of artificial ribonucleases using A-type duplex-bindable oligodiaminogalactose derivatives. 日本化学会第97春季年会, March 17 (2017).
 9. Shoji, K., Maeda, Y., Hara, R., Wada, T., Development of chiral condensing reagents for the stereocontrolled synthesis of phosphorus-modified oligonucleotide analogs. 日本化学会第97春季年会, March 17 (2017).
 10. 佐伯祐樹、伊藤弘暁、額賀陽平、植原渉、和田猛、H-ボラノホスホネート法によるボラノホスフェート型アンチセンス核酸の合成、日本核酸医薬学会第2回年会、東京、11月16日(2016).
 11. 前田雄介、岩田倫太郎、坂本泰一、和田猛、核酸医薬に結合する新規カチオン性人工ペプチドの合成と性質、日本化学会第96春季年会、京都、3月25日(2016).
 12. 阿部拓真、齋藤敬太、内山直樹、和田猛、ケイ素原子を有する不斉補助基を利用したボラノホスホトリエステル法によるボラノホスフェートDNAの立体選択的合成、日本化学会第96春季年会、京都、3月27日(2016).
 13. 小川裕貴、野呂美穂子、岩田倫太郎、和田猛、リン原子修飾N-アセチルマンノサミン- α -1-リン酸アナログの立体選択的合成、日本化学会第96春季年会、京都、3月24日(2016).
 14. 佐野美知、野呂美穂子、岩田倫太郎、和田猛、Leishmania由来糖鎖構造を模倣したリン原子修飾糖1-リン酸アナログの立体選択的合成、日本化学会第96春季年会、京都、3月24日(2016).
 15. 篠田貴昭、中田拓也、水嶋勇樹、伊藤弘暁、額賀陽平、和田猛、2'-デオキシヌクレオシド5'-ホスファイトをモノマーとする無保護DNA合成法の開発、日本化学会第96春季年会、京都、3月27日(2016).
 16. 吉野怜次郎、額賀陽平、岩田倫太郎、和田猛、5位修飾ウラシルを含むホスホロチオエートDNAの立体選択的合成と性質評価、日本化学会第96春季年会、京都、3月27日(2016).
 17. 原(岩田)倫太郎、前田雄介、坂本泰一、和田猛、RNA二重鎖特異的に結合するカチオン性オリゴ糖の開発と核酸医薬への応用展開、第35回日本糖質学会年会、高知、9月3日(2016).
 18. 佐野美知、野呂美穂子、原倫太郎、和田猛、Leishmania由来糖鎖構造を模倣したリン原子修飾糖1-リン酸アナログの立体選択的合成、第35回日本糖質学会年会、高知、9月3日(2016).
 19. Mitsuhashi, Y., Saito, K., Maeda, Y., Hara, R., Wada, T., Solid-phase synthesis of oligopeptides containing sterically hindered amino acids using PyNTP as a condensing reagent. The 53rd Japanese Peptide Symposium, Kyoto, Japan, October 27 (2016).
 20. 原倫太郎、前田雄介、久田有希、二俣沙央里、秋本和憲、和田猛、カチオン性人工オリゴ糖による二本鎖型核酸医薬の高機能化、日本核酸医薬学会第2回年会、東京、11月15日(2016).
 21. 吉野怜次郎、額賀陽平、前田雄介、原倫太郎、和田猛、5位修飾ピリミジンを含むホスホロチオエートDNAの立体選択的合成と性質、日本核酸医薬学会第2回年会、東京、11月15日(2016).
 22. 齋藤竜也、濱村友香、額賀陽平、内山直樹、岩本直樹、和田猛、オキサザホスホリジン法によるボラノホスフェートDNAの立体選択的合成、日本核酸医薬学会第2回年会、東京、11月15日(2016).
 23. 篠田貴昭、中田拓也、水嶋勇樹、額賀陽平、和田猛、2'-デオキシヌクレオシド5'-ホスフ

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- ァイトをモノマーとする核酸塩基部無保護 DNA 合成法の開発、日本核酸医薬学会第2回年会、東京、11月16日(2016).
24. 岩田倫太郎、中山太、廣地咲恵、佐藤一樹、仁科一隆、横田隆徳、和田猛、RNA 二重鎖を認識する新規カチオン性人工ペプチドの合成鎖結合性分子とビタミンEを組み合わせた siRNA キャリア分子の開発、第26回ビタミンE研究会、東京、1月10日(2015).
 25. 前田雄介、額賀陽平、岩田倫太郎、和田猛、立体制御したホスホロチオエート型核酸とカチオン性人工ペプチドとの相互作用解析、日本化学会第95春季年会、千葉、3月26日(2015).
 26. 久田有希、岩田倫太郎、前田雄介、和田猛、グアニジル基を有するオリゴジアミノガラクトース誘導体の合成および核酸二重鎖との相互作用、日本化学会第95春季年会、千葉、3月26日(2015).
 27. 武田勝也、野呂美穂子、小林慧、岩田倫太郎、和田猛、Leishmania 由来糖鎖構造を模倣した2-フッ化糖 1-リン酸誘導体の合成、日本化学会第95春季年会、千葉、3月29日(2015).
 28. 額賀陽平、岡夏央、和田猛、PO/PS および PO/PB キメラ RNA オリゴマーの立体選択的合成と性質、日本核酸医薬学会第1回年会、京都、11月30日(2015).
 29. 前田雄介、岩田倫太郎、坂本泰一、和田猛、核酸医薬を高活性化する新規カチオン性人工ペプチドの合成、日本核酸医薬学会第1回年会、京都、11月30日(2015).
 30. 額賀陽平、岡夏央、前田雄介、和田猛、リン原子の立体を制御した PO/PS キメラ DNA オリゴマーの自動固相合成、アンチセンス・遺伝子・デリバリーシンポジウム2014、東京、9月9日(2014).
 31. 前田雄介、岩田倫太郎、和田猛、核酸医薬の高活性化を目指した新規カチオン性人工ペプチドの合成、アンチセンス・遺伝子・デリバリーシンポジウム2014、東京、9月8日(2014).
 32. 伊藤弘暁、首藤智仁、植原渉、和田猛、2'-O-CEM 保護 H-ボラノホスホネート法によるボラン修飾型 RNA 類縁体の固相合成、アンチセンス・遺伝子・デリバリーシンポジウム2014、東京、9月9日(2014).
 33. 岩田倫太郎、前田雄介、土井明子、和田猛、二重鎖型核酸医薬への応用を指向した人工オリゴジアミノ糖の開発、アンチセンス・遺伝子・デリバリーシンポジウム2014、東京、9月9日(2014).
 34. 仁科智子、沼田純奈、仁科一隆、田中規恵、新田佳子、朴文英、岩田倫太郎、桑原宏哉、和田猛、横田隆徳、トコフェロール結合アンチセンスオリゴヌクレオチドの開発、アンチセンス・遺伝子・デリバリーシンポジウム2014、東京、9月8日(2014).
 35. 前田雄介、岩田倫太郎、和田猛、Properties of nucleic acid duplex binding peptides which control the nuclease activity. 第51回ペプチド討論会、徳島、10月23日(2014).
- 国際会議**
36. Nukaga, Y., Oka, N., and Wada, T., Synthesis and Properties of P-stereodefined PO/PB Chimeric Oligoribonucleotides. ISNAC2016. The 43th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2016, Kumamoto, Japan, September 29 (2016).
 37. Shinoda, T., Nakada, T., Mizushima, Y., Ito, H., Nukaga, Y., and Wada, T., Solid-phase synthesis of DNA using base-unprotect 2'-deoxyribonucleoside 5'-phosphites as monomer units. ISNAC2016. The 43th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2016, Kumamoto, Japan, September 27 (2016).
 38. Yoshino, R., Nukaga, Y., Hara, R., and Wada, T., Stereocontrolled synthesis and properties of phosphorothioate DNA containing C5-modified pyrimidine derivatives. ISNAC2016. The 43th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2016, Kumamoto, Japan, September 27 (2016).
 39. Iwamoto, N., Meena, Butler, D., Svrzikapa, N., Zlatev, I., Wada, T., Verdine, G., Optimization of Therapeutic Phosphorothioate Oligonucleotides by P-Chirality Control. International Symposium for Medicinal Sciences, Kobe, Japan, March 27 (2015).
 40. Iwata, R., Maeda, Y., Sakamoto, T., Wada, T., Artificial Cationic Oligosaccharides as Carriers for Nucleic Acid Drugs. ISNAC 2015 The 42th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2015, Hyogo, Japan, September 23 (2015).

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

41. Nukaga, Y., Oka, N., Wada, T., Synthesis and Properties of P-stereodefined PO/PS-chimeric Oligoribonucleorides. ISNAC 2015 The 42th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2015, Hyogo, Japan, September 24 (2015).
42. Ito, H., Shuto, T., Uehara, S., Wada, T., Solid-phase Synthesis of Boron-containing RNA Analogs by the 2'-O-CEM-protected H-boranophosphonate. ISNAC 2015 The 42th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2015, Hyogo, Japan, September 24 (2015).
43. Wada, T., Stereocontrolled Synthesis of Boron-containing Oligonucleotides as Therapeutic Agents. Pacificchem 2015, Hawaii, USA, December 15 (2015).
44. Iwata, R., Nakayama, F., Hirochi, S., Maeda, Y., Piao, W., Nishina, K., Yokota, Wada, T., RNA Duplex Binding Molecules as Carriers for siRNAs. Pacificchem 2015, Hawaii, USA, December 16 (2015).
45. Nukaga, Y, Oka, N., Wada, T., Synthesis and Properties of P-stereodefined PO/PS-chimeric Oligoribonucleotides. Pacificchem 2015, Hawaii, USA, December 17 (2015).
46. Wada, T., Uehara, S., Synthesis of LNA-modified Branophosphonate DNA by the H-Boranophosphonate Method. XXI ROUND TABLE ON NUCLEOSIDES, NUCLEOTIDES AND NUCLEIC ACIDS, Poznan, Poland, August 24-28 (2014).
47. Iwata, R., Maeda, Y., Wada, T., RNA Duplex-Selective Binding of Oligodiaminogalactose Derivatives. XXI ROUND TABLE ON NUCLEOSIDES, NUCLEOTIDES AND NUCLEIC ACIDS, Poznan, Poland, August 24-28 (2014).
48. Maeda, Y., Iwata, R., Wada, T., Properties of Cationic Peptides with Shorter Side Chain Lengths which Bind to A-Type Nucleic Acid Duplexes. XXI ROUND TABLE ON NUCLEOSIDES, NUCLEOTIDES AND NUCLEIC ACIDS, Poznan, Poland, August 24-28 (2014).
49. Wada, T., New Synthetic Approaches to Oligonucleotide Therapeutics. OTS annual meeting 2014, California, U.S.A., October 12-15 (2014).
50. Iwata, R., Maeda, Y., Wada, T., Double-stranded RNA binding properties of oligodiaminogalactose derivatives. 第41回国際核酸化学シンポジウム (ISNAC 2014 The 41th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2014), Fukuoka, Japan, November 5 (2014).
51. Maeda, Y., Iwata, R., Wada, T., Properties of Nucleic Acid Duplex Binding Peptides which Affect the Nuclease Activity. 第41回国際核酸化学シンポジウム (ISNAC 2014 The 41th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2014), Fukuoka, Japan, November 5 (2014).
52. Nukaga, Y., Oka, N., Maeda, Y., Wada, T., Stereocontrolled Synthesis of PO/PS Chimeric Oligodeoxyribonucleotided by the Oxazaphospholidine Approach. 第41回国際核酸化学シンポジウム (ISNAC 2014 The 41th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2014), Fukuoka, Japan, November 5 (2014).
53. Hisada, Y., Iwata, R., Wada, T., Synthesis and Properties of Guanidyl Group-containing Oligodiaminosaccharide Derivatives Binding to Nucleic Acid Duplexes. 第41回国際核酸化学シンポジウム (ISNAC 2014 The 41th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2014), Fukuoka, Japan, November 5 (2014).

招待講演

54. Wada, T., Artificial cationic oligopeptides that stabilize and activate nucleic acid therapeutics. International symposium for the drug-discovery of the pyrrole-imidazole polyamides as novel biomedicines, Tokyo, Japan, February 24 (2017).
55. 和田猛、核酸医薬創製への挑戦、ライフサイエンス交流会 in 柏の葉、千葉、5月27日 (2016).
56. Wada, T., Development of new molecular technologies for oligonucleotide therapeutics.
57. FISNA2016, Hyogo, Japan, July 8 (2016).
58. 和田猛、RNA 医薬の安定化と活性化に向けた新分子技術の開発、第8回日本 RNAi 研究会、第

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- 3回細胞外小胞学会、広島、9月1日(2016).
59. Wada, T., New molecular technologies for stabilization and activation of oligonucleotide therapeutics. A3RONA&CPRH Fukuoka2016, Fukuoka, Japan, September 23 (2016).
 60. 和田猛、核酸医薬の実用化に向けた新しい分子技術の開発、第2回東京理科大学・東京慈恵会医科大学合同シンポジウム、東京、10月1日(2016)。
 61. 和田猛、核酸医薬の安定化と高活性化に向けた新規分子技術の開発、BioJapan2016、神奈川、10月12日(2016)。
 62. 和田猛、核酸医薬の安定化と薬理活性の向上を実現する分子技術、技術情報協会セミナー (No.611119)、東京、11月25日(2016)。
 63. 和田猛、リンのキラリティー制御によるホスホロチオエートアンチセンスDNAの最適化、第7回Asia TIDES 2015、大阪、3月3日(2015)。
 64. 和田猛、RNA制御を基盤とした創薬研究の潮流、日本薬学会第135回年会、兵庫、3月26日(2015)。
 65. 和田猛、核酸医薬への有機化学的アプローチ、FIBER 未来大学核酸化学最前線フォーラム、兵庫、7月9日(2015)。
 66. 和田猛、核酸医薬への有機合成化学的アプローチ、第52回薬剤学懇談会研究討論会、石川、7月16日(2015)。
 67. Wada, T., New Synthetic Approaches to Oligonucleotide Therapeutics. Asian 3 Roundtable on Nucleic Acids 2015, Suwon, Korea, September 19 (2015).
 68. 和田猛、リン原子の立体制御によるホスホロチオエートアンチセンスDNAの高活性化、アンチセンス・遺伝子・デリバリーシンポジウム2014、東京、9月9日(2014)。
 69. 和田猛、核酸医薬への合成化学的アプローチ、大阪大学、大阪、10月7日(2014)。
 70. 和田猛、Artificial cationic oligopeptides as carriers for nucleic acid therapeutics, Asian 3 Roundtable on Nucleic Acids 2014、中国・アモイ大学、10月18日(2014)。

花輪剛久

国内学会発表

1. 河野弥生、花輪剛久、口腔粘膜炎症用口腔内フィルムの調製と評価、トランスレーショナルリサーチセンター第6回シンポジウム/研究交流会、1月21日(2017)
2. 庄野隼人、河野弥生、廣木章博、田口光正、花輪剛久、電子線架橋によるハイドロゲルの調製と評価(2)-吸水性に及ぼすポリアクリル酸の添加効果-、TRセンター第3回シンポジウム、東京、1月23日(2016)。
3. 芝野優希、河野弥生、山中沙織、吉澤一巳、廣木章博、田口光正、花輪剛久、トラマドール塩酸塩含有ハイドロゲル製剤からの薬物放出挙動および鎮痛効果の検討、日本薬学会第136回年会、横浜、3月28日(2016)。
4. 儘田大、河野弥生、花輪剛久、ポリビニルアルコール系樹脂(エクセバール)のハイドロゲル製剤への応用、日本薬学会第136回年会、横浜、3月28日(2016)。
5. 河野 弥生、花輪剛久、キシログルカンを用いた口腔粘膜炎症治療用口腔内フィルムの調製と評価、第2回再生医療とDDSの融合研究部門シンポジウム、12月26日(2016)
6. 野口太佑、河野弥生、花輪剛久、ポリ塩化ビニルの薬物担体としての応用の検討、オレオナノサイエンス部会シンポジウム2016、11月13日(2016)
7. 西須裕人、河野弥生、東頭二郎、植田圭佑、森部久仁一、花輪剛久、Application of the Drug-Colestimide Complex to Drug Delivery System、オレオナノサイエンス部会シンポジウム2016、2016年11月13日(2016)
8. 儘田 大、河野 弥生、花輪 剛久、ポリビニルアルコール系樹脂(Exceval®)のハイドロゲル製剤への応用(2)、第60回日本薬学会関東支部大会、2016年9月17日
9. 野口太佑、河野弥生、花輪剛久、ポリ塩化ビニルの薬物担体としての応用の検討、第60回日本薬学会関東支部大会、2016年9月17日(2016)
10. 西須裕人、河野弥生、東頭二郎、植田圭祐、森部久仁一、花輪剛久、Drug-Colestimide complexにおける胆汁酸との交換反応を利用したDDSの構築と評価、第60回日本薬学会関東支部大会、2016年9月17日(2016)

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

11. 影山理芳子、河野弥生、森田麻、清野慧至、花輪剛久、ヒアルロン酸の創傷治癒効果の検証、第 60 回日本薬学会関東支部大会、2016 年 9 月 17 日 (2016)
12. 庄野隼人、河野弥生、廣木章博、田口光正、花輪剛久、電子線架橋によるハイドロゲル製剤の調製と評価-吸水性に及ぼすポリアクリル酸の添加効果-、第 60 回日本薬学会関東支部大会、2016 年 9 月 17 日 (2016)
13. 影山理芳子、河野弥生、花輪剛久、創傷治癒を目的とした外用剤の開発、総合研究院トランスレーショナルリサーチセンター (TR) 第 5 回シンポジウム/研究交流会、2016 年 8 月 27 日 (2016)
14. 儘田大、河野弥生、花輪剛久、ポリビニルアルコール系樹脂 (Exceval®) のハイドロゲル製剤への応用、総合研究院トランスレーショナルリサーチセンター (TR) 第 5 回シンポジウム/研究交流会、2016 年 8 月 27 日 (2016)
15. 河野弥生、花輪剛久、イルソグラジンマレイン酸の口内炎への応用、第 10 回緩和医療薬学会年会、2016 年 6 月 4 日 (2016)
16. 野口太佑、河野弥生、花輪剛久、ポリ塩化ビニルの薬物担体としての応用の検討、日本薬剤学会 第 31 年会、2016 年 5 月 19 日 ~ 5 月 21 日 (2016)
17. 西須裕人、河野弥生、花輪剛久、Drug-Colestimide complex における胆汁酸との交換反応を利用した DDS の構築と評価、日本薬剤学会 第 31 年会、2016 年 5 月 19 日 ~ 5 月 21 日 (2016)
18. 芝野優希、河野弥生、山中沙織、吉澤一巳、廣木章博、田口光正、花輪剛久、トラマドール塩酸塩含有ハイドロゲル製剤からの薬物放出挙動および鎮痛効果の検討、日本薬学会第 136 年会、2016 年 3 月 28 日 (2016)
19. 儘田 大、河野弥生、花輪剛久、ポリビニルアルコール系樹脂 (エクセバル) のハイドロゲル製剤への応用、日本薬学会第 136 年会、2016 年 3 月 27 日 (2016)
20. 庄野隼人、河野弥生、廣木章博、田口光正、花輪剛久、電子線架橋によるハイドロゲルの調製と評価 (2) -吸水性に及ぼすポリアクリル酸の添加効果-、トランスレーショナルリサーチ (TR) センター第 3 回シンポジウム/研究交流会、2016 年 1 月 23 日 (2016)
21. Shying Chen, Yayoi Kawano, Takehisa Hanawa, Adsorbing the Poorly Water Soluble Drug on Porous Calcium Silicate by Sealed Heating Method、再生医療と DDS の融合研究部門発足記念シンポジウム 第 13 回東京理科大学薬学部 DDS 研究センターシンポジウム、2016 年 1 月 13 日 (2016)
22. 河野弥生、清水雄一郎、花輪剛久、湿式ビーズ粉碎による難溶性薬物のナノ粒子化、再生医療と DDS の融合研究部門発足記念シンポジウム 第 13 回東京理科大学薬学部 DDS 研究センターシンポジウム、2016 年 1 月 13 日 (2016)
23. 後藤万侑里、河野弥生、原口珠実、吉田都、内田享弘、花輪剛久、イソソルビドの苦味軽減を考慮したゼリー製剤の調製と評価、日本薬剤学会第 30 年会、長崎、5 月 21 日 (2015)。
24. 細谷香織、島田洋輔、後藤了、河野弥生、花輪剛久、インドメタシンとメトロニダゾール共融混合物の物理化学的性質、日本薬剤学会第 30 年会、長崎、5 月 21 日 (2015)。
25. 清水雄一郎、河野弥生、花輪剛久、湿式ビーズ粉碎による難溶性薬物の微粒化、日本薬剤学会第 30 年会、長崎、5 月 21 日 (2015)。
26. 芝野優希、河野弥生、吉澤一巳、廣木章博、田口光正、花輪剛久、トラマドール塩酸塩含有ハイドロゲル製剤からの薬物放出挙動および鎮痛効果の検討、TR センター第 2 回シンポジウム、東京、8 月 29 日 (2015)。
27. 河野弥生、花輪剛久、製剤情報としての物性評価、第 2 回アカデミック・ディテリング・データベース部門シンポジウム、東京、9 月 5 日 (2015)。
28. 安江毅、弓削澄夏、河野弥生、花輪剛久、アンレキサノクスーオイドラギット E100 の固体分散体の調製と評価、第 59 回日本薬学会関東支部大会、船橋、9 月 12 日 (2015)。
29. 陳詩陽、河野弥生、花輪剛久、多孔性ケイ酸カルシウムの難水溶性薬物の吸着担体への応用、第 59 回日本薬学会関東支部大会、船橋、9 月 12 日 (2015)。
30. 八巻康宏、桑島航、田中優太、島田洋輔、河野弥生、花輪剛久、後藤了、コンゴーレッド/キシログルカンのゲル構造形成における IR スペクトルの特異値分解法を応用した状態解析、第 59 回日本薬学会関東支部大会、船橋、9 月 12 日 (2015)。

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

31. 河野弥生、清水雄一郎、花輪剛久、湿式ビーズ粉碎による難溶性薬物のナノ粒子化、再生医療と DDS の融合研究部門発足記念シンポジウム 第 13 回東京理科大学薬学部 DDS 研究センターシンポジウム、東京、1 月 13 日 (2015)。
32. 原島美樹、河野弥生、吉澤一巳、廣木章博、田口光正、花輪剛久、電子線架橋によるハイドロゲル製剤の調製と製剤素材としての可能性、日本薬剤学会第 29 年会、大宮、5 月 22 日 (2014)。
33. 河野弥生、平野愛、竹村裕、伊藤雅昭、青木伸、花輪剛久、大腸癌切除術後の縫合部補強用粘膜付着製剤の調製、日本薬剤学会第 29 年会、大宮、5 月 22 日 (2014)。
34. 大津早紀、河野弥生、荒俣章文、花輪剛久、フッ素コーティングガラスと医薬品の相互作用の検討 (1)、医療薬学フォーラム 2014、東京、6 月 28 日 (2014)。
35. 佐古有紀、桐林東一郎、河野弥生、花輪剛久、BP 剤服用患者における服薬実態調査結果、第 24 回日本医療薬学会年会、名古屋、9 月 28 日 (2014)。
36. 齋藤裕香、笹津備尚、河野弥生、花輪剛久、大西啓、ロペラミドを用いた口内炎治療用口腔内フィルムの苦味マスキングとその調製、第 24 回日本医療薬学会年会、名古屋、9 月 28 日 (2014)。
37. 芝崎幸司、河野弥生、花輪剛久、簡易懸濁法において安定な分散系を得るための分散媒の検討、第 58 回日本薬学会関東支部大会、町田、10 月 4 日 (2014)。
38. 長野仁美、河野弥生、島田洋輔、後藤了、花輪剛久、リボフラビンの光分解による共存薬物への影響、第 58 回日本薬学会関東支部大会、町田、10 月 4 日 (2014)。
39. 清水雄一郎、河野弥生、花輪剛久、湿式ビーズ粉碎による難溶性薬物の微粒子化、第 20 回創剤フォーラム若手研究会、八王子、11 月 29 日 (2014)。
40. 廣田和貴、河野弥生、石井直子、花輪剛久、患者に優しい製剤の開発-口内炎治療を目的とした口腔内付着フィルム製剤の調製と評価-、日本薬学会第 135 年会、神戸、3 月 26 日 (2014)。
41. 清水雄一郎、河野弥生、花輪剛久、患者に優しい製剤の開発-湿式ビーズ粉碎による難溶性薬物の微粒子化-、日本薬学会第 135 年会、神戸、3 月 26 日 (2014)。
42. 笹津備尚、小出達夫、河野弥生、廣瀬香織、池内由里、花輪剛久、大西啓、ロペラミド含有口内炎治療用フィルムにおける薬物含有率の物性への影響、日本薬学会第 135 年会、神戸、3 月 26 日 (2014)。
43. 中村智絵、河野弥生、花輪剛久、患者に優しい製剤の開発-ガティガムの製剤素材への応用 (1) -日本薬学会第 135 年会、神戸、3 月 27 日 (2014)。

国際会議発表

44. Hiroshi Mamada, Yayoi Kawano, Takehisa Hanawa, Application of the poly(vinyl alcohol) based resin (Excel) to hydrogel formulation. The 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences 2016, February 27~28 (2016)
45. Rihoko Kageyama, Yayoi Kawano, Takehisa Hanawa, Understanding of the wound healing mechanisms by hyaluronic acid. The 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences 2016, February 27~28 (2016)
46. Shibano, Y., Kawano, S., Yamanaka, K., Yoshizawa, A., Hiroki, M., Taguchi, M., and Hanawa T., Evaluation of the release behavior of tramadol hydrochloride from hydrogel and its analgesic effect absorbed through mouse skin. The 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences 2016, February 27~28 (2016)
47. Shying Chen, Yayoi Kawano, Takehisa Hanawa, Adsorbing the poorly water soluble drug on porous calcium silicate by sealed heating method. The 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences 2016, February 27~28 (2016)
48. Yuichiro Shimizu, Yayoi Kawano, Takehisa Hanawa, Preparation and characterization of sub micron particles prepared by the ternary ground mixtures of cefditoren pivotal, water soluble polymers and non-ionic surfactants. The 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences 2016, February 27~28 (2016)
49. Kawano Y., Imamura A., Sato M., Hanawa T., Development and characterization of oral spray for stomatitis containing irsogladine maleate. The 3rd INTERNATIONAL POSTGRADUATE CONFERENCE ON PHARMACEUTICAL SCIENCE, Kuala Lumpur, August 11 (2014).

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

50. Kawano Y., Imamura A., Sato M., Hanawa T., Development and characterization of oral spray for stomatitis containing irsogladine maleate. 5th Indo-Japanese International Joint Symposium on Overcoming Intractious Diseases Prevalent in Asian Countries, Tokyo, Japan, September 16 (2014).

招待講演

51. Hanawa, T., Shimizu, Y., and Kawano, Y., Preparation and Characterization of Submicron Particles Prepared by the Ternary Ground Mixtures of Cefditoren Pivotal, Water Soluble Polymers and Non-ionic Surfactants. The 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences 2016, February 27~28 (2016).
52. Kawano, Y., and Hanawa, T., The design of the Formulation Using a Quartz Crystal Microbalance with Dissipation (QCM-D). The 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences 2016, February 27~28 (2016).
53. 河野弥生、花輪剛久、大学から発進する Evidence-Based Hospital Formulation、第 25 回日本医療薬学会、横浜、11 月 22 日 (2015)。
54. 花輪剛久、患者に優しい製剤—院内製剤研究への大学の関わり—、第 38 回星薬科大学大学院研究科助手会・大学院自治会 合同公開セミナー、東京、11 月 8 日 (2014)。
55. 河野弥生、花輪剛久 “患者に優しい製剤の開発” -大学から医療現場へ-、第 20 回創剤フォーラム若手研究会、八王子、11 月 29 日 (2014)。
56. 花輪剛久、医療現場における抗体医薬の現状と課題、日本薬学会関東支部第 39 回学術講演会、東京、12 月 13 日 (2014)。

大塚英典

国内学会発表

1. 松隈大輔、石川昇平、石川理恵子、高橋千尋、浅輪幸世、星和人、大塚英典、ネットワーク形成機構を駆使したインジェクタブル型 IPN ゲルの作製と組織再生足場としての機能、第 25 回インテリジェント材料/システムシンポジウム、新宿、1 月 8 日 (2016)。
2. 飯島 一智、石川 昇平、松隈 大輔、橋詰 峰雄、大塚 英典、キトサン/PEG/RADA16 で構造化した相互侵入高分子網目ゲル中における間葉系幹細胞から軟骨細胞への分化、第 25 回インテリジェント材料/システムシンポジウム、新宿、1 月 8 日 (2016)。
3. 久森章史、松隈大輔、大塚英典、酸化還元活性を有する両親媒性高分子を用いた金属イオン還元挙動の観察、日本化学会第 96 春季年会、京田辺、3 月 24-27 日 (2016)。
4. 松隈大輔、石川昇平、高橋千尋、浅輪幸世、星和人、大塚英典、細胞の高機能培養を実現するインジェクタブルゲルの構造設計、日本化学会第 96 春季年会、京田辺、3 月 24-27 日 (2016)。
5. 小津間大介、嶋田紘尚、藤倉大史、松隈大輔、大塚英典、効果的な DNA の構造変異を導く遷移金属錯体の高分子化効果とその抗癌活性評価、日本化学会第 96 春季年会、京田辺、3 月 24-27 日 (2016)。
6. 赤峯和敏、佐藤隆太郎、松隈大輔、大塚英典、オリゴエチレングリコール重合体表面の修飾密度に依存した特異的水和挙動とタンパク質吸着抑制能との相関、日本化学会第 96 春季年会、京田辺、3 月 24-27 日 (2016)。
7. 野口周人、小津間大介、松隈大輔、大塚英典、ピリジン含有両親媒性高分子の構造設計に基づく微粒子界面制御と医療応用、日本化学会第 96 春季年会、京田辺、3 月 24-27 日 (2016)。
8. 松隈大輔、前島雪絵、大塚英典、PEG-block-Poly(pyridine) の一次構造特異的な酸化還元活性の発現、日本化学会第 96 春季年会、京田辺、3 月 24-27 日 (2016)。
9. 石川昇平、松隈大輔、飯島道弘、大塚英典、IPN 構造を有する生分解性インジェクタブルゲルの新規創製と細胞機能評価、第 96 春季年会、京田辺、3 月 24-27 日 (2016)。
10. 松隈大輔、池永祐介、前島雪絵、大塚英典、PEG-b-Poly(pyridine) の構造依存的な酸化還元活性、第 95 回日本化学会春季年会、日本大学理工学部船橋キャンパス薬学部、3 月 26 日-29 日 (2015)。
11. 松隈大輔、前島雪絵、大塚英典、一次構造に依存した PEG-b-Poly(pyridine) の特異な酸化還元活性の発現、日本大学理工学部船橋キャンパス薬学部、3 月 26 日-29 日 (2015)。
12. 松隈大輔、高木あかね、前島雪絵、大塚英典、PEG-b-Poly(pyridine) の構造依存的な酸化還

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- 元活性、第 95 回日本化学会春季年会、船橋、3 月 26-29 日 (2015).
13. 松隈大輔、前島雪絵、大塚英典、一次構造に依存した PEG-b-Poly(pyridine) の特異な酸化還元活性の発現、第 64 回高分子学会年次大会、札幌、5 月 27-29 日 (2015).
 14. 大塚英典、嶋田紘尚、高橋理一、松隈大輔、DNA にインターカレートする白金錯体の高分子化効果および抗癌剤への応用、第 66 回コロイドおよび界面化学討論会、鹿児島、9 月 10-12 日 (2015).
 15. 松隈大輔、高木あかね、大塚英典、PEG-b-Poly(pyridine) の構造特異的な酸化還元活性の発現と貴金属イオンの自動還元、第 66 回コロイドおよび界面化学討論会、鹿児島、9 月 10-12 日 (2015).
 16. 松隈大輔、三盃毅知、大塚英典、ポリオンコンプレックスにより構成されるゼラチン/キトサン複合体の UCST 型温度相転移挙動、第 66 回コロイドおよび界面化学討論会、鹿児島、9 月 10-12 日 (2015).
 17. 野口周人、小津間大介、松隈大輔、大塚英典、ピリジン含有両親媒性高分子の構造依存的界面物性解析および細胞内環境応答性材料への適用、第 66 回コロイドおよび界面化学討論会、鹿児島、9 月 10-12 日 (2015).
 18. 石川昇平、松隈大輔、飯島道弘、大塚英典、自己組織化ペプチドとキトサンから構成される生分解性 IPN 型インジェクタブルゲルの創製と細胞機能応答、第 64 回高分子討論会、仙台、2015 年 9 月 15-17 日 (2015).
 19. 松隈大輔、藤井香織、大塚英典、タンパク質デリバリーキャリアを指向したペプチドの自己組織ネットワークを有するキトサンナノゲルの作製、第 64 回高分子討論会、仙台、9 月 15-17 日 (2015).
 20. 松隈大輔、野口周人、前島雪絵、大塚英典、限定的一次構造において発現する PEG-b-Poly(pyridine) の特異な酸化還元活性、第 64 回高分子討論会、仙台、9 月 15-17 日 (2015).
 21. 大塚英典、佐藤隆太郎、前島雪絵、松隈大輔、エチレングリコール共重合体表面の水和挙動、生体適合性に対する骨格構造の影響、第 64 回高分子討論会、仙台、2015 年 9 月 15-17 日 (2015).
 22. 野口周人、小津間大介、松隈大輔、大塚英典、両親媒性高分子の構造に基づくピリジン環の配向性制御および吸着安定性との相関、第 5 回 CSJ 化学フェスタ 2015、船掘、10 月 13 日 (2015).
 23. 赤峯和敏、佐藤隆太郎、松隈大輔、大塚英典、オリゴエチレングリコール重合体の表面密度依存的水和挙動と生体適合性への影響、第 5 回 CSJ 化学フェスタ 2015、船掘、10 月 13 日 (2015).
 24. 小津間大介、池永裕介、松隈大輔、大塚英典、ピリジン含有両親媒性ブロック共重合体の表面吸着メカニズムの解明と生体内材料への応用、第 5 回 CSJ 化学フェスタ 2015、船掘、10 月 13 日 (2015).
 25. 石川昇平、松隈大輔、飯島道弘、大塚英典、生分解性 IPN 型インジェクタブルゲルの新規創製と足場分解に伴う細胞機能変化の観察、第 5 回 CSJ 化学フェスタ 2015、船掘、10 月 13 日 (2015).
 26. 石川昇平、松隈大輔、飯島道弘、大塚英典、生分解性インジェクタブル型 IPN ゲルの新規作製と細胞機能変化、バイオテクノロジー&エレクトロニクス研究討論会、押上、12 月 11 日 (2015).
 27. 野口周人、小津間大介、松隈大輔、大塚英典、ピリジン含有両親媒性高分子の構造設計に基づく微粒子界面制御と医療応用、バイオテクノロジー&エレクトロニクス研究討論会、押上、12 月 11 日 (2015).
 28. 佐藤隆太郎、前島雪絵、松隈大輔、大塚英典、エチレングリコール重合体を修飾した表面の生体適合性に対する骨格構造の影響、第 63 回高分子年次大会、愛知県名古屋市熱田区、名古屋国際会議場、5 月 28 日-30 日 (2014).
 29. 嶋田紘尚、高橋理一、松隈大輔、大塚英典、第 63 回高分子年次大会、愛知県名古屋市熱田区、名古屋国際会議場、5 月 28 日-30 日 (2014).
 30. 高木あかね、松隈大輔、大塚英典、自動還元型配位子を有するブロック共重合体を用いた機能性金属ナノ粒子の新規創製法と触媒活性評価、第 63 回高分子年次大会、愛知県名古屋

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- 市熱田区、名古屋国際会議場、5月28日-30日(2014).
31. 藤井香織、松隈大輔、大塚英典、ペプチドの β シート形成を駆動力とする生分解性ナノ会合体の創製およびキャリア機能、第63回高分子年次大会、愛知県名古屋市熱田区、名古屋国際会議場、5月28日-30日(2014).
 32. 松隈大輔、高木あかね、前島雪絵、大塚英典、PEG-b-Poly(pyridine)からのラジカル生成に駆動される銀イオンの還元挙動、第63回高分子年次大会、愛知県名古屋市熱田区、名古屋国際会議場、5月28日-30日(2014).
 33. 佐藤隆太郎、前島雪絵、松隈大輔、大塚英典、異なる末端基構造を有するポリエチレングリコール修飾表面の生体適合性、第65回コロイドおよび界面化学討論会、東京都新宿区、東京理科大学神楽坂校舎、9月3日-5日(2014).
 34. 佐藤隆太郎、前島雪絵、田中賢、松隈大輔、大塚英典、エチレングリコール重合体修飾表面の骨格構造に依存した水和挙動とタンパク質吸着抑制能の相関、第65回コロイドおよび界面化学討論会、東京都新宿区、東京理科大学神楽坂校舎、9月3日-5日(2014).
 35. 松隈大輔、石川理恵子、浅輪幸世、高橋千尋、星和人、大塚英典、組織再生足場への応用を指向した階層的ネットワークを有するインジェクタブルゲルの創製、第65回コロイドおよび界面化学討論会、東京都新宿区、東京理科大学神楽坂校舎、9月3日-5日(2014).
 36. 三益毅知、松隈大輔、大塚英典、ゼラチンとキトサンから構成されるUCST型刺激応答性積層薄膜の創製、第65回コロイドおよび界面化学討論会、東京都新宿区、東京理科大学神楽坂校舎、9月3日-5日(2014).
 37. 大塚英典、前島雪絵、佐藤隆太郎、松本亮、片岡一則、宮原裕二、フェニルボロン酸をAFMプローブに用いた癌細胞表面シアル酸の高感度検出、第63回高分子討論会、長崎県長崎市文教町、長崎大学文教キャンパス、9月24日-26日(2014).
 38. 大塚英典、村松佑紀、松隈大輔、嶋田敏尚、細胞膜特異性の高いコアシェルナノロッドの合成と効果的温熱治療、第63回高分子討論会、長崎県長崎市文教町、長崎大学文教キャンパス、9月24日-26日(2014).
 39. 松隈大輔、高木あかね、前島雪絵、大塚英典、PEG-b-Poly(pyridine)の分子配列依存的な酸化還元活性と貴金属イオンの自動還元、第63回高分子討論会、長崎県長崎市文教町、長崎大学文教キャンパス、9月24日-26日(2014).
 40. 嶋田敏尚、高橋理一、松隈大輔、大塚英典、ビピリジン-白金を連鎖構造に有する共重合体のDNAとの相互作用および抗癌剤への応用、24rd Annual Meeting of MRS-J、神奈川県横浜市中区、横浜開港記念会館、12月10日-12日(2014).
 41. 高木あかね、松隈大輔、大塚英典、自動還元型配位子を有するブロック共重合体を用いた機能性金属ナノ粒子の新規創製法と触媒活性評価、24rd Annual Meeting of MRS-J、神奈川県横浜市中区、横浜開港記念会館、12月10日-12日(2014).
 42. 松隈大輔、高木あかね、前島雪絵、大塚英典、PEG-b-Poly(pyridine)からのラジカル生成に駆動される銀イオンの還元挙動、24rd Annual Meeting of MRS-J、神奈川県横浜市中区、横浜開港記念会館、12月10日-12日(2014).
 43. 嶋田敏尚、高橋理一、松隈大輔、大塚英典、ビピリジン-白金を連鎖構造に有する共重合体のDNAとの相互作用および抗癌剤への応用、第36回バイオマテリアル学会、東京都江戸川区船堀、タワーホール船堀、11月17日-18日(2014).
 44. 高橋雄樹、長村麻紗子、沖村沙耶、松隈大輔、大塚英典、糖鎖高分子を機能性ユニットとする新規ゲル足場の創製と肝細胞分化メカニズム解析、第36回バイオマテリアル学会、東京都江戸川区船堀、タワーホール船堀、11月17日-18日(2014).
 45. 佐藤隆太郎、前島雪絵、田中賢、松隈大輔、大塚英典、エチレングリコール重合体修飾表面の水和挙動に依存した表面特性と生体適合性、第36回バイオマテリアル学会、東京都江戸川区船堀、タワーホール船堀、11月17日-18日(2014).
 46. 松隈大輔、石川理恵子、浅輪幸世、高橋千尋、星和人、大塚英典、軟骨細胞高機能化を導くキトサン/ペプチドIPNインジェクタブルゲルの創製、第36回バイオマテリアル学会、東京都江戸川区船堀、タワーホール船堀、11月17日-18日(2014).
 47. 藤井香織、松隈大輔、大塚英典、自己組織化ペプチド修飾キトサンナノ会合体の合成とプロテインデリバリーへの応用、第36回バイオマテリアル学会、東京都江戸川区船堀、タワー

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

ホール船堀、11月17日-18日(2014).

国際会議

48. Otsuka, H., Nanofabrication of Nonfouling Surfaces for Biomedical Application. 25th Annual Meeting of MRS-J (2015), Nano-biotechnologies on Interfaces, Yokohama, Japan, December 8-10 (2015).
49. Fujii, K., Matsukuma, D., Otsuka, H., Synthesis of Chitosan-based Nanogels due to the Formation of Hydrophilic Peptide Fiber Network for Protein Delivery Carrier, 10th SPSJ International Polymer Conference (IPC2014), Tsukuba International Congress Center, Tsukuba, Ibaraki, Japan, December 2-5 (2014).
50. Fujikura, H., Takahashi, R., Matsukuma, D., Otsuka, H., DNA- Binding Properties of Polymeric Intercalators with Polymerized Metal-coordination Segment, 10th SPSJ International Polymer Conference (IPC2014), Tsukuba International Congress Center, Tsukuba, Ibaraki, Japan, December 2-5 (2014).
51. Matsukuma, D., Takagi, A., Maejima, Y., Otsuka, H., Structure-dependent Redox-activity of PEG-b-Poly(pyridine) and Its Application to Auto-reduction of Noble Metal Ions, 10th SPSJ International Polymer Conference (IPC2014), Tsukuba International Congress Center, Tsukuba, Ibaraki, Japan, December 2-5 (2014).

招待講演

52. 大塚英典、高分子界面制御によるバイオマテリアルの機能化、高分子複合材料の界面と機能、高分子表面研究会、神楽坂、1月29日(2016).
53. 大塚英典、生体適合性材料の物性解析：一次構造の異なるエチレンオキシド重合体表面の生体適合性、ATP 招待講演(バイオ技術の新展開)、日本化学会第96春季年会、京田辺、3月24-27日(2016).
54. 大塚英典、生体適合性界面の構築と再生医療への展開、東京理科大学・日本医科大学第2回合同シンポジウム、葛飾、12月12日(2015).
55. Otsuka, H., Nanofabrication of Nonfouling Surfaces for Biomedical Application. 25th Annual Meeting of MRS-J (2015), Nano-biotechnologies on Interfaces, Yokohama, Japan, December 8-10(2015).
56. 大塚英典、ナノ粒子の表面修飾技術と分散性・機能性付与—生体材料への適用等—、情報機構セミナー「ナノ粒子・微粒子の表面修飾技術と分散性・機能性付与」、大井町、3月5日(2015).
57. Hidenori Otsuka, Micropatterned Co-culture of Spheroids Layerd on Feeder Cells for Functional Tissue Culture, 24rd Annual Meeting of MRS-J (2014), 神奈川県横浜市中区、横浜開港記念会館、12月10日-12日(2014).
58. 大塚英典、微粒子・顔料の高分子処理とその分散性向上効果、技術情報協会セミナー「シランカップリング剤が効かない顔料・フィラーの表面処理・分散性向上」、[東京・五反田]、(株)技術情報協会8FセミナールームA、2月25日(2014).
59. 大塚英典、微粒子、顔料の高分子処理とその分散性制御法、R&Dセミナー、東京都江東区、タイム24ビル、5月22日(2014).

鳥越秀峰

国内学会発表

1. 秋葉涼、鳥越秀峰”鉛イオン存在下で形成されるスプリット4本鎖DNA構造とヘミンの複合体のペルオキシダーゼ活性による標的遺伝子検出”日本化学会第97春期年会、横浜、3月19日(2017).
2. 荒川章裕、矢口礼望、小野晶、鳥越秀峰”5-ヒドロキシウラシル塩基を含むミスマッチ塩基対と金属イオンの特異的結合”日本化学会第97春期年会、横浜、3月19日(2017).
3. 立澤 桜子、森 雅正、鳥越 秀峰、シャペロン介在性オートファジーを利用した標的蛋白質を人工的に分解する新規手法開発、トランスレーショナルリサーチ(TR)センター第3回シンポジウム/研究交流会、葛飾、1月23日(2016).
4. 秋葉涼、矢口礼望、橋詰佑紀子、鳥越秀峰、複数のDNA断片が集合して形成する4本鎖DNA構造とヘミンの複合体のペルオキシダーゼ活性による標的遺伝子検出、日本化学会第96春

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- 期年会、京都、3月24日(2016).
5. 矢口礼望、秋葉涼、出口加奈子、小野晶、鳥越秀峰、4-チオチミン塩基を含むミスマッチ塩基対と金属イオンの特異的結合、日本化学会第96春期年会、京都、3月25日(2016).
 6. 杉山航太、木内一樹、鳥越秀峰、3本鎖DNA形成および3本鎖DNA結合蛋白質がT7 RNAポリメラーゼの転写活性に及ぼす影響、日本化学会第96春期年会、京都、3月25日(2016).
 7. 柴田篤志、小島駿、星野秀和、鳥越秀峰”翻訳後修飾を受けた組み換え蛋白質を大腸菌内で発現する方法の開発”第16回日本蛋白質科学会年会、博多、6月日(2016).
 8. 田中美穂、久保江理郁、佐藤加奈、前角直人、竹原 喬、鳥越秀峰”分裂酵母テロメア結合蛋白質間相互作用によるテロメア長調節”第89回日本生化学会大会、仙台、9月25日(2016).
 9. 小林百合香、佐々木遥、荘司健太、水野武、花岡文雄、今本尚子、鳥越秀峰”マウステロメア結合蛋白質 Pot1a/b と DNA ポリメラーゼ α /プライマーゼの相互作用解析”第89回日本生化学会大会、仙台、9月25日(2016).
 10. 柴田篤志、鳥越秀峰”リン酸化修飾を受けた組換え蛋白質を大腸菌内で発現する方法の開発”第89回日本生化学会大会、仙台、9月27日(2016).
 11. 小島駿、西田泰貴、増田翔、星野秀和、鳥越秀峰”SUMO化修飾を受けた組み換え蛋白質を大腸菌内で発現する方法の開発”第89回日本生化学会大会、仙台、9月27日(2016).
 12. 鳥越秀峰、小野 晶、小笹哲夫”DNAの複数のミスマッチ塩基対と金属イオンの特異的結合に見られる正の協同効果”第52回熱測定討論会、徳島、9月30日(2016).
 13. 矢口礼望、出口加奈子、小野晶、近藤次郎、鳥越秀峰”4-チオチミン塩基を含むミスマッチ塩基対と金属イオンの特異的結合”第6回日本化学会化学フェスタ2016、船堀、11月16日(2016).
 14. Kiuchi, K., Sugiyama, K., Kishi, R., Unzai, S., Torigoe, H.”Molecular Mechanism of the Triplex DNA-binding Protein to Recognize Triplex DNA”第54回日本生物物理学会年会、つくば、11月26日(2016).
 15. 木内一樹、杉山航太、岸遼太郎、佐藤憲大、片山拓馬、鳥越秀峰”3本鎖DNA結合蛋白質の3本鎖DNA認識機構と遺伝子発現制御機構”第39回日本分子生物学会年会、横浜、11月30日(2016).
 16. 久保江理郁、田中美穂、佐藤加奈、前角直人、竹原喬、鳥越秀峰”分裂酵母テロメア結合蛋白質間相互作用によるテロメア長調節”第39回日本分子生物学会年会、横浜、12月1日(2016).
 17. 西田泰貴、柴田篤志、小島駿、増田翔、星野秀和、鳥越秀峰”出芽酵母テロメア結合蛋白質間相互作用に関する解析”第39回日本分子生物学会年会、横浜、12月1日(2016).
 18. 森亮一、鳥越秀峰、皮膚創傷治癒改善を指向したアンチセンスオリゴ核酸の開発、トランスレーショナルリサーチ(TR)センター第1回公開セミナー、野田、1月10日(2015).
 19. 小島駿、柴田篤志、星野秀和、鳥越秀峰、翻訳後修飾を受けた組み換え蛋白質を大腸菌内で発現する方法の開発、日本化学会第95春期年会、船橋、3月27日(2015).
 20. 橋詰佑紀子、真嶋司、片平正人、鳥越秀峰、ヘミン-4本鎖RNA複合体のペルオキシダーゼ活性によるプリオン検出、日本化学会第95春期年会、船橋、3月27日(2015).
 21. 森亮一、鳥越秀峰、2型糖尿病における皮膚創傷治癒改善を指向したアンチセンスオリゴ核酸の開発、トランスレーショナルリサーチ(TR)センター第2回シンポジウム/研究交流会、葛飾、8月29日(2015).
 22. Torigoe, H., Kiuchi, K., Mase, K., Sato, N., and Katayama, T., Molecular Mechanism of Triplex DNA-Binding Proteins to Recognize Triplex DNA. 第53回日本生物物理学会年会、金沢、9月13日(2015).
 23. 鳥越秀峰、小比賀聡、佐々木澄美、3本鎖核酸形成用単鎖核酸の化学修飾が3本鎖核酸形成に及ぼす効果、第51回熱測定討論会、鳩山、埼玉、10月9日(2015).
 24. 出口加奈子、小野晶、鳥越秀峰、2本鎖DNAにおける Pyrrolo dC 塩基を含むミスマッチ塩基対と銀イオンの特異的相互作用および一塩基多型の効率的検出への利用、第5回日本化学会化学フェスタ2015、船堀、10月15日(2015).
 25. 木内一樹、間瀬貴久江、佐藤憲大、片山拓馬、鳥越秀峰、3本鎖DNA結合蛋白質の3本鎖DNA認識機構、第5回日本化学会化学フェスタ2015、船堀、10月15日(2015).

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

26. 近藤次郎、野村祐介、北原佑季子、小比賀聡、鳥越秀峰、2',4'-BNANC[N-Me]修飾をもつアンチセンスギャップマーの X 線結晶解析、日本核酸医薬学会第 1 回年会、京都、11 月 30 日 (2015).
27. 木内一樹、佐々木澄美、杉山航太、間瀬貴久江、佐藤憲大、片山拓馬、鳥越秀峰、人工的遺伝子発現制御法であるアンチジーン法の実用化を指向した 3 本鎖 DNA 結合蛋白質 STM1 による 3 本鎖 DNA 形成促進、第 38 回日本分子生物学会年会・第 88 回日本生化学会大会合同大会、神戸、12 月 2 日 (2015).
28. 出口加奈子、矢口礼望、秋葉涼、小野晶、鳥越秀峰、金属イオンとミスマッチ塩基対の特異的結合による一塩基多型の効率的検出法の開発、第 38 回日本分子生物学会年会・第 88 回日本生化学会大会合同大会、神戸、12 月 2 日 (2015).
29. 小林百合香、荘司健太、水野武、花岡文雄、今本尚子、鳥越秀峰、マウステロメア結合タンパク質 Tpp1, Tin2 に依存した Pot1a/b の核局在と複合体形成解析、第 38 回日本分子生物学会年会・第 88 回日本生化学会大会合同大会、神戸、12 月 3 日 (2015).
30. 荘司健太、小林百合香、水野武、花岡文雄、今本尚子、鳥越秀峰、マウステロメア結合タンパク質シェルタリンの複合体形成機構の解明-Tin2 の機能ドメイン解析を通じて、第 38 回日本分子生物学会年会・第 88 回日本生化学会大会合同大会、神戸、12 月 3 日 (2015).
31. 田中美穂、前角直人、久保江理郁、大村勇樹、阿部貴春、竹原 喬、鳥越秀峰、分裂酵母テロメア結合蛋白質間相互作用によるテロメア長調節、第 38 回日本分子生物学会年会・第 88 回日本生化学会大会合同大会、神戸、12 月 3 日 (2015).
32. 立澤桜子、森雅正、鳥越秀峰、シャペロン介在性オートファジー機構を利用した標的蛋白質を人工的に分解する新規手法の開発、第 14 回日本蛋白質科学会年会、横浜、6 月 26 日 (2014).
33. 木内一樹、間瀬貴久江、佐藤憲大、片山拓馬、鳥越秀峰、3 本鎖 DNA 結合蛋白質の 3 本鎖 DNA 認識機構、第 14 回日本蛋白質科学会年会、横浜、6 月 26 日 (2014).
34. 木内 一樹、間瀬 貴久江、鳥越 秀峰、3 本鎖 DNA 結合蛋白質の 3 本鎖 DNA 認識機構、第 8 回バイオ関連化学シンポジウム、岡山、9 月 12 日 (2014).
35. 出口 加奈子、鳥越 秀峰、4 本鎖 DNA 構造形成を利用した鉛イオンの新規濃度測定法と除去法の開発、第 8 回バイオ関連化学シンポジウム、岡山、9 月 12 日 (2014).
36. 田中好幸、大樂武範、古板恭子、吉川晶子、根東義則、鳥越秀峰、小野晶、岡本到、Vladimir Sychrovsky、近藤次郎、児嶋長次郎、水銀を介したチミン-チミン塩基対の構造化学研究：金属錯体の NMR 分光パラメータ測定用プラットフォームとしての DNA 分子、錯体化学会第 64 回討論会、東京、9 月 18 日-20 日 (2014).
37. 鳥越秀峰、小野晶、小笹哲夫、DNA のミスマッチ塩基対と金属イオンの特異的結合の熱力学的特性、第 50 回記念熱測定討論会、大阪、9 月 29 日 (2014).
38. 木内一樹、間瀬貴久江、佐藤憲大、片山拓馬、鳥越秀峰、3 本鎖 DNA 結合蛋白質の 3 本鎖 DNA 認識機構の解析、第 87 回日本生化学会大会、京都、10 月 16 日 (2014).
39. 田中美穂、阿部貴春、前角直人、鳥越秀峰、テロメア長調節機構の解明を目指した分裂酵母テロメア結合蛋白質間の相互作用解析、第 87 回日本生化学会大会、京都、10 月 16 日 (2014).
40. 森雅正、立澤桜子、鳥越秀峰、シャペロン介在性オートファジー機構を利用した標的蛋白質を人工的に直接分解する新規手法の開発、第 87 回日本生化学会大会、京都、10 月 17 日 (2014).
41. 小林百合香、荘司健太、水野武、伊藤岳、花岡文雄、今本尚子、鳥越秀峰、マウステロメア結合タンパク質 Tpp1, Tin2 に依存した Pot1a/b の核局在と複合体形成解析、第 37 回日本分子生物学会年会、横浜、11 月 27 日 (2014).
42. Tanaka, M., Maezumi, N., Ohmura, Y., Abe, T., Takehara, T., Torigoe, H., Molecular Mechanism of the Interactions among Fission Yeast Telomere Binding Proteins, 第 37 回日本分子生物学会年会、横浜、11 月 27 日 (2014).
43. Kiuchi, K., Mase, K., Sato, N., Katayama, T., Torigoe, H., Mechanism of Triplex DNA-Binding Proteins to Recognize Triplex DNA, 第 37 回日本分子生物学会年会、横浜、11 月 27 日 (2014).

国際会議発表

44. Yaguchi, A., Akiba, R., Ono, A., Torigoe, H. "Specific Binding between Metal Ion

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- and Mismatched Base Pair Involving 4-Thiothymine”, The 43rd International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2016, Kumamoto, Japan, September 28 (2016).
45. Sugiyama, K., Kiuchi, K., Torigoe, H. “Effect of Triplex DNA Formation and Triplex DNA Binding Proteins on Transcriptional Activity of T7 RNA Polymerase”, The 43rd International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2016, Kumamoto, Japan, September 28 (2016).
 46. Akiba, R., Yaguchi, A., Torigoe, H. “Target Gene Detection by Peroxidase Activity of Split G-quadruplex/Hemin Complex with Lead Ion”, The 43rd International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2016, Kumamoto, Japan, September 28 (2016).
 47. Arakawa, F., Yaguchi, A., Ono, A., Torigoe, H. “Interaction between Metal Ion and Mismatched Duplex DNA with 5-Hydroxyuracil or 5-Hydroxycytosine”, The 43rd International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2016, Kumamoto, Japan, September 28 (2016).
 48. Kiuchi, K., Mase, K., Sato, N., Katayama, T., Torigoe, H., Molecular Mechanism of Triplex DNA-binding Proteins to Recognize Triplex DNA. The 42nd International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2015, Himeji, Japan, September 23 (2015).
 49. Akiba, R., Yaguchi, A., Hashizume, Y., Torigoe, H., Colorimetric Detection of Target Genes by G-quadruplex Probes with Split Mode and Their Peroxidase-like Catalytic Activity in the Presence of Hemin. The 42nd International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2015, Himeji, Japan, September 23 (2015).
 50. Deguchi, K., Ono, A., Torigoe, H., Specific Interaction between Ag⁺ and Mismatched Pyrrolo-dC-modified Duplex DNA and Its Application to SNP Detection. The 42nd International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2015, Himeji, Japan, September 24 (2015).
 51. Yaguchi, A., Akiba, R., Ono, A., Torigoe, H., Interaction between Metal Ion and Mismatched Thiothymine-modified Duplex DNA. The 42nd International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2015, Himeji, Japan, September 24 (2015).
 52. Torigoe, H., Deguchi, K., Ono, A., Thermodynamic Properties of the Specific Interaction between Metal Ion and Mismatched Base Pair. The 42nd International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2015, Himeji, Japan, September 25 (2015).
 53. Ono, A., Okamoto, I., Urata, H., Torigoe, H., Saneyoshi, H., Kondo, J., and Tanaka, Y., Syntheses of DNA Duplexes Containing Metal Ion Mediated Base Pairs, 12th European Biological Inorganic Chemistry Conference, Zurich, Switzerland, August 24-28 (2014).
 54. Tanaka, Y., Okamoto, I., Furuita, K., Šebera, J., Kondo, J., Torigoe, H., Urata, H., Dairaku, T., Ono, A., Kojima, C., and Sychrovský, V., NMR Spectroscopic Studies on Metallo-base-pair in DNA Duplex, 12th European Biological Inorganic Chemistry Conference, Zurich, Switzerland, August 24-28 (2014).
 55. Kiuchi, K., Mase, K., Sato, N., Katayama, T., and Torigoe, H., Promotion of Antiparallel Triplex DNA Formation by Budding Yeast Triplex DNA Binding Protein Stm1, The 41st International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2014, Kitakyushu, Japan, November 5 (2014).
 56. Deguchi, K., and Torigoe, H., Development of a Method to Remove the Lead Ion: Application of Quadruplex DNA Formation Involving the Lead Ion, The 41st International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2014, Kitakyushu, Japan, November 6 (2014).
 57. Hashizume, Y., Katahira, M., and Torigoe, H., Detection of the Prion by the Peroxidase Activity of Hemin-Quadruplex RNA Complex, The 41st International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2014, Kitakyushu, Japan, November 5 (2014).
 58. Torigoe, H., Kiuchi, K., Mase, K., Sato, N., and Katayama, T., Molecular Mechanism of Triplex DNA-Binding Proteins to Recognize Triplex DNA, The 41st International

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2014, Kitakyushu, Japan, November 6 (2014).

招待講演

59. 鳥越秀峰“非 B 型 DNA とこれに結合する蛋白質や金属イオンとの相互作用を基盤とする機能性材料の創製”、物質・デバイス領域共同研究拠点共同研究 分野融合を目指した次世代メディカル・バイオ機能材料開発シンポジウム-拠点卓越学生研究員との協働も指向して-、仙台、2月24日(2017)。
60. 鳥越秀峰“鉛イオン存在下で形成されるスプリット 4 本鎖 DNA 構造とヘミンの複合体のペルオキシダーゼ活性による標的遺伝子検出”、分子連関相乗系研究部門平成 28 年度成果報告会、東京、3月31日(2017)
61. 鳥越秀峰、複数の DNA 断片が集合して形成する 4 本鎖 DNA 構造とヘミンの複合体のペルオキシダーゼ活性による標的遺伝子検出、分子連関相乗系研究部門平成 27 年度成果報告会、東京、3月16日(2016)。
62. 鳥越秀峰、核酸・金属イオン複合体を基盤とする機能性材料開発のための性状解析、物質・デバイス領域共同研究拠点特定研究 次世代メディカル・バイオ機能材料への展開を指向した生体分子素子技術の開発 [B-2] ポストシンポジウム-生体分子素子技術を礎とするメディカル・バイオ研究の最先端シンポジウム-、仙台、3月18日(2016)。
63. Hidetaka Torigoe “Development of Chemically Modified Antisense Oligonucleotides for the Treatment of Diseases”, International Symposium of Tokyo University of Science, Translational Research (TR) Center -Frontiers in Developmental Strategy for Cancer Therapeutics-, Tokyo, June 25 (2016).
64. 木内一樹、杉山航太、岸遼太郎、佐藤憲大、片山拓馬、鳥越秀峰“3 本鎖 DNA 結合蛋白質の 3 本鎖 DNA 認識機構と遺伝子発現制御機構”第 39 回日本分子生物学会年会シンポジウム「非 B 型 DNA: ゲノム配列に隠された非標準構造の未踏機能の解明に向けて」、横浜、12月2日(2016)。
65. 鳥越秀峰、食の安全安心を指向した DNA 塩基配列多様性の新規解析法の開発、平成 26 年度グリーン&セーフティ研究センター研究成果報告会、東京、1月31日(2015)。
66. 鳥越秀峰、核酸・蛋白質・金属イオン複合体を基盤とする機能性材料の構築原理の解明、平成 26 年度物質・デバイス領域共同研究拠点特定研究 次世代メディカル・バイオ機能材料への展開を指向した生体分子素子技術の開発 [B-2] 拡大シンポジウム、仙台、2月6日(2015)。
67. 鳥越秀峰、核酸医薬品開発を指向した化学修飾核酸による遺伝子発現制御、第 1 回東京慈恵会医科大学・東京理科大学合同シンポジウム、北柏、3月7日(2015)。
68. 鳥越秀峰、ヘミン-4 本鎖 RNA 複合体のペルオキシダーゼ活性に関する解析、分子連関相乗系研究部門平成 26 年度成果報告会、東京、3月11日(2015)。
69. 鳥越秀峰、DNA のミスマッチ塩基対と金属イオンの特異的結合と機能性材料への展開、バイオオルガノメタリクス研究部門研究交流会、東京、3月16日(2015)。
70. 鳥越秀峰、ヘミン-4 本鎖 RNA 複合体の酸化還元酵素活性に基づくプリオン検出、分子連関相乗系研究部門平成 26 年度夏季特別勉強会、東伊豆、9月1日(2014)。
71. 鳥越秀峰、ホタテ中腸腺のカドミウムに対抗する手段に関する考察、第 3 回長万部シンポジウム、ホタテを科学する、長万部、11月16日(2014)。
72. 鳥越秀峰、環境保全を指向した重金属イオンの新規濃度定量法と除去法の開発、グリーン&セーフティ研究センターファイナルシンポジウム、東京、12月19日(2014)。

【薬効・機能評価グループ】

岡淳一郎

国内学会発表

1. 濱田幸恵, 成澤孝二, 中村龍治, 石橋仁, 岡淳一郎, 中枢投与による Glucagon-like peptide-2 の降圧作用: 高血圧自然発症モデルラットと Wistar-Kyoto ラットでの比較, 第 94 回日本生理学会大会, 静岡, 3月28日(2017)。
2. Saitoh, A., Suzuki, S., Ohashi, M., Soda, A., Yamada, M., Oka, J-I., Nagase, H., Yamada, M., The delta opioid receptor agonist KNT-127 in the prelimbic medial prefrontal cortex attenuates veratrine-induced anxiety-like behaviors in mice, 第

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- 90 回日本薬理学会年会, 長崎, 3 月 16 日 (2017).
3. Mishima, R., Iwai, T., Nakamura, M., Jin, K., Sawara, I., Nagai, Y., Watanabe, S., Oka, J-I., Tanaba, M., Glucagon-like peptide-2 ameliorates LPS-induced memory impairment via hippocampal neuronal ERK1/2 activation in mice, 第 90 回日本薬理学会年会, 長崎, 3 月 15 日 (2017).
 4. Yamada, M., Akagi, K., Saitoh, A., Yamada, M., Oka, J-I., Novel strategy to treat anxiety disorders by manipulating extinction and reconsolidation of fear memory: Searching for an ideal drug for co-administration with exposure therapy, 第 90 回日本薬理学会年会, 長崎, 3 月 15 日 (2017).
 5. 早田暁伸, 齋藤顕宜, 鈴木聡, 山田美佐, 岡淳一郎, 長瀬博, 山田光彦, マウス内側前頭前野前辺縁皮質領域のオピオイド δ 受容体はグルタミン酸神経伝達を抑制し不安様行動を改善する, 第 27 回 マイクロダイヤリシス研究会, 東京, 12 月 17 日 (2016).
 6. 岡淳一郎, 濱田幸恵, 堀口道子, 山下親正, 経鼻投与用 GLP-2 誘導体の開発と抗うつ様作用, 第 3 回日本医科大学・東京理科大学合同シンポジウム, 東京, 12 月 17 日 (2016).
 7. 岡淳一郎, 濱田幸恵, 堀口道子, 山下親正, 経鼻投与用ペプチド製剤を用いた新規うつ病治療薬, 第 49 回精神神経系薬物治療研究報告会, 大阪, 12 月 2 日 (2016).
 8. 赤木希衣, 齋藤顕宜, 岡淳一郎, 山田光彦, D-cycloserine はラットの恐怖記憶再固定化を促進する, 第 35 回 躁うつ病の薬理・生化学的研究懇話会, 山口, 11 月 4-5 日 (2016).
 9. 早田暁伸, 齋藤顕宜, 後藤玲央, 鈴木聡史, 岡淳一郎, 山田光彦, 嗅球摘出ラットの内側前頭前野及び海馬におけるグルタミン酸及び GABA 含有量の変化について, 第 135 回日本薬理学会関東部会, 静岡, 10 月 8 日 (2016).
 10. 赤木希衣, 山田美佐, 齋藤顕宜, 岡淳一郎, 山田光彦, Riluzole はラットの恐怖記憶消去学習を促進するが再固定化は阻害する, 第 135 回日本薬理学会関東部会, 静岡, 10 月 8 日 (2016).
 11. 秋元俊希, 濱田幸恵, 伊豫田拓也, 梅澤雅和, 岡淳一郎, エキソソーム様小胞封入 GLP-2 の経鼻投与による抗うつ様作用, 第 135 回日本薬理学会関東部会, 静岡, 10 月 8 日 (2016).
 12. 佐内恵美, 濱田幸恵, 恒岡弥生, 岡淳一郎, 高グルコース条件下における神経細胞障害メカニズムの検討, 第 60 回日本薬学会関東支部大会, 東京, 9 月 17 日 (2016).
 13. 齋藤顕宜, 鈴木聡史, 早田暁伸, 大橋正誠, 山田美佐, 長瀬博, 岡淳一郎, 山田光彦, オピオイド δ 受容体作動薬は内側前頭前野前辺縁皮質領域の亢進したグルタミン酸神経伝達を抑制することで不安様行動を改善する, 第 3 回包括的緩和医療科学学術研究会・第 4 回 Tokyo 疼痛緩和次世代研究会合同研究会, 東京, 8 月 28 日 (2016).
 14. 舟根太地, 濱田幸恵, 堀口道子, 恒岡弥生, 中尾優介, 佐々木梨衣, 山下親正, 岡淳一郎, 経鼻投与用 neuromedin U 誘導体の学習記憶改善作用, トランスレーショナルリサーチ (TR) センター第 5 回シンポジウム (東京理科大学総合研究院), 東京, 8 月 27 日 (2016).
 15. 木村英雄, 木村由佳, 豊福優希子, 渋谷典広, 小池伸, 小笠原裕樹, 永原則之, David Lefer, 三上義礼, 岡淳一郎, 硫化水素 (H_2S) とポリサルファイド (H_2S_n) の生理作用, 第 39 回 日本神経科学大会 (Neuroscience 2016), 神奈川, 7 月 20 日 (2016).
 16. 西村翼, 恒岡弥生, 岡淳一郎, 幼若期発症 1 型糖尿病モデルラットにおける脳血管透過性の評価, 第 134 回日本薬理学会関東部会, 大田原, 7 月 9 日 (2016).
 17. 岩井孝志, 中村みなみ, 佐原郁乃, 神和司, 松井彩佳, 金子茉由, 永井悠貴, 濱田幸恵, 渡辺俊, 松尾由理, 内藤康仁, 岡淳一郎, 田辺光男, 気分障害の認知機能低下改善に向けた Glucagon-like peptide-2 の作用解明, 第 46 回日本神経精神薬理学会年会, ソウル, 7 月 2-3 日 (2016).
 18. 齋藤顕宜, 鈴木聡史, 早田暁伸, 大橋正誠, 山田美佐, 長瀬博, 岡淳一郎, 山田光彦, 内側前頭前野前辺縁皮質領域のオピオイド δ 受容体は扁桃体へ投射しているグルタミン酸神経伝達を抑制し不安様行動を改善する, 第 46 回日本神経精神薬理学会年会, ソウル, 7 月 2-3 日 (2016).
 19. 齋藤顕宜, 鈴木聡史, 早田暁伸, 赤木希衣, 山田美佐, 岡淳一郎, 山田光彦, マウスの不安様行動における内側前頭前野の役割を脳内微小透析法で探る, 第 55 回 日本生体医工学会大会, 富山, 4 月 26-28 日 (2016).
 20. 中村みなみ, 岩井孝志, 神和司, 松井彩佳, 永井悠貴, 菊地昭徳, 渡辺俊, 松尾由理, 内藤康仁, 濱田幸恵, 岡淳一郎, 田辺光男, Glucagon-like peptide-2 は p44/p42 MAPK を介して認知機能障

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- 害を改善する, 第 89 回日本薬理学会年会, 横浜, 3 月 11 日 (2016).
21. 舟根太地, 濱田幸恵, 堀口道子, 中尾優介, 佐々木梨衣, 山下親正, 岡淳一郎, ニューロメジン U 経鼻投与用誘導体の学習記憶改善作用, 第 89 回日本薬理学会年会, 横浜, 3 月 11 日 (2016).
 22. 恒岡弥生, 西村翼, 増淵遼太郎, 岡淳一郎, グルカゴン様ペプチド-2 の末梢血管に対する作用, 第 89 回日本薬理学会年会, 横浜, 3 月 10 日 (2016).
 23. 濱田幸恵, 星真帆, 丹羽祐希, 紙透伸治, 倉持幸司, 菅原二三男, 岡淳一郎, Neoechinulin A の学習改善作用および抗うつ様作用, 第 89 回日本薬理学会年会, 横浜, 3 月 9 日 (2016).
 24. 鈴木聡史, 斎藤顕宜, 早田暁伸, 大橋正誠, 山田美佐, 長瀬博, 岡淳一郎, 山田光彦, 内側前頭前野前辺縁皮質領域のグルタミン酸神経伝達に注目した新しい不安モデルの確立: デルタオピオイド受容体作動薬 KNT-127 を用いた検討, 第 25 回神経行動薬理若手研究者の集い, 埼玉, 3 月 8 日 (2016).
 25. 斎藤顕宜, 鈴木聡史, 早田暁伸, 山田美佐, 岡淳一郎, 山田光彦, マウス内側前頭前野前辺縁皮質領域のグルタミン酸神経を介した不安様行動発現に対するオピオイド δ 受容体作動薬 KNT-127 の影響, 第 26 回マイクロダイヤリシス研究会, 東京, 12 月 19 日 (2015).
 26. Nakao, Y., Nakamura, R., Horiguchi, M., Sasaki-Hamada, S., Oka, J-I., and Yamashita, C., Development of a Nasal Formulation for Delivering the New Derivative of Antidepressant-like Peptide GLP-2 to the Brain. 第 9 回次世代を担う若手医療薬科学シンポジウム, 千葉, 11 月 7-8 日 (2015).
 27. 水本遼, 濱田幸恵, 恒岡弥生, 岡淳一郎, Monosodium glutamate 誘発肥満モデルマウスにおける海馬シナプス可塑性障害のメカニズム解明, 第 133 回日本薬理学会関東部会部会, 柏, 10 月 10 日 (2015).
 28. Li, F., Niu, Y., Inada, C., Tanaka, K., Watanabe, S., Fujiwara, H., Sasaki-Hamada, S., Oka, J-I., Matsumoto, K., Chemical Profiling with HPLC-FTMS of Exogenous and Endogenous Chemicals Susceptible to the Administration of Chotosan in an Animal Model of Type 2 Diabetes-induced Dementia. 富山, 9 月 29 日 (2015).
 29. 斎藤顕宜, 塚越麻衣, 山田美佐, 後藤玲央, 岡淳一郎, 山田光彦, リゾホスファチジン酸受容体拮抗薬 BrP-LPA のマウス腹側海馬への局所投与は抗不安様作用を示す, 第 45 回日本神経精神薬理学会/第 37 回日本生物学的精神医学会, 東京, 9 月 24 日 (2015).
 30. 中村友哉, 濱田幸恵, 恒岡弥生, 岡淳一郎, Glucagon-like peptide-2 の抗うつ様作用への NO 産生抑制の関与, 第 59 回日本薬学会関東支部大会, 船橋, 9 月 12 日 (2015).
 31. 早田暁伸, 斎藤顕宜, 鈴木聡, 山田美佐, 岡淳一郎, 山田光彦, オピオイド δ 受容体はマウス内側前頭前野前辺縁皮質領域において神経活動依存的にグルタミン酸神経系を調節する, 生体機能と創薬シンポジウム 2015, 船橋, 8 月 27 日 (2015).
 32. 菊地昭徳, 中村みなみ, 松井彩佳, 永井悠貴, 岩井孝志, 渡辺俊, 松尾由理, 内藤康仁, 濱田幸恵, 岡淳一郎, 田辺光男, Glucagon-like peptide-2 の炎症性学習記憶障害に対する改善作用, 第 9 回先端分子薬理研究会, 千葉, 8 月 8 日 (2015).
 33. 田代祥之, 濱田幸恵, 恒岡弥生, 岡淳一郎, Monosodium glutamate 誘発肥満マウスの糖尿病発症過程におけるグルタミン酸受容体発現変化と脳領域の違い, 第 9 回先端分子薬理研究会, 千葉, 8 月 8 日 (2015).
 34. Kimura, H., Kimura, Y., Shibuya, N., Toyofuku, Y., Oka, J-I., Ogasawara, Y., Koike, S., and Tsugane, M., Hydrogen Sulfide and Polysulfides as Signaling Molecules. 第 38 回日本神経科学大会, 神戸, 7 月 29 日 (2015).
 35. Gotoh, L., Saitoh, A., Yamada, M., Tsukagoshi, M., Oka, J-I., and Yamada, M., Intracerebroventricularly Injected LPA Induces Anxiety-like Behavior in Mice via its Receptors -Possible Roles of LPA in Depression and Anxiety Disorders -. 第 38 回日本神経科学大会, 神戸, 7 月 29 日 (2015).
 36. Kimura, Y., Mikami, Y., Osumi, K., Tsugane, M., Oka, J-I., and Kimura, H., Polysulfides Derived from H₂S, are Possible Signaling Molecules That Activate TRPA1 Channels in Rat Brain. 第 38 回日本神経科学大会, 神戸, 7 月 29 日 (2015).
 37. 池田将淳, 濱田幸恵, 恒岡弥生, 岡淳一郎, Streptozotocin 誘発性認知症モデルマウスにおける glucagon-like peptide-2 の有用性の検討, 第 132 回日本薬理学会関東部会, 浦安, 7 月 4

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- 日 (2015).
38. 中尾優介, 中村龍治, 堀口道子, 濱田幸恵, 岡淳一郎, 山下親正, 中枢移行性の向上を目指した抗うつ様作用ペプチド GLP-2 点鼻剤の開発, 日本薬剤学会第 30 年会, 長崎, 5 月 22 日 (2015).
 39. 鈴木聡史, 斎藤顕宜, 山田美佐, 岡淳一郎, 山田光彦, マウスの不安様行動における内側前頭前野下辺縁皮質領域の役割について, 第 88 回日本薬理学会年会, 愛知, 平成 27 年 3 月 20 日 (2015).
 40. 木村由佳, 三上義礼, 大隅貴美子, 津金麻美子, 岡淳一郎, 木村英雄, 活性型の硫化水素であるポリサルファイドはラット脳で TRPA1 を活性化する, 第 88 回日本薬理学会年会, 愛知, 3 月 19 日 (2015).
 41. 杉山梓, 斎藤顕宜, 岡淳一郎, 長瀬博, 山田光彦, δ オピオイド受容体作動薬 KNT-127 の新規曝露療法併用薬としての可能性, 第 88 回日本薬理学会年会, 愛知, 3 月 18 日 (2015).
 42. 塚越麻衣, 山田美佐, 後藤玲央, 岡淳一郎, 斎藤顕宜, 山田光彦, リゾホスファチジン酸シグナル伝達系の情動行動に及ぼす検討, 第 24 回神経行動薬理若手研究者の集い, 愛知, 3 月 17 日 (2015).
 43. 杉山梓, 斎藤顕宜, 岡淳一郎, 山田光彦, リルゾールの新規曝露療法併用薬としての可能性, 精神保健研究所研究報告会, 東京, 3 月 8 日 (2015).
 44. 斎藤顕宜, 鈴木聡史, 早田暁伸, 岡淳一郎, 山田光彦, マウス内側前頭前野前辺縁皮質領域のグルタミン酸神経伝達系を介した不安様行動に対するオピオイド δ 受容体作動薬 KNT-127 の影響, 第 25 回マイクロダイヤリシス研究会, 東京, 12 月 20 日 (2014).
 45. 松本欣三, 牛一民, 稲田千香子, 藤原博典, 季峰, 田中謙, 渡辺志朗, 濱田幸恵, 岡淳一郎, 釣藤散投与により脳内に出現する生薬由来成分と生体内分子: 2 型糖尿病モデルマウスでの *ex vivo* ケミカルプロファイリング解析, 第 13 回日本臨床中医薬学会, 大阪, 12 月 6 日 (2014).
 46. 飯島崇裕, 恒岡弥生, 濱田幸恵, 岡淳一郎, 海馬及び扁桃体神経シナプス伝達に対するリルゾールの作用比較, 第 8 回先端分子薬理研究会, 東京, 11 月 29 日 (2014).
 47. 杉山梓, 斎藤顕宜, 稲垣正俊, 岡淳一郎, 山田光彦, リルゾールは文脈的恐怖記憶の消去を促進する, 第 44 回日本神経精神薬理学会・第 24 回日本臨床精神神経薬理学会合同大会, 愛知, 11 月 22 日 (2014).
 48. 鈴木聡史, 斎藤顕宜, 大橋正誠, 山田美佐, 稲垣正俊, 岡淳一郎, 山田光彦, ラモトリギンはマウス内側前頭前野前辺縁皮質領域のグルタミン酸神経伝達を抑制して抗不安様作用を示す, 第 44 回日本神経精神薬理学会・第 24 回日本臨床精神神経薬理学会合同大会, 愛知, 11 月 22 日 (2014).
 49. 塚越麻衣, 山田美佐, 岡淳一郎, 斎藤顕宜, 山田光彦, 脂質メディエーター リゾホスファチジン酸がマウスの情動行動に及ぼす影響, 第 44 回日本神経精神薬理学会・第 24 回日本臨床精神神経薬理学会合同大会, 愛知, 11 月 21 日 (2014).
 50. 後藤玲央, 斎藤顕宜, 塚越麻衣, 山田美佐, 岡淳一郎, 山田光彦, 気分障害における脂質メディエーター リゾホスファチジン酸の役割についての検討, 第 32 回躁うつ病の薬理・生化学的研究懇話会, 福岡, 10 月 17-18 日 (2014).
 51. 鈴木あずさ, 濱田幸恵, 恒岡弥生, 松本欣三, 岡淳一郎, 強制水泳試験を用いた釣藤散の抗うつ様作用の検討, 第 131 回日本薬理学会関東部会, 神奈川, 10 月 11 日 (2014).
 52. 中尾優介, 中村龍治, 堀口道子, 濱田幸恵, 岡淳一郎, 山下親正, Glucagon-like peptide-2 の中枢移行性を目指した点鼻剤の開発, 第 58 回日本薬学会関東支部大会, 東京, 10 月 4 日 (2014).
 53. 田代祥之, 北條裕己, 恒岡弥生, 濱田幸恵, 岡淳一郎, Monosodium glutamate 誘発肥満マウスの糖尿病発症過程におけるグルタミン酸受容体発現変化, 第 58 回日本薬学会関東支部大会, 東京, 10 月 4 日 (2014).
 54. 金丸真理子, 恒岡弥生, 濱田幸恵, 岡淳一郎, 高グルコースが神経細胞の PKA に与える影響, 第 58 回日本薬学会関東支部大会, 東京, 10 月 4 日 (2014).
 55. 濱田幸恵, 北條裕己, 小山創, 岡淳一郎, Changes in hippocampal synaptic functions and protein expression in monosodium glutamate-treated obese mice during development of glucose intolerance. 第 37 回日本神経科学大会 (Neuro2014), 横浜, 9 月 13 日 (2014).
 56. 木村由佳, 三上義礼, 大隅貴美子, 津金麻美子, 岡淳一郎, 木村英雄, H₂S-derived

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

polysulfides are potential signaling molecules that activate TRPA1 channels in rat brain. 第 37 回日本神経科学大会 (Neuro2014), 横浜, 9 月 11 日 (2014).

57. Niu, Y., Li, F., Fujiwara, H., Tanaka, K., Watanabe, S., Sasaki-Hamada, S., Oka, J., Matsumoto, K., Chemical profiling of endogenous and exogenous markers with potential to contribute to the anti-dementia effects of chitosan in an animal model of type 2 diabetes. 第 31 回和漢医薬学会学術大会, 千葉, 8 月 30 日-31 日 (2014).
58. 鈴木聡史, 齋藤顕宜, 大橋正誠, 塚越麻衣, 杉山梓, 山田美佐, 岡淳一郎, 稲垣正俊, 山田光彦, 内側前頭前野前辺縁皮質領域の興奮はグルタミン酸 NMDA 受容体を介してマウスの不安様行動を惹起する, 第 130 回日本薬理学会関東部会, 東京, 7 月 5 日 (2014).
59. 塚越麻衣, 山田美佐, 岡淳一郎, 齋藤顕宜, 山田光彦, 脳室内投与されたリゾホスファチジン酸は受容体を介してマウスの不安様行動を誘発する, 第 130 回日本薬理学会関東部会, 東京, 7 月 5 日 (2014).
60. 星真帆, 恒岡弥生, 濱田幸恵, 岡淳一郎, GLP-2 の抗うつ作用メカニズムの解明, 第 130 回日本薬理学会関東部会, 東京, 7 月 5 日 (2014).
61. 中村龍治, 中尾優介, 恒岡弥生, 堀口道子, 濱田幸恵, 山下親正, 岡淳一郎, GLP-2 経鼻投与用製剤の中樞作用, 第 130 回日本薬理学会関東部会, 東京, 7 月 5 日 (2014).

国際会議発表

62. Sugiyama, A., Saitoh, A., Inagaki, M., Oka, J-I., Yamada, M., Riluzole as a novel candidate agent to treat anxiety disorders. NCNP & Max-Planck-Institut joint symposium, Kanagawa, Japan, November 7 (2014).
64. Nakao, Y., Nakamura, R., Ozawa, C., Hamada, S., Horiguchi, M., Oka, J-I., Yamashita, C., Development of a nasal formulation for the GLP-2 delivery to the brain. 5th Indo-Japanese International Joint Symposium on Overcoming Intractable Infectious Diseases Prevalent in Asian Countries, Tokyo, Japan, September 16-17 (2014).
65. Saitoh, A., Sugiyama, A., Oka, J-I., Nagase, H., Yamada, M., The DOR₂ antagonist naltriben abolishes KNT-127-induced anxiolytic-like effects in rats. The International Narcotics Research Conference 2014 (INRC201), Montreal, Canada, July 13-18 (2014).

招待講演

66. 岡淳一郎, 濱田幸恵, 堀口道子, 中村龍治, 中尾優介, 山下親正, 経鼻投与用 GLP-2 誘導体のペプチド性抗うつ薬としての可能性, 第 89 回日本薬理学会年会, 横浜, 3 月 10 日 (2016).
67. 濱田幸恵, 堀口道子, 中村龍治, 中尾優介, 山下親正, 岡淳一郎, 中枢作用性 glucagon-like peptide-2 点鼻製剤の開発, 柏, 10 月 10 日 (2015).
68. 恒岡弥生, 西村翼, 増淵遼太郎, 濱田幸恵, 岡淳一郎, Glucagon-like peptide-2 の新展開: 末梢への作用, 柏, 10 月 10 日 (2015).
69. 岡淳一郎, 濱田幸恵, 鈴木あずさ, 上野達人, 玉城啓太, 松本欣三, 釣藤散の学習記憶障害改善作用及び抗うつ様作用の機序解明, 第 14 回日本臨床中医薬学会学術大会, 富山, 9 月 29 日 (2015).
70. 濱田幸恵, 岡淳一郎, 糖尿病に起因する認知障害の病態解明と治療戦略の構築, 生体機能と創薬シンポジウム 2015, 船橋, 8 月 28 日 (2015).
71. 岡淳一郎, 松本欣三, 濱田幸恵, 釣藤散の脳機能障害改善作用, 第 88 回日本薬理学会年会, 愛知, 3 月 18 日 (2015).

東達也

国内学会発表

1. 小川祥二郎, 渡部ひとみ, 茶谷 仁, 島田洋輔, 坪郷 哲, 後藤 了, 東 達也, 種々の Cookson 型試薬による 7-dehydrocholesterol 誘導体のプロトン親和力と ESI-MS 感度との関係, 日本薬学会第 137 年会, 仙台, 3 月 27 日 (2017).
2. 河俣圭太, 前川正充, 三枝大輔, 小川祥二郎, 東 達也, 山口浩明, 眞野成康, 誘導体化 LC/ESI-MS/MS を用いるコレステロール代謝物の網羅的分析系の構築, 日本薬学会第 137 年会, 仙台, 3 月 27 日 (2017).
3. 松本孝彬, 山崎 航, 小川祥二郎, 三田村邦子, 池川繁男, 東 達也, ICD-LC/ESI-MS/MS に

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- よる尿中テトラヒドロコルチコステロイドグルクロニドの定量法の開発、日本薬学会第137年会、仙台、3月27日(2017).
4. 木本新人、山本栄一、東 達也、加藤 大、ポリマー修飾モノリスカラムを用いた DOXIL の迅速分析、日本薬学会第137年会、仙台、3月25日(2016).
 5. 湯田啓太、中村将大、小川祥二郎、杉浦悠毅、新聞秀一、東 達也、MALDI/TOF-MS(/MS)を用いた低分子バイオマーカーのハイスループト定量法の開発研究、日本薬学会第137年会、仙台、3月25日(2017).
 6. 木本新人、東 達也、加藤 大、ポリマー修飾モノリス型カラムを用いた DOXIL からの内包薬物の放出評価、新アミノ酸分析研究会第6回学術講演会、東京、11月4日(2016).
 7. 高藤季里子、津吹 澄、堀江裕紀子、池川繁男、小川祥二郎、東 達也、ICD-LC/ESI-MS/MSによる玄米発酵食品(FBRA)中ケイ皮酸誘導体及び安息香酸誘導体の定量法の開発、日本分析化学会第65年会、札幌、9月15日(2016).
 8. 小川祥二郎、渡部ひとみ、茶谷 仁、島田洋輔、恒岡弥生、後藤 了、東 達也、Cookson型誘導体化試薬のESI-MS/MS分析における感度向上能と量子計算に基づくプロトン親和力との関係日本分析化学会第65年会、札幌、9月16日(2016).
 9. 杉浦悠毅、新聞秀一、東 達也、西本紘嗣郎、On tissue 誘導体化/イメージング質量分析によるステロイドホルモンの可視化、第41回日本医用マスペクトル学会年会、名古屋、9月16日(2016).
 10. 横田麻衣、後藤彩佳、小川祥二郎、小松賢司、杉浦崇浩、東 達也、LC/ESI-MS/MSを用いた新生児血漿中25-hydroxyvitamin D₃及びその硫酸抱合体の同時定量、日本分析化学会第65年会、札幌、9月14日(2016).
 11. 橋高宏貴、中田彬穂、小川祥二郎、東 達也、DAPTAD アイソトポログを用いた血漿中25-hydroxyvitamin D₃の高感度・ハイスループト LC/ESI-MS/MS 分析法の開発、第29回バイオメディカル分析科学シンポジウム、京都、9月2日(2016).
 12. 小川祥二郎、高野 香、中畔勇太郎、関 俊哲、東 達也、非侵襲ステロイド検査試料としての爪の有用性、第29回バイオメディカル分析科学シンポジウム、京都、9月2日(2016).
 13. 森下宜彦、葦澤 崇、岩崎了教、工藤寿治、東 達也、新聞秀一、杉浦悠毅、イメージング質量分析によるステロイドホルモンの可視化、第64回質量分析総合討論会、大阪、5月19日(2016).
 14. 安田優太郎、杉浦悠毅、東 達也、福崎英一郎、新聞秀一、マトリックス支援レーザー脱離イオン化イメージング質量分析を用いた生体内プロスタグランジン可視化のための試料前処理法の開発、第64回質量分析総合討論会、大阪、5月19日(2016).
 15. 後藤彩佳、横田麻衣、小川祥二郎、小松賢司、杉浦崇浩、東 達也、乳児血漿中25-hydroxyvitamin D₃及びその硫酸抱合体のLC/ESI-MS/MS同時定量法の開発、日本薬学会第136年会、横浜、3月28日(2016).
 16. 小川祥二郎、都丸晃輝、渡辺趣衣、眞野成康、東 達也、ESI増強誘導体化試薬を用いるラット脳内胆汁酸のLC/MS/MS定量、日本薬学会第136年会、横浜、3月28日(2016).
 17. 都丸晃輝、小川祥二郎、渡辺趣衣、眞野成康、東 達也、カルボン酸用ESI活性誘導体化試薬の開発と生体試料分析への応用、第26回クロマトグラフィー科学会議、福岡、11月11日(2015).
 18. *相葉尚人、田中智哉、大和 遼、吉澤一巳、小川祥二郎、東 達也、ESI増強重水素試薬を用いる脳内神経活性ステロイドのレベル変動解析、第26回クロマトグラフィー科学会議、福岡、11月11日(2015).
 19. 西村 基、佐藤 守、石毛崇之、東 達也、野村文夫、自動分析法による血清25ヒドロキシビタミンD測定値の標準化：SRM 972aを校正に用いた測定、第55回日本臨床化学会年次学術集会、大阪、10月30日(2015).
 20. 佐藤 守、石毛崇之、小川祥二郎、西村 基、松下一之、東 達也、野村文夫、LC/MS/MSの臨床検査応用—ビタミンD代謝物測定を基盤に—、日本臨床検査自動化学会 第47回大会、横浜、10月10日(2015).
 21. 小川祥二郎、加藤由那、高野 香、中畔勇太郎、山形憲一郎、関 俊哲、東 達也、ステロ

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- イド検査試料としての爪の評価：左右の手の爪中ステロイドの含量差、第40回日本医用マスペクトル学会年会、浜松、9月18日(2015)。
22. 佐藤 守、石毛崇之、小川祥二郎、西村 基、松下一之、東 達也、野村文夫、LC/MS/MSの臨床検査応用ービタミンD代謝物測定を基盤に一、第40回日本医用マスペクトル学会年会、浜松、9月18日(2015)。
 23. 後藤彩佳、横田麻衣、小川祥二郎、小松賢司、杉浦崇浩、東 達也、LC/ESI-MS/MSによる血漿中25-hydroxyvitamin D₃及びその硫酸抱合体の同時定量法の開発、第40回日本医用マスペクトル学会年会、浜松、9月17日(2015)。
 24. 橘高宏貴、篠田健太、中田彬穂、小川祥二郎、東 達也、高プロトン親和性Cookson型試薬の合成とビタミンD代謝物のLC/ESI-MS/MSにおける評価、第28回バイオメディカル分析科学シンポジウム、長崎、8月22日(2015)。
 25. 高藤季里子、津吹 澄、堀江裕紀子、池川繁男、小川祥二郎、東 達也、ESI活性重水素標識試薬を用いた玄米発酵食品(FBRA)中ケイ皮酸誘導体の定量法の開発、第28回バイオメディカル分析科学シンポジウム、長崎、8月22日(2015)。
 26. 高藤季里子、津吹 澄、堀江裕紀子、池川繁男、小川祥二郎、東 達也、ICDーLC/ESI-MS/MSによる玄米発酵食品(FBRA)中ケイ皮酸誘導体の定量法の開発、第13回次世代を担う若手のためのフィジカル・ファーマフォーラム、長崎、8月21日(2015)。
 27. 橘高宏貴、篠田健太、中田彬穂、小川祥二郎、東 達也、新規高プロトン親和性Cookson型試薬を用いた新生児血中25-ヒドロキシビタミンD₃のLC/ESI-MS/MS分析、第13回次世代を担う若手のためのフィジカル・ファーマフォーラム、長崎、8月20日(2015)。
 28. 佐藤 守、石毛崇之、小川祥二郎、西村 基、松下一之、東 達也、野村文夫、LC/MS/MSの臨床検査応用ービタミンD代謝物測定を基盤に一、日本プロテオーム学会2015年会、熊本、7月23日(2015)。
 29. *相葉尚人、田中智哉、小川祥二郎、東 達也、ESI活性重水素標識試薬を用いるラット脳内神経活性ステロイド分析法の開発、日本薬学会第135年会、神戸、3月27日(2015)。
 30. 都丸晃輝、渡辺趣衣、小川祥二郎、東 達也、誘導体化ーLC/ESI-MS/MSによる唾液中EPA/AA濃度比の測定、日本薬学会第135年会、神戸、3月27日(2015)。
 31. 小川祥二郎、高藤季里子、堀江裕紀子、池川繁男、東 達也、カルボン酸用新規ESI増加重水素標識試薬の合成とLCにおける同位体効果の評価、日本薬学会第135年会、神戸、3月27日(2015)。
 32. 森下雄大、東 達也、菅野弘晃、杉浦崇浩、佐藤 恵、水谷真一郎、小松賢司、小松和幸、福岡哲哉、喘息児と健康児における唾液コルチゾール・コルチゾン値の比較検討～第2報～、第51回日本小児アレルギー学会、四日市、11月9日(2014)。
 33. 大木 智、篠田健太、小川祥二郎、東 達也、ESI増加重水素標識試薬を用いた尿中ビタミンD₃代謝物のLC/MS/MS分析法の開発、第39回日本医用マスペクトル学会年会、千葉、10月17日(2014)。
 34. 佐藤 守、石毛崇之、小川祥二郎、西村 基、松下一之、東 達也、野村文夫、DAPTAD誘導体化を用いたLC-MS/MSによる血清ビタミンD代謝物の4項目同時定量、第39回日本医用マスペクトル学会年会、千葉、10月17日(2014)。
 35. 後藤彩佳、諸橋美里、小松賢司、杉浦崇浩、小川祥二郎、東 達也、血漿中25-hydroxyvitamin D₃ 3-sulfateのLC/ESI-MS/MS定量法の開発、第39回日本医用マスペクトル学会年会、千葉、10月16日(2014)。
 36. 石毛崇之、佐藤 守、小川祥二郎、西村 基、土田祥央、澤井 撰、松下一之、東 達也、野村文夫、イムノアフィニティー抽出DAPTAD誘導体化LC-MS/MSによる血清25OH-ビタミンDおよび1,25(OH)₂-ビタミンDの同時定量、第39回日本医用マスペクトル学会年会、千葉、10月16日(2014)。
 37. 田所弘晃、佐藤真帆、小川祥二郎、東 達也、ESI活性重水素標識試薬を用いる唾液中イブプロフェンの対掌体弁別定量法の開発、第39回日本医用マスペクトル学会年会、千葉、10月16日(2014)。
 38. 石毛崇之、佐藤 守、小川祥二郎、西村 基、土田祥央、澤井 撰、松下一之、小寺義男、東 達也、野村文夫、DAPTAD誘導体化LC-MS/MSによる血清25OH-ビタミンD₃、-D₂および3-

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

epi-250H-ビタミンD₃の同時分析、日本臨床検査自動化学会第46回大会、神戸、10月11日(2014).

39. 山形憲一郎、小川 宥、入山 崇、加藤由那、関 俊哲、小川祥二郎、東 達也、爪中 glycochenodeoxycholic acid と dehydroepiandrosterone sulfate の LC/ESI-MS/MS 定量法の開発、第27回バイオメディカル分析科学シンポジウム、東京、8月20日(2014).

国際会議発表

40. Ogawa, S., Ooki, S., Shinoda, K., and Higashi, T., A Method for Determination of Urinary Vitamin D₃ Metabolites Based on LC/ESI-MS/MS with ESI-Enhancing and Stable Isotope-Coded Derivatization. APCE2014 (14th Asia-Pacific International Symposium on Microscale Separations and Analysis), Kyoto, Japan, December 9 (2014).

招待講演

41. 東 達也、誘導体化-LC/ESI-MS/MS による新生児ビタミンD欠乏症の精密診断法の開発、第64回質量分析総合討論会、大阪、5月19日(2016).
42. 東 達也、高感度化と構造微小差の弁別を指向したLC/ESI-MS/MS用誘導体化法の開発、第11回千葉県分析化学交流会、東京、7月16日(2015).
43. 東 達也、低分子化合物のLC/ESI-MS/MS用誘導体化：検出感度の向上と構造微小差の弁別、第39回日本医用マススペクトル学会年会、千葉、10月16日(2014).

吉澤一巳

国内学会発表

1. 吉澤一巳、田代真弓、手塚栞、山田岳史、高橋吾郎、岩井琢磨、藤田逸郎、金沢義一、柿沼大輔、菅野仁史、横山康行、内田英二、EPAおよびBCAAは抗がん剤による骨格筋量減少を予防する、第31回日本静脈経腸栄養学会、福岡、2月25日(2016)
2. 芝野優希、山中沙織、河野弥生、吉澤一巳、廣木章博、田口光正、花輪剛久、トラマドール塩酸塩含有ハイドロゲル製剤からの薬物放出挙動および鎮痛効果の検討、日本薬学会136年会、神奈川、3月28日(2016).
3. 柳原千賀、吉澤一巳、魚森俊喬、齊藤光江、小茂田昌代、ラット唾液中アマラーゼ活性を指標とした抗がん剤誘発催吐作用の評価、日本薬学会第135年会、兵庫、3月26日(2015).
4. 吉澤一巳、田代真弓、山田岳史、高橋吾郎、岩井琢磨、菅隼人、小泉岐博、進士誠一、山岸杏彌、横山康行、内田英二、抗がん剤誘発体重および骨格筋量減少に対する栄養療法の有用性に関する基礎的検討、第40回日本外科系連合学会、東京、6月18日(2015)
5. 高橋彩夏、吉澤一巳、佐藤知世、弓長藤佳、田代真弓、青山隆夫、シスプラチンによる食欲不振に対する抗うつ薬ミルタザピンの有用性に関する基礎的検討、第1回日本医薬品安全性学会、広島、7月4日(2015).
6. 手塚栞、田代真弓、吉澤一巳、高橋吾郎、山田岳史、内田英二、CDDP誘発食欲不振に対するEPAおよびBCAAの有用性に関する検討、生体機能と創薬シンポジウム2015、千葉、8月27日(2015).
7. 高橋彩夏、工藤浩史、赤木祐貴、宮野早苗、大橋養賢、谷地豊、鈴木義彦、吉澤一巳、下村斉、青山隆夫、がん患者における神経障害性疼痛と精神症状に対するミルタザピンの有用性、第9回日本緩和医療薬学会、神奈川、10月3日(2015).
8. 光信沙恵、星野結衣、森友久、鈴木勉、吉澤一巳、精油成分がもたらすストレス障害モデルマウスへの睡眠増強および抗不安作用、第9回日本緩和医療薬学会、神奈川、10月3日(2015).
9. 吉澤一巳、鈴木勉、本邦における医療用麻薬使用量の現状、第9回日本緩和医療薬学会、神奈川、10月3日(2015).
10. 弓長藤佳、干台美咲、山田ゆりか、益田律子、吉澤一巳、抗がん剤足蹠投与による末梢神経障害モデルマウスの作製に関する検討、第133回日本薬理学会関東部会、千葉、10月10日(2015).
11. 田代真弓、手塚栞、山田岳史、高橋吾郎、内田英二、吉澤一巳、抗がん剤誘発体重減少におけるEPA強化栄養剤の有用性に関する基礎的検討、日本医科大学・東京理科大学第2回合同シンポジウム、東京、12月12日(2015)
12. 原島美樹、河野弥生、吉澤一巳、廣木章博、田口正光、花輪剛久、電子線架橋によるハイド

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

ロゲル製剤の調製と製剤素材としての可能性、日本薬剤学会第 29 年会、埼玉、5 月 21 日 (2014)。

13. 佐藤知世、吉澤一巳、弓長藤佳、田代真弓、高橋彩夏、青山隆夫、抗がん剤誘発副作用モデル動物に対する抗うつ薬 mirtazapine の影響、第 130 回日本薬理学会関東部会、東京、7 月 5 日 (2014)。
14. 田代真弓、小藤あずさ、山田岳史、内田英二、吉澤一巳、抗がん剤誘発食欲不振マウスに対する EPA 強化栄養剤の影響、第 8 回日本緩和医療薬学会年会、愛媛、10 月 4 日 (2014)。

樋上賀一

国内学会発表

1. 平岡秀規、水之江雄平、小林正樹、樋上賀一、肥満症が骨格筋に及ぼす影響、日本薬学会第 137 年会、仙台、3 月 24 日-27 日 (2017)。
2. 星野駿介、安部拓郎、松岡眞子、小林正樹、樋上賀一、肥満症脂肪組織における新規肥満応答因子 Wwp1 の機能解明、日本薬学会第 137 年会、仙台、3 月 24 日-27 日 (2017)。
3. 筋組織リモデリングに及ぼす影響、第 39 回日本基礎老化学会大会、伊勢原市、4 月 27 日-28 日 (2016)。
4. 安部拓郎、今野竜太郎、星野駿介、沖田直之、須藤結香、樋上賀一、新規肥満応答因子 WWP1 の機能解析、第 39 回日本基礎老化学会大会、伊勢原市、4 月 27 日-28 日 (2016)。
5. 金子弘輝、水之江雄平、井前正人、須藤結香、樋上賀一、タウリンが脂肪細胞のオートファジーに与える影響、伊勢原市、4 月 27 日-28 日 (2016)。
6. *樋上賀一、トレハロースの新規細胞防御メカニズム、第 105 回日本病理学会総会、仙台市、5 月 12 日-14 日 (2016)。
7. *樋上賀一、トレハロースの新規細胞防御システム、第 59 回日本糖尿病学会年次学術集会、京都、5 月 19 日-21 日 (2016)。
8. 成田匠、樋上賀一、脂肪酸合成関連転写因子 Srebp-1c は長期低栄養状態に対する適応遺伝子である、第 37 回日本肥満学会、東京、10 月 7 日-8 日 (2016)。
9. 水之江雄平、樋上賀一、肥満症脂肪細胞組織におけるリソソーム機能障害と脂肪細胞機能に与える影響、第 37 回日本肥満学会、東京、10 月 7 日-8 日 (2016)。
10. 名取大輝、水之江雄平、樋上賀一、天然由来二糖類トレハロースの新規細胞防御機構の解明と代謝性疾患への応用、東京、10 月 7 日-8 日 (2016)。
11. 安川博峰、樋上賀一、オートファジー誘導剤トレハロースの新規細胞防御メカニズムについて、第 10 回オートファジー研究会、新潟、11 月 14 日-15 日 (2016)。
12. 水之江雄平、樋上賀一、肥満症脂肪組織におけるリソソーム・オートファジー機能障害、第 10 回オートファジー研究会、新潟、11 月 14 日-15 日 (2016)。
13. 板倉佳穂、蒲谷里穂、斎藤宏樹、須藤結香、樋上賀一、代謝臓器におけるカロリー制限が及ぼす影響の解析、日本薬学会第 136 年会、横浜、3 月 26-29 日 (2016)。
14. 後藤彰文、斎藤宏樹、蒲谷里穂、須藤結香、樋上賀一、カロリー制限が骨格筋繊維タイプ別の機能に与える影響、日本薬学会第 136 年会、横浜、3 月 26-29 日 (2016)。
15. 斎藤宏樹、板倉佳穂、蒲谷里穂、須藤結香、樋上賀一、カロリー制限が内臓および皮下白色脂肪
16. 水之江雄平、樋上賀一、肥満症脂肪組織におけるオートファジー・リソソーム障害、第 36 回日本肥満学会、名古屋、10 月 2 日-3 日 (2015)。
17. 今野竜太郎、田川亮真、星野駿介、沖田直之、須藤結香、樋上賀一、脂肪細胞における WWP1 の機能解明、第 38 回日本基礎老化学会、横浜、6 月 13-14 日 (2015)。
18. 渡邊秀行、水之江雄平、名取大輝、沖田直之、須藤結香、樋上賀一、トレハロースによる新規細胞防御メカニズム、第 38 回日本基礎老化学会大会、横浜、6 月 13-14 日 (2015)。
19. 水之江雄平、須藤結香、平岡秀規、沖田直之、樋上賀一、肥満時の脂肪組織におけるリソソーム機能障害とオートファジーに与える影響、第 38 回日本基礎老化学会大会、横浜、6 月 13-14 日 (2015)。
20. 樋上賀一、Srebp1c を介したカロリー制限による脂肪組織での代謝リモデリングと抗老化・寿命延伸効果、第 103 回日本病理学会総会、広島、4 月 25 日 (2014)。
21. 樋上賀一、カロリー制限 (CR) による脂肪組織での代謝リモデリングと抗老化・寿命延伸

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- 効果に Srebp1 が重要な役割を果たす、第 57 回日本糖尿病学会年次学術集会、大阪市、5 月 23 日 (2014) .
22. Miyakawa, R., Sudo, Y., Otsuka, H., Goto, A., Kashiwase, Y., Uezono, Y., Higami, Y., Lipid metabolism in cancer cachexia and caloric restriction in adipose tissue, effects of Rikkunshito. 第 37 回基礎老化学会、名古屋、6 月 26 日 (2014) .
 23. Negishi, A., Mizuno, Y., Sudo, Y., Higami, Y., Inhibition of autophagy by fatty acids in hepatocyte. 第 37 回基礎老化学会、名古屋、6 月 26 日 (2014) .
 24. 田川亮真、鈴木裕規、沖田直之、今野竜太郎、須藤結香、樋上賀一、脂肪細胞における新規肥満応答性 E3 ユビキチンリガーゼ WWP1 による分化制御、第 19 回アディポサイエンス・シンポジウム、豊中市、8 月 23 日 (2014) .
 25. 西村瞳、宮野加奈子、横山明信、山川央、須藤結香、白石成二、長瀬隆弘、樋上賀一、上園保仁、アディポネクチン受容体シグナルアッセイ法確立と新規受容体アゴニストの開発、第 19 回アディポサイエンス・シンポジウム、豊中市、8 月 23 日 (2014) .
 26. 吉田実樹、水之江雄平、奈良原誠大、須藤結香、沖田直之、樋上賀一、栄養状態の変化が骨格筋線維タイプ別のオートファジーに及ぼす影響、第 58 回日本薬学会関東支部大会、町田市、10 月 4 日 (2014) .
 27. 橋爪由香里、酒井将弘、須藤結香、沖田直之、樋上賀一、絶食耐性における脂肪酸合成転写因子 Srebp-1c の関与、第 58 回日本薬学会関東支部大会、町田市、10 月 4 日 (2014) .
 28. 水之江雄平、須藤結香、沖田直之、樋上賀一、肥大化した脂肪細胞のオートファジーにおけるリソソーム機能障害、第 8 回オートファジー研究会、札幌市、11 月 10 日 (2014) .
 29. 成田匠、藤井波木、須藤結香、沖田直之、樋上賀一、カロリー制限による抗老化・寿命延長効果に Srebp-1 が及ぼす影響、第 14 回日本ミトコンドリア学会年会、福岡市、12 月 3 日 (2014)

国際会議発表

30. * Takeda, K., Narita, T., Kobayashi, M. and Higami, Y., Novel mechanisms of SIRT3 activation by caloric restriction, The 13th Conference of Asian Society for Mitochondrial Research and Medicine and The 16th Conference of Japanese Society of Mitochondrial Research and Medicine、東京、10 月 30 日-11 月 1 日 (2016) .
31. *Narita, T., Fujii, N., Furuta, Y., Okita, N., Sudo, Y., Kobayashi, M., and Higami, Y., Srebp-1c activates mitochondrial biogenesis in white adipose tissue via caloric restriction, The 13th Conference of Asian Society for Mitochondrial Research and Medicine and The 16th Conference of Japanese Society of Mitochondrial Research and Medicine、東京、10 月 30 日-11 月 1 日 (2016) .
32. Narita, T., Fujii, N., Okita, N., Sudo, Y., and Higami, Y., Srebp-1c Orchestrates Metabolic Remodeling of White Adipose Tissue by Caloric Restriction. The 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Science 2016, Noda, Chiba, Japan, February 27-28 (2016).

招待講演

33. Yuhei Mizunoe, Yuka Sudo, Naoyuki Okita, Yoshikazu Higami, Lysosomal Dysfunction in Early Pathologies in Obese Adipose Tissue, 2016 Spring International Conference of Korean Society for Gerontology The 15th Korea-Japan Gerontologist Joint Meeting, Taegu, Korea, June 15-17 (2016) .
34. Higami, Y., Quality of Adipose Tissue Aging and Metabolic Diseases, International Symposium of the Center for Animal Disease Models, Tokyo, July 16 (2016) .
35. Higami, Y., Srebp-1c plays an important role for metabolic remodeling of white adipose tissue, and anti-aging and pro-longevity actions of caloric restriction. Asian Aging Core for Longevity, “2006-2015, 10 years and Beyond”, Osaka, March 10 (2015) .
35. 成田匠、沖田直之、須藤結香、樋上賀一、新たなカロリー制限の分子メカニズム～脂肪代謝と脂肪組織のリモデリング～、第 30 回老化促進モデルマウス (SAM) 研究協議会、岐阜、7 月 4 日 (2015).

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

36. Higami, Y., Caloric restriction enhances mitochondrial biogenesis and suppresses oxidative stress via a master transcription factor of fatty acid biosynthesis, Srebp-1c, in mice white adipose tissue. 2014 Spring Conferene of the Korean Society for Gerontology and the 13th Korea-Japan Gerontologist Joint Meeting, Cheju Island, Korea, June 20, (2014).
37. Mizunoe, Y., Sudo, Y., Okita, N., Higami, Y., ROS-associated lysosomal dysfunction impaired autophagy flux and adipokine profile in adipocytes. 2014 Spring Conference of the Korean Society for Gerontology and The 13th Kprea-Japan Gerontologist Joint Meeting, Cheju Island, Korea, June 20, (2014).
38. 沖田直之、成田匠、藤井波木、須藤結香、樋上賀一、カロリー制限における Srebp1c を介した de novo 脂肪酸合成とミトコンドリアバイオジェネシス、酸化ストレスの関連、第 36 回日本基礎老化学会シンポジウム、東京都港区、10 月 26 日 (2014)。

磯濱洋一郎

国内学会発表

1. *村上一仁, 堀江一郎, 磯濱洋一郎, 血管内皮細胞の遊走に対する五苓散の抑制作用. 日本薬学会第 137 年会、宮城、3 月、(2017)。
2. 菅澤真澄, 堀江一郎, 浅田善久, 磯濱洋一郎, 荊芥に含まれる創傷治癒促進物質の同定. 日本薬学会第 137 年会、
3. 窪田佑紀, 堀田瑞希, 堀江一郎, 谷央子, 上園保仁, 磯濱洋一郎、蜂蜜の鎮咳作用および活性成分に関する薬理学的研究. 日本薬学会第 137 年会、宮城、3 月、(2017)。
4. Yazawa K, Saito K, Kozakai Y, Koder M, Horie I, Isohama Y, Myeloid-derived suppressor cells attenuate inflammation in asthma model mice. 第 90 回日本薬理学会年会、長崎、3 月 (2017)。
5. Okawa R, Muroi S, Horie I, Isohama Y, Existence of the anti-AQP5 autoantibody in the Sjogren's syndrome patient's serum. 第 90 回日本薬理学会年会、長崎、3 月 (2017)。
6. Saito K, Konno M, Horie I, Isohama Y, Juzen-taiho-to represses myeloid-derived suppressor cells. 第 90 回日本薬理学会年会、長崎、3 月 (2017)。
7. 窪田佑紀, 植竹沙織, 堀田瑞希, 堀江一郎, 谷央子, 上園保仁, 磯濱洋一郎、蜂蜜の鎮咳作用およびオピオイド様活性に関する研究. 第 135 回日本薬理学会関東部会、静岡、10 月、(2016)。
8. *堀江一郎, 磯濱洋一郎, 細胞標的型研究: 骨髄由来免疫抑制細胞 (MDSC) の分化調節を介した十全大補湯の免疫調節作用. 第 33 回和漢医薬学会学術大会、東京、8 月 (2016)。
9. *堀江一郎, 村上一仁, 上杉晴香, 荒井哲也, 磯濱洋一郎, アルコール性脳浮腫に対する五苓散の作用に関する研究. 第 33 回和漢医薬学会学術大会、東京、8 月 (2016)。
10. *村上一仁, 堀江一郎, 磯濱洋一郎, 五苓散による血管内皮細胞の遊走抑制作用. 第 33 回和漢医薬学会学術大会、東京、8 月 (2016)
11. *堀田瑞希, 堀江一郎, 蔣志侠, 荒井哲也, 磯濱洋一郎, マウス気道上皮線毛細胞の線毛運動に対する清肺湯の作用. 第 33 回和漢医薬学会学術大会、東京、8 月、(2016)。
12. 堀江一郎, 磯濱洋一郎, 気管支ぜん息の病態形成における骨髄由来免疫抑制細胞 (MDSC) の役割. 生体機能と創薬シンポジウム 2016 宮城、8 月、(2016)。
13. *堀江一郎, 磯濱洋一郎、十全大補湯の免疫賦活作用と骨髄由来免疫抑制細胞. 第 67 回日本東洋医学会学術総会、香川、6 月、(2016)。
14. 堀江一郎, 矢澤佳奈, 磯濱洋一郎, 気管支喘息の病態形成に対する骨髄由来免疫抑制細胞の役割. 第 35 回気道分泌研究会 (2016 年 4 月, 三重)
15. 堀江一郎, 磯濱洋一郎、慢性気道炎症における骨髄由来免疫抑制細胞の役割、第 89 回日本薬理学会年会、横浜、2016 年 3 月 9-11 日 (2016)。
16. 矢澤佳奈, 斎藤賢治, 堀江一郎, 磯濱洋一郎、気管支喘息における骨髄由来免疫抑制細胞の

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- 役割、東京理科大学総合研究院再生医療と DDS の融合研究部門発足記念シンポジウム、新宿、1月13日(2016).
17. 窪田佑紀、植竹沙織、堀田瑞希、堀江一郎、磯濱洋一郎、蜂蜜の鎮咳作用とその活性成分に関する薬理学的研究、東京理科大学総合研究院再生医療と DDS の融合研究部門発足記念シンポジウム、新宿、1月13日(2016).
 18. 野溝聡、江川奈生、小森駿、堀江一郎、磯濱洋一郎、気道分泌に関わる水チャネル aquaporin 5 活性に対する eprazinone の作用、東京理科大学総合研究院トランスレーショナルリサーチセンター第3回シンポジウム、葛飾、1月23日(2016).
 19. 石崎誉子、齋藤佳奈、町田渉、石橋順平、堀江一郎、磯濱洋一郎、気道炎症における粘液産生亢進に対するイブジラストの作用、第89回日本薬理学会年会、横浜、2016年3月9-11日(2016).
 20. 江川奈生、堀江一郎、蔣 志侠、荒井鉄也、和田篤敬、磯濱洋一郎、清肺湯は細胞膜表面の AQP5 を増加させ、水輸送を促進する、第89回日本薬理学会年会、横浜、2016年3月9-11日(2016).
 21. 今野真理子、齋藤賢治、堀江一郎、磯濱洋一郎、骨髄由来免疫抑制細胞に対する十全大補湯の作用、日本薬学会第136年会、横浜、3月26-29日(2016).
 22. 齋藤佳奈、石崎誉子、石橋純平、町田渉、堀江一郎、磯濱洋一郎、Ibudilast による気道粘液遺伝子 MUC5AC の発現抑制作用、日本薬学会第136年会、横浜、3月26-29日(2016).
 23. 大川竜麻、仲田帆名美、室井慎一、堀江一郎、磯濱洋一郎、Sjogren 症候群患者血清中の抗 Aquaporin-5 自己抗体の存在とその意義、日本薬学会第136年会、横浜、3月26-29日(2016).
 24. 矢澤佳奈、齋藤賢治、堀江一郎、磯濱洋一郎、気管支喘息における骨髄由来免疫抑制細胞の役割、日本薬学会第136年会、横浜、3月26-29日(2016).
 25. 野溝聡、江川奈生、小森駿、堀江一郎、磯濱洋一郎、Eprazinone による水チャネル aquaporin-5 の機能亢進作用、日本薬学会第136年会、横浜、3月26-29日(2016).
 26. 今野真理子、堀江一郎、磯濱洋一郎、十全大補湯と補中益気湯のもつ骨髄由来免疫抑制細胞への作用、第18回天然薬物研究方法論アカデミー、大子、8月8-9日(2015).
 27. 江川奈生、堀江一郎、磯濱洋一郎、清肺湯は細胞膜表面の aquaporin-5 を増加させ、水輸送を促進する、第18回天然薬物研究方法論アカデミー、大子、8月8-9日(2015).
 28. 菅澤真澄、藤川みか、堀江一郎、浅田善久、磯濱洋一郎、荊芥エキスによる AQP3 発現亢進およびケラチノサイト遊走に関わる活性成分に関する研究、第18回天然薬物研究方法論アカデミー、大子、8月8-9日(2015).
 29. 今野真理子、堀江一郎、磯濱洋一郎、骨髄由来免疫抑制細胞に対する十全大補湯および補中益気湯の作用、第32回和漢医薬学会学術大会、富山、8月22-23日(2015).
 30. 藤川みか、堀江一郎、磯濱洋一郎、乾癬モデル動物における荊芥の水チャネル aquaporin-3 発現亢進作用と搔痒行動の抑制、第32回和漢医薬学会学術大会、富山、8月22-23日(2015).
 31. 窪田佑紀、植竹沙織、堀江一郎、磯濱洋一郎、気道粘液線毛クリアランスの新規評価系の確立、東京理科大学総合研究院トランスレーショナルリサーチセンター第2回シンポジウム、葛飾、8月29日(2015).
 32. 仲田帆名美、大川竜麻、堀江一郎、磯濱洋一郎、シェーグレン症候群患者血清中に抗 aquaporin-5 自己抗体が存在する、東京理科大学総合研究院トランスレーショナルリサーチセンター第2回シンポジウム、葛飾、8月29日(2015).
 33. 大川竜麻、仲田帆名美、堀江一郎、磯濱洋一郎、シェーグレン症候群患者血清中における抗 aquaporin-5 自己抗体の存在とその意義、第133回日本薬理学会関東部会、柏、10月10日(2015).
 34. 藤川みか、堀江一郎、磯濱洋一郎、水チャネル aquaporin-3 発現亢進作用をもつ荊芥は乾癬モデルの搔痒行動を抑制する、第133回日本薬理学会関東部会、柏、10月10日(2015).
- 招待講演**
35. 堀江一郎、磯濱洋一郎、骨髄由来免疫抑制細胞を標的とした新規免疫調節戦略、東京理科大学総合研究院再生医療と DDS の融合研究部門発足記念シンポジウム、新宿、1月13日(2016).
 36. 磯濱洋一郎、漢方薬のユニークな作用を担う薬理学的標的分子、漢方調剤フォーラム in 岡山、岡山、1月17日(2016).

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

37. 磯濱洋一郎、利水作用とアクアポリン、Osaka Science-based Kampo 研究会、堺、1月30日(2016)。
38. Isohama Y., Increased Cytokine Expression by Aquaporin 5-Aquaporins: as a Target for Drug Development, iPOPs2016, Noda, 2月27日(2016)。
39. 堀江一郎、磯濱洋一郎、十全大補湯の免疫賦活作用と骨髄由来免疫抑制細胞、第5回サイエンス漢方処方研究会、渋谷、3月21日(2016)。
40. 堀江一郎、磯濱洋一郎、慢性気道炎症における骨髄由来免疫抑制細胞の役割、第89回日本薬理学会年会、横浜、2016年3月9-11日(2016)。
41. 磯濱洋一郎、気道分泌の正常化を指向したドラッグリポジショニング、第89回日本薬理学会年会、横浜、2016年3月9-11日(2016)。
42. 磯濱洋一郎、漢方薬のユニークな作用を担う薬理学的標的分子、第15回小児漢方懇話会、大阪、7月19日(2015)。
43. 磯濱洋一郎、利水作用とアクアポリン、第9回熊本婦人科漢方の集い、熊本、7月31日(2015)。
44. 磯濱洋一郎、利水作用とアクアポリン、第31回おおさか漢方研究会、大阪、9月10日(2015)。
45. 磯濱洋一郎、利水作用とアクアポリン、第33回杏林東洋医学研究会、三鷹、9月29日(2015)。
46. 磯濱洋一郎、漢方薬の利水作用を支える分子：アクアポリン、第33回南部漢方学術講演会、八戸、10月3日(2015)。
47. 堀江一郎、今野真理子、磯濱洋一郎、十全大補湯は骨髄由来免疫抑制細胞に対する抑制作用をもつ、第133回日本薬理学会関東部会、柏、10月10日(2015)。
48. 磯濱洋一郎、漢方薬の利水作用を支える分子：アクアポリン、第31回耳鼻科漢方研究会、品川、10月24日(2015)。
49. 磯濱洋一郎、利水作用とアクアポリン、仙台漢方医学セミナー、仙台、10月31日(2015)。
50. 磯濱洋一郎、漢方薬の利水作用を支える分子：アクアポリン、日本東洋医学会第22回茨城県部会、つくば、11月15日(2015)。
51. 磯濱洋一郎、漢方薬の利水作用を支える分子：アクアポリン、第2回浜松漢方Bring Upセミナー、浜松、11月17日(2015)。

【臨床試験グループ】

小茂田昌代

国内学会発表

1. *白石有美, 梁瀬加寿子, 山口さやか, 梅澤雅和, 赤木圭太, 金谷有紗, 茂木嶺志, 高橋健造, 石井則久, 小茂田昌代, 日本におけるアタマジラミ症治療薬整備に向けた医師主導型の臨床研究(第1報), 第115回日本皮膚科学会総会、京都6月3日～5日(2016)
2. *山口さやか, 大久保優子, 安里哲時, 稲嶺盛磨, 白石有美, 赤木圭太, 石井則久, 小茂田昌代, 高橋健造, 上里博, アタマジラミ症治療薬整備に向けた医師主導型臨床研究, 第115回日本皮膚科学会総会、京都6月3日～5日(2016)
3. 山田瑞稀, 赤木圭太, 越野万智, 阿久津駿太, 矢田目麻衣, 牧上久仁子, 廣田孝司, 小茂田昌代, イベルメクチン全身浴法における連続して入浴した際の角層中濃度を検討する試験, 日本病院薬剤師会関東ブロック第46回学術大会、千葉、8月27日(2016)
4. 阿久津駿太, 赤木圭太, 越野万智, 山田瑞稀, 矢田目麻衣, 頓宮美樹, 牧上久仁子, 廣田孝司, 小茂田昌代, 疥癬患者を対象とした新規治療法イベルメクチン全身浴法の安全性と有効性を検討する臨床試験(中間報告), 日本病院薬剤師会関東ブロック第46回学術大会、千葉、8月27日(2016)
5. 吉増孝嗣, 小茂田昌代, 文献検索サイトを用いた臨床研究に関する調査-薬剤師の参画への課題, 第1回日本医薬品安全性学会学術大会、福山、7月4日(2015)。
6. 小茂田昌代, 重篤副作用早期回避のシミュレーションPBL～在宅・病棟のリアル症例で学ぶ～, 第1回日本医薬品安全性学会学術大会、福山、7月4日(2015)。
7. *梁瀬加寿子, 赤木圭太, 吉増孝嗣, 白石有美, 金谷有紗, 茂木嶺志, 廣田孝司, 高橋健造, 石井則久, 小茂田昌代, 日本におけるアタマジラミ症治療薬整備に向けた探索的研究, 第6回日本アプライド・セラピューティクス学会学術大会、東京、8月23日(2015)。

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

8. 越野万智、赤木圭太、吉増孝嗣、阿久津駿太、山田瑞稀、頓宮美樹、牧上久仁子、廣田孝司、小茂田昌代、疥癬新規治療法イベルメクチン全身浴法に関する臨床試験（中間報告）、第6回日本アプライド・セラピューティクス学会学術大会、東京、8月23日（2015）。
9. *梁瀬加寿子、赤木圭太、吉増孝嗣、白石有美、金谷有紗、茂木嶺志、廣田孝司、高橋健造、石井則久、小茂田昌代、日本におけるアタマジラミ症治療薬整備に向けた探索的研究、総合研究院トランスレーショナルリサーチセンター第2回シンポジウム/研究交流会、東京、8月29日（2015）。
10. 越野万智、赤木圭太、吉増孝嗣、阿久津駿太、山田瑞稀、頓宮美樹、牧上久仁子、廣田孝司、小茂田昌代、疥癬新規治療法イベルメクチン全身浴法に関する臨床試験（中間報告）、総合研究院トランスレーショナルリサーチセンター第2回シンポジウム/研究交流会、東京、8月29日（2015）。
11. 湯浅奈絵、金永進、吉増孝嗣、小茂田昌代、簡易懸濁法におけるストロメクトール錠の有効性に関する研究—懸濁器具の種類による影響について—、日本病院薬剤師会関東ブロック第44回学術大会、埼玉、8月30日（2014）。
12. *吉増孝嗣、英太一、木暮聖、杉岡晃仁、野口航、福沢正男、廣田孝司、小茂田昌代、疥癬治療薬ストロメクトール錠の用法に関する臨床試験【1】—食後投与が有効性および安全性に及ぼす影響—、第24回日本医療薬学会年会、愛知、9月28日（2014）。
13. *英太一、吉増孝嗣、木暮聖、杉岡晃仁、野口航、福沢正男、小茂田昌代、廣田孝司、疥癬治療薬ストロメクトール錠の用法に関する臨床試験【2】、第24回日本医療薬学会年会、愛知、9月28日（2014）。
14. *野口航、湯浅奈絵、吉増孝嗣、越野万智、白石有美、木暮聖、英太一、宮嶋篤志、牧上久仁子、廣田孝司、小茂田昌代、疥癬新規治療法イベルメクチン全身浴法の臨床試験（1）—プロトコル作成と忍容性評価—、第35回日本臨床薬理学会学術総会、松山、12月5日（2014）。
15. *木暮聖、英太一、野口航、湯浅奈絵、吉増孝嗣、越野万智、白石有美、宮嶋篤志、牧上久仁子、小茂田昌代、廣田孝司、疥癬新規治療法イベルメクチン全身浴法の臨床試験（2）—ヒト角層および血漿中イベルメクチン濃度の測定—、第35回日本臨床薬理学会学術総会、松山、12月5日（2014）。

国際会議発表

16. *Komoda, M., Akagi, K., Hirota, T., Makigami, K., Takahashi, K., Yamaguchi, S. and Ishii, N., CLINICAL RESEARCHES TO SOLVE PROBLEMS RELATED TO MEDICATIONS. The 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Science 2016, Noda, Chiba, Japan, February 27-28 (2016).

招待講演

17. 小茂田昌代、疥癬感染対策～いつか来る・・・その“いつか”に備えて・・・「疥癬の薬物療法～ガイドライン第3版 どころが変わった？～」、東葛北部感染対策地域支援ネットワーク研修会 第3シリーズ・第3回、千葉、1月29日（2016）。
18. 小茂田昌代、医療薬学研究的発展に向けて—薬学生への種蒔きから薬剤師での結実へ— 第57回医療薬学公開シンポジウム、東京、9月19日（2015）。
19. 小茂田昌代、疥癬治療ガイドライン～作成作業の総括と討論～②薬理について、第3回疥癬研究会、東京、2015.11月15日（2015）。
20. 小茂田昌代、Open Clinicaを使用した薬剤師主導の臨床試験を行って、第25回日本医療薬学会年会、横浜、11月22日（2015）。
21. 小茂田昌代、エビデンスを作ろう！薬剤部や薬局で始める臨床研究、サノフィ薬剤師セミナー～かかりつけ薬局からかかりつけ薬剤師へ～（e-MR ファルマシアン）、東京、12月16日（2015）。

佐藤嗣道

国内学会発表

1. 川根梨奈、岡野美菜実、齋藤真由、山本美智子、佐藤嗣道. 患者向医薬品ガイドのユーザーテストの方法：質問の作成方法に関する検討. 第19回日本医薬品情報学会総会・学術大会、東京、6月4-5日（2016）。
2. 鈴木榛華、宮田滉平、黒澤光、志村侑里江、山本健、佐藤嗣道、土肥弘久、山本美智子. ユ

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- 一ザータストを用いた患者向医薬品ガイド（プラザキサ）の検討. 第 19 回日本医薬品情報学会総会・学術大会、東京、6 月 4-5 日（2016）.
3. 山本健, 宮田滉平, 鈴木榛華, 黒澤光, 岡崎光洋, 浅田和弘, 須賀万智, 佐藤嗣道, 中村敏明, 古川綾, 折井孝男, 高橋英孝, 杉森裕樹, 中山健夫, 山本美智子. 一般消費者に対する医薬品情報の利活用に関する現状調査. 第 19 回日本医薬品情報学会総会・学術大会、東京、6 月 5 日（2016）.
 4. 田代大将, 堀雄史, 川上純一, 木村通男, 佐藤嗣道. 病院情報データベースを用いたコホート研究の実施可能性：抗リウマチ薬使用患者における検討. 第 22 回日本薬剤疫学会学術総会、京都、11 月 18-19 日（2016）.
 5. 木内希, 高橋正夫, 小林祥史, 伊集院一成, 上村直樹, 鹿村恵明, 田尻泰典, 鈴木洋史, 山本信夫, 佐藤嗣道. SGLT2 阻害薬使用に伴う有害事象の発現パターンの検討：Drug Event Monitoring (DEM) で報告されたイベントの解析. 第 22 回日本薬剤疫学会学術総会、京都、11 月 18-19 日（2016）.
 6. 長谷川春菜, 荻野守弥, 秋山元良, 佐藤嗣道, 久保田潔. スタチン治療のアドヒアランスと予防的検査との関連に関する研究：healthy adherer bias の検討. 第 22 回日本薬剤疫学会学術総会、京都、11 月 18-19 日（2016）.
 7. 荻野守弥, 川根梨奈, 木内希, 田代大将, 長谷川春菜, 高橋悠一, 北條春輝, 佐藤嗣道, 利用しやすい患者向け医薬品ガイド改訂版の検討と試作、日本薬学会第 135 年会、神戸、3 月 26 日（2015）.
 8. 荒井花奈, 下村斉, 今中景子, 福田元, 馬島徹, 増山英則, 佐藤嗣道, 青山隆夫, 結核患者におけるリファンピシンと糖尿病治療薬との薬物相互作用に関する後ろ向き調査研究、日本薬学会第 135 年会、神戸、3 月 26 日（2015）.
 9. 山本健, 宮田滉平, 鈴木榛華, 黒澤光, 岡崎光洋, 浅田和弘, 須賀万智, 佐藤嗣道, 中村敏明, 古川綾, 折井孝男, 高橋英孝, 杉森裕樹, 中山健夫, 山本美智子, 患者向け医薬品情報及び患者向医薬品ガイドに関する実態調査、日本薬学会第 136 年会、横浜、3 月 27 日（2016）.
 10. 鹿村恵明, 金子千紘, 根岸健一, 小茂田昌代, 佐藤嗣道, 渡邊和裕, 大澤光司, 薬局薬剤師に対する患者・顧客からの相談、医師からの問い合わせ事例調査、第 48 回日本薬剤師会学術大会、鹿児島、11 月 22-23 日（2015）.
 11. 佐藤嗣道, 荻野守弥, 川根梨奈, 木内希, 田代大将, 長谷川春菜, 北條春輝, 後藤恵子, 松田勉, 山本美智子, 杉森裕樹, 患者向医薬品ガイド改善の試みと評価：フォサマック[®]錠の場合、日本社会薬学会第 34 年会、熊本、7 月 25-26 日（2015）.
 12. 佐藤嗣道, 松田勉, 山本美智子, 荻野守弥, 川根梨奈, 木内希, 田代大将, 長谷川春菜, 高橋悠一, 北條春輝, 後藤恵子, 杉森裕樹, 患者向医薬品ガイド改善の試みと評価：ジャヌビア[®]錠の場合、第 18 回日本医薬品情報学会総会・学術大会、岡山、6 月 27-28 日（2015）.
 13. 上島有加里, 佐藤嗣道, 久保田潔, サリドマイドの個人輸入の現状：サリドマイド使用登録システム（SMUD）に関する 2014 年 3 月までの登録データの集計結果、第 20 回日本薬剤疫学会学術総会、松山、10 月 12 日（2014）.
 14. 下村斉, 清水麻衣子, 高橋香緒理, 今中景子, 馬島徹, 増山英則, 佐藤嗣道, 青山隆夫, 肺 MAC 症の多剤併用療法における薬物相互作用と副作用発現状況、第 58 回日本薬学会関東支部大会、町田、10 月 4 日（2014）.
 15. 小野愛莉, 下村斉, 馬島徹, 今中景子, 増山英則, 佐藤嗣道, 青山隆夫, 肺 MAC 症治療薬におけるクラリスロマイシンとフルオロキノロンの相互作用に関する研究、日本病院薬剤師会関東ブロック第 44 回学術大会、大宮、8 月 30 日（2014）.

国際会議発表

16. Katsuhito Hori, Michio Kimura, Kazuhiko Ohe, Naoki Nakajima, Hideto Yokoi, Masahiro Tohkin, Kimie Sai, Takuya Imatoh, Tsugumichi Sato, Syunya Ikeda, Yoshiro Saito, Junichi Kawakami. Review of the Pharmacoepidemiological Studies Using the Medical Information Databases in Japanese Hospitals. 32nd International Conference on Pharmacoepidemiology & Therapeutic Risk Management, Dublin, August 27 (2016).
17. Ooba, N., Setoguchi, S., Sato, T., and Kubota, K., Risk of New-Onset Diabetes in Users of Lipid Lowering Drugs (LLDs). 30th International Conference on

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

<p>Pharmacoepidemiology & Therapeutic Risk Management, Taipei, Taiwan, October 27 (2014).</p> <p>18. Kamijima, Y., Ooba, N., <u>Sato, T.</u>, and Kubota, K., Epidemiology of Psoriasis in Japan: Results from a Descriptive Study Using National Database. 30th International Conference on Pharmacoepidemiology & Therapeutic Risk Management, Taipei, Taiwan, October 27 (2014).</p> <p>招待講演</p> <p>19. <u>佐藤嗣道</u>、患者のニーズと医薬品情報のあり方、第19回日本医薬品情報学会総会・学術大会、東京、6月4日(2016)。</p> <p>20. <u>佐藤嗣道</u>、サリドマイドの催奇形性の特徴とリスク管理における留意点、日本産科婦人科学会第68回学術講演会、東京、4月22日(2016)。</p> <p>21. <u>佐藤嗣道</u>、サリドマイド薬害の教訓と再発防止のためのTERMSの課題、第2回日本医療安全学会学術総会、東京、3月6日(2016)。</p> <p>22. <u>佐藤嗣道</u>、サリドマイド等のリスク最小化策改訂の評価ポイント、日本薬剤疫学会第21回学術総会、埼玉県北足立郡伊奈町、11月7日(2015)。</p> <p>23. <u>佐藤嗣道</u>、コホート研究の実施可能性と留意点、医療薬学フォーラム2015・第23回クリニカルファーマシーシンポジウム、名古屋、7月4日(2015)。</p> <p>24. <u>佐藤嗣道</u>、薬害と共通する医療事故の構造的側面、日本薬剤学会第30年会、長崎、5月23日(2015)。</p> <p>25. <u>佐藤嗣道</u>、バイアスの例と対処法。医療薬学フォーラム2014・第22回クリニカルファーマシーシンポジウム、東京都江東区、6月29日(2014)。</p>
--

<研究成果の公開状況>(上記以外)

<p>シンポジウム・学会等の実施状況、インターネットでの公開状況等</p> <p><既に実施しているもの></p> <p>1. シンポジウム等</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 平成26年9月20日：トランスレーショナルリサーチセンターキックオフミーティング (薬学部14号館1411教室) ● 平成27年1月10日：トランスレーショナルリサーチセンター第1回シンポジウム・研究交流会 (薬学部14号館1411教室) ● 平成27年3月7日：東京慈恵会医科大学・東京理科大学合同シンポジウム (東京慈恵会医科大学臨床医学研究所多目的会議室) ● 平成27年5月14日：International Symposium of University of Hawaii Cancer Center and Tokyo University of Science, Translational Research (TR) Center (University of Hawaii Cancer Center, Honolulu, HI) ● 平成27年8月29日：トランスレーショナルリサーチセンター第2回シンポジウム・研究交流会 (東京理科大学葛飾キャンパス図書館ホール) ● 平成28年1月23日：トランスレーショナルリサーチセンター第3回シンポジウム・研究交流会 (東京理科大学葛飾キャンパス図書館ホール) ● 平成28年6月25日：International Symposium of Tokyo University of Science, Translational Research (TR) Center -Frontiers in Developmental Strategy for Cancer Therapeutics- (Room 101, Katsushika Campus, Tokyo University of Science) ● 平成28年8月27日：トランスレーショナルリサーチセンター第5回シンポジウム・研究交流会 (東京理科大学神楽坂キャンパス富士見校舎101) ● 平成29年1月21日：トランスレーショナルリサーチセンター第6回シンポジウム・研究交流会 (東京理科大学神楽坂キャンパス富士見校舎101) <p>2. TRセンターのホームページを以下のサイトに公開している。</p> <p>http://www.rs.tus.ac.jp/tr/</p> <p>このサイトでは、センターの概要、構成、活動状況などをリアルタイムに近い形で紹介している</p>

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

3. プレスリリース

- 樋上賀一、カロリー制限による新規寿命制御メカニズム～寿命制御の鍵は脂肪組織の質！～、3月16日（2017）

<これから実施する予定のもの>

- 平成29年8月：トランスレーショナルリサーチセンター第7回シンポジウム・研究交流会（東京理科大学神楽坂キャンパス富士見校舎101）
- 平成30年1月：トランスレーショナルリサーチセンター第8回シンポジウム・研究交流会（東京理科大学神楽坂キャンパス富士見校舎101）
- 平成30年5月31日～6月2日：第41回日本基礎老化学会総会・トランスレーショナルリサーチセンター第8回シンポジウム・研究交流会合同会（東京理科大学葛飾キャンパス図書館ホール）

14 その他の研究成果等

「12 研究発表の状況」で記述した論文、学会発表等以外の研究成果及び企業との連携実績があれば具体的に記入してください。また、上記11(4)に記載した研究成果に対応するものには*を付けてください。

- *深井等は、小児がんの1つである神経芽腫の緩和かつ高効率な治療法開発を目指して、製薬企業と共同研究を行っている。神経芽腫治療においては「晩期合併症」リスクを避けるために殺細胞性に基かない緩和な化学療法の開発が急務であり、ビタミンA酸を利用した「分化誘導療法」の開発が進められている。しかし、進行性患者で高発現するがん原遺伝子産物N-Mycタンパク質のため十分な分化誘導が達成できていない。同共同研究では、ビタミンA酸とテネイシンC由来インテグリン活性化ペプチドTNIIIA2と併用することにより、N-Mycタンパク質の分解が誘導され、それに基づいて著しい神経細胞分化と悪性形質低下ができることを見出し、in vitro、in vivoともに顕著な有効性を確認した。知的財産権確保に向けて、更に改良を加えた変法の出願を準備中である。
- *樋上ら肥満症脂肪組織の機能改善を目的に、製薬企業と共同で、タウリン投与の影響を肥満症脂肪組織の初期病態形成に関わると報告したオートファジー機能やリソソーム機能改善を中心に検討した。その結果、タウリンにオートファジー亢進作用があることを明らかにした。
- *岡らが特許出願した治療抵抗性うつ病に有用である可能性が高い経鼻投与可能な膜透過促進配列とエンドソーム脱出促進配列を付加した新規GLP-2誘導体は、大手製薬企業及びベンチャー企業など3社と共同研究が進められている。
- *小茂田らは、前述のごとくイベルメクチンローションが特に沖縄地区の既存薬に対する薬剤耐性アタマジラミ症に対して有効であり、且つ有害事象が見られない事を示した。この結果をもとに、厚生省未承認薬検討会議にイベルメクチンローションの本邦での承認を求める要望書を、日本皮膚科学会などの賛同を得て提出した。その結果、厚生労働省より、日本の製薬企業に開発要請がかかり、1社が米国の製薬企業と開発に関して調整を開始した。

15 「選定時」に付された留意事項とそれへの対応

<「選定時」に付された留意事項>

該当なし

<「選定時」に付された留意事項への対応>

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

16 施設・装置・設備・研究費の支出状況(実績概要)

(千円)

年度・区分	支出額	内 訳						備考
		法人負担	私学助成	共同研究機関負担	受託研究等	寄付金	その他()	
平成26年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	34,791	13,325	21,466				
	研究費	33,182	17,641	15,541				
平成27年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	24,000	9,154	14,846				
	研究費	19,887	11,048	8,839				
平成28年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	22,931	13,162	9,769				
総額	施設	0	0	0	0	0	0	
	装置	0	0	0	0	0	0	
	設備	58,791	22,479	36,312	0	0	0	
	研究費	76,000	41,851	34,149	0	0	0	
総計	134,791	64,330	70,461	0	0	0	0	

17 施設・装置・設備の整備状況 (私学助成を受けたものはすべて記載してください。)

《施設》(私学助成を受けていないものも含め、使用している施設をすべて記載してください。)

(千円)

施設の名 称	整備年度	研究施設面積	研究室等数	使用者数	事業経費	補助金額	補助主体

※ 私学助成による補助事業として行った新增築により、整備前と比較して増加した面積

_____ m²

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

《装置・設備》(私学助成を受けていないものは、主なもののみを記載してください。)

(千円)

装置・設備の名称	整備年度	型番	台数	稼働時間数	事業経費	補助金額	補助主体
(研究装置)				h			
				h			
				h			
				h			
(研究設備)							
蛍光・発光イメージングシステム	26		1	h	34,791	21,466	
生体-マテリアル相互作用解析システム	27	E1/J13	1	h	24,000	14,846	
				h			
				h			
				h			
(情報処理関係設備)				h			
				h			
				h			
				h			

18 研究費の支出状況

(千円)

年度	平成	26	年度	積算内訳	
小科目	支出額	主な用途	金額	主な内容	
教育研究経費支出					
消耗品費	15,980	実験材料(試薬、実験器具)	15,980	実験材料(試薬、実験器具)	
光熱水費	0		0		
通信運搬費	0		0		
印刷製本費	0		0		
旅費交通費	727	学会参加費、研究打ち合わせ旅費	727	学会参加費、研究打ち合わせ旅費	
報酬・委託料	1,462	臨床試験サポート一式、機器修繕費、講演会謝金等	1,462	臨床試験サポート一式、機器修繕費、講演会謝金等	
(その他)	1,227	システム料、学会参加費	1,227	システム料、学会参加費	
計	19,396		19,396		
アルバイト関係支出					
人件費支出 (兼務職員)	0		0		
教育研究経費支出					
計	0		0		
設備関係支出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)					
教育研究用機器備品	2,287	In Vitro & In Vivo 遺伝子導入システム	2,287	In Vitro & In Vivo 遺伝子導入システム	
	2,730	島津示差走査熱量計DSC-60 Plus	2,730	島津示差走査熱量計DSC-60 Plus	
	3,096	テールサスペンション実験システム	3,096	テールサスペンション実験システム	
	2,100	吸光微量サンプル測定プレートリーダー	2,100	吸光微量サンプル測定プレートリーダー	
	302	超音波破碎装置(TOMY UR-21P)	302	超音波破碎装置(TOMY UR-21P)	
	379	超高速万能ホモジナイザー「ヒスコロン」NS-52	379	超高速万能ホモジナイザー「ヒスコロン」NS-52	
	300	マウス用高架十字迷路	300	マウス用高架十字迷路	
	2,592	リアルタイムPCR解析システム一式	2,592	リアルタイムPCR解析システム一式	
計	13,786		13,786		
研究スタッフ関係支出					
リサーチ・アシスタント	0		0		
ポスト・ドクター					
研究支援推進経費					
計	0		0		